特252
881

良書百選

第六輯

社團法人 日本圖書館協會編

始

露光量違いの為重複撮影

序

わが日本圖書館協會は、昭和六年七月以來文部省援助の下に、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はこれがために特に調査部を設け、調査委員十名をあげて新刊圖書の調査に當らしめ、毎月一回調査委員會を開いて愼重審議の上、推薦したる良書を、「圖書館雜誌」及「讀書」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んで、「良書百選」第一輯を刊行して全國公私立圖書館並に各關係方面に頒布して以來すでに第五輯に及んだのであるが、更に今回は昭和十一年四月より本年三月に至る推薦圖書を收錄して、玆に其第六輯を刊行することゝなつたのである。幸にこれが讀書人にとつて圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懷とするところである。

なほこの機會に於て推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對し、深く謝意を表する次第である。

昭和十二年三月

社團法人日本圖書館協會理事長

松本喜一

特252
881

岩波 英和辭典

獨創的編纂方法に依り根本的に英語學習を簡易化した劃期的標準英和辭典!!

本辭典は、英語の簡易化の問題を理論並に實際の兩面から徹底的に檢討し、五年餘の苦心を重ねて作成せる獨創的辭典にして、英語學習の簡易化に必要なる諸條件を完全に具備し、一度之が發賣されるや我が英和辭典界に一新生面を拓く劃期的英和辭典として諸學校を初め各方面より推賞讃美され、既に其眞價は全く確認せらるるに至つた。編纂は系統的にして、基本語の選定を嚴にし、語義の說明の仕方を改革し、更に解釋と譯語とを區別して原語の核心の把握と活用の自在を期したる等幾多卓拔せる特色を有し、尙本年度版に於ては不規則動詞表及接尾語略解を增補し益々その完璧を期した。

山川義雄 東京帝大教授
土居光知 東北帝大教授
島村盛助 山形高等學校教授
田中菊雄 共著

特價 二・三〇
定價三・五〇 送料一・五〇
ポケット型總革裝
一二七二頁一段組
特價期限五月末日

新版 英和中辭典

新語の大增補・發音記號の改新に依り新時代に愈々其眞價の偉力を發揮す!!

齋藤秀三郎 著
丸善社 理文博 豐田實 補增

齋藤英和中辭典は、譯語の洗練、熟語の豐富、文法の精密、例文の適切、說明の懇切等、卓越せる特色を以てその效用は廣く確認されてゐる所であるが、刊行以來既に二十餘年、この古典的名辭典の利用價値を更に增大せしむべく、豐田實博士に懇囑し、時代の進展に伴つて必要となつた增補を行ひ、此事全く版を新にした。卽ち舊版の優秀なる諸特色を踏襲保存せるは勿論なるも、新語の大增補、表音符の改新等新時代に適應すべく多くの新價値を加へ、今や內容及び體裁と相俟つてその面目を全く一新せしめた。之によつて我國の英語學界に更に一大光明を與へるであらうことを確信する。

特價 三・二〇
定價四・〇〇 送料・三三
洋大判一七二六頁
クロース裝函入
特價期限五月末日

東京神田一ツ橋 岩波書店 振替東京二六二四〇

露光量違いの為重複撮影

序

わが日本圖書館協會は、昭和六年七月以來文部省援助の下に、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はこれがために特に調査部を設け、調査委員十名をあげて新刊圖書の調査に當らしめ、毎月一回調査委員會を開いて愼重齊議の上、推薦したる良書を、「圖書館雜誌」及「讀書」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んで、「良書百選」第一輯を刊行したが、全國公私立圖書館に各關係方面に頒布して以來すでに第五輯に及んだのであるが、更に今回は昭和十一年四月より本年三月に至る推薦圖書を收錄して、茲に其第六輯を刊行することゝなつたのである。幸にこれが讀者人にとつて圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懷とするところである。

なほこの機會に於て推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對し、深く謝意を表する次第である。

昭和十一年三月

社團法人日本圖書館協會理事長

松本喜一

特252
881

岩波 英和辭典

山形高校教授 島村盛助
東北帝大教授 土居光知
山形高校教授 田中菊雄 共著

獨創的編纂方法に依り根本的に英語學習を簡易化した劃期的標準英和辭典!!

本辭典は、英語の簡易化の問題を理論並に實際の兩面から徹底的に檢討し、五年餘の苦心を重ねて作成せる獨創的辭典にして、英語學習の簡易化に必要なる諸條件を完全に具備し、一度之が發賣されるや我が英和辭典界に一新生面を拓く劃期的英和辭典として諸學校を初め各方面より推賞讃美され、既に其眞價は全く確認せらるるに至つた。編纂は系統的にして、基本語の選定を愼にし、語義の說明の仕方を改革し、更に解釋と譯語とを區別して原語の核心の把握と活用の自在を期したる等幾多卓拔せる特色を有し、尙本年度版に於ては不規則動詞表及接頭語接尾語略解を增補し益々その完璧を期した。

特價 二・三〇
定價二・五〇送・一五
ポケット型總革裝
一二七二頁一段組
特價期限五月末一日

新版 英和中辭典

九大教授 齋藤秀三郎
文博 豐田實 補增 著

新語の大增補・發音記號の改新に依り新時代に愈々其眞價の偉力を發揮す!!

齋藤英和中辭典は、譯語の洗鍊、熟語の豐富、文法の精密、例文の適切、說明の懇切等、卓越せる特色を以てその效用は廣く確認されてゐる所であるが、刊行以來既に二十餘年、この古典的名辭典の利用價値を更に增大せしむべく、豐田實博士に懇囑し、時代の進展に伴つて必要となつた增補を行ひ、昨春全く版を新にした。卽ち舊版の優秀なる諸特色を踏襲保存せるは勿論なるも、新語の大增補、表音符の改新等新時代に適應すべく多くの新價値を加へ、今や內容及び體裁と相俟つてその面目を全く一新せしめた。之によつて我國の英語學界に更に一大光明を與へるであらうことを確信する。

特價 三・二〇
定價四・〇〇送・二二
四六判一七二六頁
クロース裝函入
特價期限五月末一日

東京神田一ツ橋 岩波書店 振替東京二六二四〇

目次

第一 哲學・倫理・宗教

孔子の生涯　諸橋轍次 一
印度哲學史　宇井伯壽 二
ソクラテス　後藤孝弟 二
空月集　橋田邦彦 三
日本的教養の根據　日本地人論　佐藤得二 五
東洋倫理學史概說　山口察常 六
家庭・婦人・兒童　高島平三郎 六
教育勅語渙發の由來　渡邊幾治郎 七
佛教の日本的展開　佐藤得二 七
釋尊の生涯　高楠順次郎 八

第二 歷史・傳記・地誌・紀行

更訂國史の研究　總說・各說上・下　黑板勝美 九
明治史講話　渡邊幾治郎 一〇
石黑忠悳懷舊九十年　石黑忠悳 一一
高橋是清自傳　高橋是清 一三
二宮尊德傳　佐々井信太郎 一三
二宮尊德の思想と行績　高須虎六 一三
野の英哲二宮尊德　菅原兵治 一四
晩年の父　小堀杏奴 一五
廣田弘毅傳　澤田謙 一六
隨筆賴山陽　市島春城 一六
明治天皇と軍事　渡邊幾治郎 一七
地名の研究　柳田國男 一八
アルピニストの手記　小島烏水 一八
東北の細道に立つ　齋藤清衛 二〇
京都史話　魚澄惣五郎 二〇
近畿景觀　第六編　近江・山城　北尾錼之助 二一
滿洲から北支へ　神田正雄 二一
永遠への思慕　佐野勝也 二三

第三 法制・經濟・社會・教育

國民政治讀本　馬場恒吾 二三
南進論　室伏高信 二四
文武權の限界と其運用　林彌三吉 二五
現代支那概論—動かざる支那　矢野仁一 二六
現代支那概論—動く支那　矢野仁一 二六
蔣介石と現代支那　吉岡文六 二七
日本外交論　佐藤忠雄 二八
初歩國際讀本　平野等 二九
波高し太平洋　米國とその極東政策　藤岡啓 三〇
民族と平和　矢内原忠雄 三一
一法學者の嘆息　栗生武夫 三三
續法窓夜話　穗積陳重 三三
妻妾論　中川善之助 三四
法學協奏曲　中川善之助 三五
法哲學　尾高朝雄 三六
協同組合研究　本位田祥男 三六
支那民族の展望　後藤朝太郎 三七
子供の道德　波多野完治 三八
育ての心　倉橋惣三 三九
若き友への手紙　野上彌生子 四〇
現代の陸軍　伊藤政之助 四一
現代の海軍　匝瑳胤次 四一

第四 自然科學

天然記念物を探る　大阪毎日新聞社學藝部編　東京日日新聞社學藝部編 四二
天氣と天氣豫報　梶間百樹 四三
日本の星　野尻抱影 四三
昆蟲讀本　中西悟堂 四四
野の鳥の生態　仁部富之助 四五
野鳥と共に　中西悟堂 四六
榮養讀本　鈴木梅太郎　井上豫雄 四六

第五 產業

家の建て方　山田醇 四七
日本庭園史圖鑑　重森三玲 四八

第六 美術・諸藝

日本文化私觀　ブルーノ・タウト著　森儁郎譯 四九
歐洲美術の歷史　エヂプトから現代まで　相良德三 五〇
旅人の眼　川島理一郎 五〇
日本工藝沿革史　金子清次 五一
明日への音樂　須永克己 五三
西洋音樂史　乙骨三郎 五三
茶道讀本　高橋義雄 五三

第七 文學・隨筆

お話のコツ　安倍季雄　五
綴方讀本　鈴木三重吉　五
日本文藝學　岡崎義惠　六
感動と批評　本多顯彰　七
日本文學の世界的位置　勝本清一郎　八
日本文學論素描　志田延義　八
文學の周圍　谷川徹三　九
明治文學管見　成瀬正勝　〇
素月集　尾上柴舟　〇
俳句教程　荻原井泉水　〇
句日記　高濱虛子　〇
渡佛日記　高濱虛子　〇
源氏物語新考　島津久基　〇
眞實一路　山本有三　〇
夜明け前第二部　島崎藤村　〇
英吉利文學點描　小日向定次郎　〇
ゲーテと伊太利　馬場久治　〇
學生と教養　鈴本利貞編　〇
學窓雜記　小泉信三　〇
學窓隨筆　金田一京助　〇
藝林閒歩　木下杢太郎　一

珊瑚樹　小牧健夫　一
散人偶記　佐藤春夫　一
昭和隨筆集第一・二卷　文藝家協會編　一
生活の窓ひらく　新居格　一
涯てしなき道程　田部重治　一
人犬墨　下島空谷　一
隨筆楓　荻集　入澤達吉　一
偏光鏡　辻二郎　一
もめん隨筆　森田たま　一
桃の雫　島崎藤村　一

第八兒童讀物

發明物語と科學手工（日本少國民文庫）　廣瀨豐　一
心に太陽を持て（日本少國民文庫）　山本有三　一
世界名作選（一）（日本少國民文庫）　山本有三選　一

良書百選　第八輯

第一　哲學・倫理・宗教

孔子の生涯

諸橋轍次著

本書はラヂオの「朝の修養」として前後六回に亘り全國に放送された講演の筆記である。七十四年の孔子の生涯を六講に分つて大略年代順に、孔子の人と爲り、還境、思想、教育事業、及び孔子歿後の儒教發達の經路を述べたものである。

我々は孔子と云へば直ちに論語を想ふ。それ程孔子と論語とは切り離すことの出來ないもので、孔子の教へ、孔子の生活記錄はすべて、論語の中に壓縮されてゐると見るべきである。この意味で、本書はさきに同じ著者に依つて著された「新論語講話」（これもラヂオの放送講演）の姉妹篇と見るべきで、前著が論語を中心として儒教精神を說いたと同樣、本書も孔子の生涯を錄することに依つて儒教の根本思想をその中に浮び上らせようとするものである。

孔子の教は平實中正の實際教であつて、別段特別の形式に依る修道を云はず、日常我々の實生活の中に正しきを求めて行く教である。これにつき著者は「道は中庸に存する。水と米の飯とには甘味も辛味もありません。併し、其の特別な味のない處に、實は特別の眞の味が籠つて居ることを忘れてはなりません。私共はこの際矯激を誡め制節を尙ぶ爲にも、特に儒教の如き平實中正の教へを奉じたいと存じます」と云つて今の世に適合する教へであることを力說して居られる。尙

卷末には附錄として「老子の話」と云ふ一文も添へられてあるが、之も名著解說としてラヂオに依り放送されたものである。著者は文學博士で又東京文理科大學教授である。

（昭和一一、六、一七　目黑區中目黑二ノ五八二　章華社
四六判　一八八頁　一・〇〇）

印度哲學史

宇井伯壽著

印度哲學に關しては、我が國に於ても最近種々の研究が可なり進められてゐるが、印度哲學史の全體を綜合的に概觀して適當に纒めた信賴すべき著書は殆んどなかつた。著者は多年の研究に基き、昭和七年岩波書店から發行された同じ標題の著書に於て印度思想の各系統を明にして劃期的の業績を示されたが、之に基き多少壓縮され、簡約にされたものが、日本評論社の現代哲學全集の一として出版された本書である。

本書では、印度思想を正統婆羅門系統・一般思想界系統・佛教系統に大別して論述し、對照的に夫々の特質を明にしてゐる。

著者の說き方に佛教の立場から、佛教の理解を助けるために他の思想系統を研究するのと異り、印度思想一般として、佛教を含めた諸思想系統を研究する態度に基いて居り、この點從來の我が國の多くの印度思想研究家と異り、又多くの資料を支那傳來のものに仰いだ點で、西洋のものと異り、內容の一つ一つに關することは措いてもこの點で既に特色のあるものである。書中術語的な表現が多く、なれない人には多少困難かとも思はれるが、關心を有つ人に一讀を奬める。終りに參考書を擧げ索引を附してある。

（昭和一一、二、一八　京橋區京橋三ノ四　日本評論社
四六判　三五七頁　一・八〇）

ソクラテス

後藤孝弟著

本書は田邊元博士監修の下に京大哲學科出身新進哲學者連の執筆にかゝる西哲叢書なるものの第一編である。

本書はプラトンの初期對話篇を中心としつつ、アリストパネス・クセノフオン・アリストテレス等の記錄を參考として、ソクラテスの生涯・思想及びその歷史的役割を客觀的に明かにせんと試みたものである。「およそ古來の哲學者のうち、ソクラテスほど、その全貌を捕捉し難きものは尠いであらう」と、開卷劈頭に書き記した著者として客觀的な叙述を期するためには、單に文獻に忠實であるのみに止らず、その文獻を通じて眞に客觀的なものを把握しなければならない。そこには鋭い洞察力を必要とするのである。さらにソクラテスの背景をなす當時の時代的雰圍氣を把握しなければならない。それには歷史その他社會科學の知識を俟たなければならないのである。「原稿を讀み返すに當つて、著者は己が力の到らないことを痛感する」といつてゐるが、著者が全力を盡して仕事に當つてゐることは讀者にも心地よく響くところであり、出來榮えは簡潔な好箇の素描とおもはれるのである。著者の意圖する客觀的叙述がどの程度に精到に印刷せられたかは別として、讀者は時代の上に生動するソクラテスを充分に感じることが出來る。

現代はソクラテスを新に想ひ起すべき必要があるやうにおもはれる。現代の思想的混亂は、何かしらソフイストたちの論議せるアテナイの風雲を偲ばせるものがある。こゝに「確固たる客觀的精神」の樹立を希求するとき、われ〳〵の思ひはおのづからソクラテスの上に馳せるのである。本書を奬めることは單に西洋哲學の淵源としてに止らない。

（昭和一一、三、二五　京都市丸太町神田區駿河臺　弘文堂書房　四六判
一八三頁　一・三〇）

空月集

橋田邦彥著

前著碧潭集に次ぎ、昭和八年以後著者の物せる論文・手記等を集錄せるもので、目次は「行餘集」「語錄」「手記」「講話」「音樂雜話」「雜編」「附錄」に取り纒められて居る。

本書の中核をなすものは始めの「行餘集」で諸種の雜誌によせられた長短の感想論文・講演坐談から成つて居る。所收論文の見出しは、

自然—世界像—機と理とに就て—科學の根柢—自然科學の實證性—科學の道—學として科學—自然と人—「生理學」結論—人生の課題—自然科學と哲學—自然科學者と宗教—科學と佛教—自然科學者の求道—唯從自然

となつて居る。各項其の表現を異にしては居るが、要するに科學と宗教との關係に對する著者の信念を披瀝したものと見るべきである。

著者に從へば「人生は自然に包含され、自然は又人生に包含されるのであるから眞の自然科學は同時に人の科學でもなければならない。從つて科學は人生を對象とすると共に人生

の課題であるから何等かの手段によつて人生卽ち生が把握されねばその使命を完うすることは出來ない」ものと說く、而して著者の所謂生の把握とは「一般に考へらるゝやうな生を概念的に規定することではなくして現實を現實として把へ、體驗を體驗のまゝに體得することであつて、これこそ宗教の本義である」とし、科學の根柢に宗教の存することを指摘して居る。

著者は深く曹洞宗祖道元禪師の正法眼藏及び王陽明の知行合一說に參じ、好んで「求道」「學道」「行」等の文字を使用する。しかし是等は必ずしも宗教的な修道の形式ではなくして「自然をあるがまゝなる姿に於て把握することである」といつてゐる。このあるがまゝなる姿の把握といふことは宗教的にいへば「無我の行」である。この立場は事物の觀察を一方的になさんとする現代人の傾向に對しては、適切無比の指導精神でなくてはならぬ。從つて著者が自らの東大生理學の研究室を「自然科學者の道場」と呼び、「唯從自然」をその生活及び研究の基調とされて居る眞摯な態度は、時處位を問はず萬人の實踐すべき眞個の大道であらうと信ずる。

「語錄」と「手記」とは共に著者の深き內省に基づく犀利なる寸言であり、枯淡なる警句から成つてゐる。左にその一、二を摘錄しやう。

「測定は能ふ限り正確にしなければならぬ。但し測定が正確に出來たからと言つて、本當のものが測れたと主張してはならない。」

何事でも最後には「俺」と言ふものが出るからいけない。

「講話」は生理學の學生・醫學會・參玄會等に於ける講演集で、生理學を學び醫術に携はるものゝ精神を高調したものである。行餘集の場合と同じくすべての仕事に從事する人の人生觀・世界觀の樹立に役立つ。「音樂雜話」は專門的のもの、雜篇以下は別に解說の要はあるまい。

大要右の如く本書は世の常の隨筆ではなく、眞實の生活態度・處世の根本精神を語るもの、襟を正しうし、味讀し、體讀すべき絕好の修養書である。

（昭和一一、一一、一〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店
四六判　五八〇頁　二・五〇）

尙ほ著者により時を同じうして「自然と人」なる書が出版された。松本高校を始め各地に於ける講演集であるが、その內容は「空月集」の行餘集と同巧異曲であり、筆者の態度を知るに恰好の書として共に推奬したい。

（昭和一一、一一、一〇　京都市河原町二條下ル　人文書院
四六判　三四二頁　二・〇〇）

日本的敎養の根據

（日本地人論）

佐藤得二著

非常時を標語として國民を警策することは、一時はその效果をあげ得るかも知れない。然しそれによつて眞實の自覺を呼びおこすことは不可能であらう。それは敵愾心を刺戟したり、排外思想の扶植によつて眞の愛國心を涵養することの困難なのと全く同一である。著者はこれ等を單なる憎惡等の副作用に過ぎず、非常時の解消と共に弛緩し、敵のなくなると共に消失し、結局は同胞互に相刻する危險あることを力說してゐる。

然らば眞の愛國心とは何であるか、「眞の愛國心、卽ち敵國外患の有無にかゝはらず、絕えず滾々と湧き出て來る愛國心は、逆說のやうではあるが、自國とか他國とかの對立を超越した博くて深い源泉を得て始めて、吾々の心情は國家百年の、否永劫の大計に堪え得るものとなる。」と述べる。

さうした純眞な愛國心は如何にして涵養せしめられるか。これ本書が答へんとする所のものである。著者は先づ、眞の愛國心は自國の自然的狀態の正しき認識を基調とすべきである、となして先づ日本列島の位置・樣相・氣象・動植物・生命線等に一瞥を與へる。これ等が好條件に惠まれてゐると否とに關はらず、これによつて我等の愛國心はその目標を與へられる。

次に我等は同胞の過去現在及び將來に思ひを致さねばならぬとして、第二章に日本民族の來所を尋ね、使命・國民性への反省を求めて居る。

最後にこの國土と民族の興廢を左右するものは「人の力」に外ならない、としてデンマルクをその危機より救つたダルガスやグルンドヰヒやクリステン・コルの生涯を敍し、我國にも國民的英雄出でよと叫んでゐる。

說明の材料としてあげられた日本列島・日本民族、例話としてのダミエンのモロカイ傳道、デンマルクの話等別に珍らしくはないが、言々悉く愛國の至情、句々皆愛國の文字といつて然るべきであらう。著者は某專門學校の敎授であるといふ。青年の讀物として推奬に足ると思ふ。

（昭和一一、一、五　東京市神田區駿河臺三ノ六　刀江書院
四六判　三二九頁　一・〇〇）

東洋倫理學史概說

山口察常著

本書東洋倫理學史概說は主として儒教思想の成立・變遷を叙述したものである。著者はつとに儒學に對する蘊蓄ある學者として知られ、各大學に於て儒學に關する講義を擔當せる者であるが、本書は主として其の講述を本として、忙中閑を得て更に修文訂正を加へたものである。

今其內容を見るに、先づ著者は支那の史實の梗概殊に思想に關聯して支那歷史を一瞥し、更に著者は支那に於ける倫理思想の系統は孔子を中心とし、その前後に亘る幾多の諸子に由て略一貫した系統が成り立ち、これが東洋倫理思想の本流であり、主潮であるとの見解のもとに其思想の變遷を叙述してゐる。孔子以前の倫理思想を始めとし孔子、孔子の門下、子思、孟子、荀子、漢唐の諸儒、宋代の諸儒、王學及びその先驅の各章に於ては其の略傳、學說が懇切丁寧に叙述してある。更に儒教以外に一家をなすものとして、儒教思想と密接に關係ある道家、法家、墨家の諸子を撰んで附說として、其の思想の梗概を述べて、更に一層、支那思想に於ける儒教の立場を闡明にしてゐる。

本書は各大學・專門學校・文檢受驗者のよき參考書として裨益する所少くはないであらう。

（昭和一一、四、二　神田區神保町一ノ五五　賢文館　菊判　三〇七頁　二・五〇）

家庭・婦人・兒童

高島平三郎著

著者は久しく學習院講師として華冑界の子弟の教育に從事し、心理學の通俗化に貢獻せる人として既に定評ある人である。

本書は著者が將に嫁がんとする松平直亮伯の令孃及び高松宮妃殿下の爲めに、家婦としての日常道德を御講述申上げた稿本に若干の增補をなしたものである。

內容は我國家庭の特色と婦人の地位より說き起し、次に家庭の經濟的方面、家庭和樂の精神的要素、婦道の根源となるべき同情の力につきて平易なる講述を試み、最後に將來の家庭を背負つて立つべき兒童並に靑年についての婦人の着眼點を、各其の心理に立脚して興味深く語られて居る。

本書の特色は、どこまでも該博なる學識と人生體驗を、極めて平明なる說話を以て說かれて居ることで、別に新道德若くは貴族の道德を云々したものではない。

前述の如く本書は貴族の子女に示されたものではあるが、一般子女の教養上にも極めて適切な修養書として推奬するに足ると思ふ。

（昭和一一、五、五　本郷區本郷五丁目二五　平野書房　四六判　二九八頁　一・五〇）

教育勅語渙發の由來

渡邊幾治郎著

本書の著者は人の知る如く前臨時帝室編修官であり、近年來　明治天皇の御聖德に關する著述を次々に出版せられ、時節柄大いに世を益して來られたのであるが、本書もその一つであり、且つ最も貴重な一書といつてもよいものである。

本書は題名の如く、教育勅語の渙發に至るまでの事情を精細に亘つて明示したものである。史料の精確はいふを俟たないところであらう。著者が本著によつて明かにせんと努めた根本の眼目は如何に　明治天皇の深遠雄大な御思召が教育勅語に具現せられるに至つたかの一事である。本書の中でも特に第十四章「教育に關する勅諭の起草を文部大臣に命じたまふ」を拜讀すれば、畏き叙慮のほど靡々と感じられ教育勅語が天皇の大御心の具現であることをまざ〳〵と知ることが出來るのである。

本書は本論といふべき十八章と、ほかに「餘論」四章とより成つてゐる。初めに維新以來の思想情況や教育制度を敍說し、次いで天皇の教育に關する叙慮の御發露を展開して勅語渙發に至り、更に渙發後の御軫念にまで說き及んで本論を結んでゐる。「餘論」は天皇の教育に關する深遠なる叙旨をより一層明かならしめんがために、御修學、教育奬勵の御事蹟、御製等について拜察したものである。

今日非常時における思想の情勢は、恰も勅語渙發前における思想情勢に彷彿たるものがあるとも見られよう。この際本書の如き詳細な著述は、勅語の倫理的解釋や教育的說明にも增して意義の大きなものといふ事が出來よう。眞に貴重且つ有益な著述として推奬する所以である。

（昭和一〇、一〇、一三　下谷區下車坂町一五　學而書院　四六判　二七〇頁　一・五〇）

佛教の日本的展開

佐藤得二著

本書は著者が朝鮮水原高等農林學校の修身科の教材として

數年間に亙つて講述したものを蒐錄したもので、其の跋に次の樣に述べてゐる。

「修身で佛教を說く」といへば、不審とされるかも知れません。學校から宗教を分離しようとする人には、叱られるかも知れません。併し文學や藝術に於てさうである通り、道德思想の分野に於ても、佛教を除外して日本を說くことは出來ません。佛教の教法は、現に多くの誠實な人の胸に宿つて、わが國の道德的骨骼を支へております。特に過去の歷史に於て佛教なき日本道德・日本精神を考へることは絕體不可能と申さねばなりません。故にもし日本國民を養成するには、日本精神を鼓吹せねばならず、日本精神の鼓吹には歷史的說明が最も有力であると致しましたら、日本佛教の少くも輪廓だけは、宗教入るべからずといふ教室に於ても、一應は解說を要するのであります。

これによつて、著者の意圖は十分に伺はれやう。而して著者の中心とする所、親鸞・道元・日蓮の人格及教格の上に日本的のものを見出さうとするにある。そのためには佛教渡來以降の概觀にも、平安の佛教にも一通り觸れなければならず、全體として見るとき鎌倉時代までの日本佛教史概觀の形を取つて居る。然しありふれた佛教史の類ではなくて、憂國の至情と、青年を指導し鼓吹せんとする氣魄は、隨所に橫溢して居る。

本書は固より佛教の專門書ではない。又三宗祖の取扱に於ても必ずしも徹底して居るとはいへない。然し學窓にある頃から自ら要求して居た平易なテキストを自ら物された處に、一般讀者への魅力もあると考へられる。

（昭和一一、九、三〇　神田區一ツ橋二ノ三　岩波書店　菊判　二九六頁　一・五〇）

釋尊の生涯

高楠順次郎著

序によれば『昭和十年四月一日から十月まで「釋尊の生涯」と題して放送されたものにサンチ、バルハット、アマラヴティ、犍陀羅の彫刻、アジャンタ窟院の壁畫、桐谷洗鱗、野生司香雪兩畫伯、伊東忠太博士の畫から、世尊の生涯の場面に適したるものを採り、輕い青年の讀物として』出版されたものである。

內容は悉達太子の誕生—太子の出家—太子の修行—菩薩の成道—世尊の說法—世尊の歸城—世尊一族の感化—祇園精舍の建立—大聖敎化の特性—迦毘羅城の悲運—佛の入涅槃—よりなつて居り一般釋尊傳と大差はない。

就中「大聖敎化の特性」は本書上梓に際して新に書き加へられたもので、釋尊が時代思想の動向に對して取られた平等主義、中道主義、緣起說、業報說、敎團の組織に關して取られた自治主義、一般民衆に對して說かれた互尊主義の要領を說かれて居る。

本書の特色は（一）佛教研究の一權威がその學殖を動員して平易なる釋尊傳を書かれたところにある。（二）大乘佛教の理想的釋尊觀を主とせず人間味のある釋尊を描き出さんとして居るところにある。（三）古來神秘的に傳へられる「右脇出生」「四方七步の宣言」「降魔」「四門出遊」「梵天勸請」等についての著者の見解は各章末の解說に於て懇切に說かれて居る。（四）挿入の三十三葉の寫眞は釋尊の生涯を語るに相應しいものであると共に、佛傳が古今の繪畫・彫刻に與へた影響を知るに足るものである。

大要右の如く大聖釋尊の生涯を平易に叙したものとしては一般に推奬するに足ると信ずる。

（昭和一一、六、一五　京橋區銀座六丁目四　大雄閣　菊判　一六三頁　一・三〇）

第二　歷史・傳記・地誌・紀行

更訂國史の研究　總說・各說上・下

黑板勝美著

國史の綜合的敍述は今日までに可なり多數出版され、特色を有するものも少くないが、研究的基礎の明確にうかがはれ、全體に亘つて充分に信賴できるものは少いであらう。

本書はわが國史學界の泰斗黑板勝美博士が、國史の大體を知らしめ、同時に國史研究の便宜を與へることを目的として著されたものであるが、初版は明治四十一年に發行を見、大正二年改訂增補されて二冊となり、今回更に訂正增補を加へ三冊に分けられたもので、著者の本書に對する熱意がうかがはれる。

全體を通じて著者の國史研究に關する行きとどいた識見が示されてゐるが、特に主要なる研究の紹介に意を用ひ、主要なる論文著書——昭和五年までに發表されたもの——を、それぞれの箇所に於て或は列擧し、或は紹介論評してゐるのは本書の重要なる特色をなしてゐる。研究心ある讀者を益する所は多大であらう。圖版が多數挿入され、敍述は平易明快で

ある。

第一卷の總說は國史研究の基礎的ならびに補助的なる諸問題を解說して、國史研究の手引を與へ、研究の態度を敎へるものである。敍說・補助學・國史の編纂著述・時代史と特別史・國史の範圍・國號と民族・餘說の七章から成つてゐる。各說は通史であつて、上下二卷二十章から成り神代・氏姓時代・公家時代・古武家時代・皇家中興時代・中武家時代・新武家時代・憲政時代の八時代に大別されてゐる。諸種の問題に關しては參考文獻を紹介し、主要なる主張を顧ると共に、偏せざる用意を以て著者獨自の見解を示してゐる。

國史に興味を有する者のみならず、一般にわが文化を根本的に認識しようとする者の、必讀の書といふことができる。

總說　昭和一一、六、二五　五刷　上　昭和一一、九、一　五刷
下　昭和一一、五、二〇　二刷（神田區一橋通　岩波書店
菊判　五〇〇乃至五八〇頁　總說三、〇〇　各說各三・五〇）

明治史講話

渡邊幾治郎著

云ふ迄もなく本書は明治四十五年間の通史である。だが勿論事件の單なる記述史ではない。世界に比類ない大發展をなした明治半世紀の出來事を一々記錄することは本書の樣な小冊子に於てなさるべくもない。こゝに本書の著者は明治史を要約講述するに當つて二つの態度を示されてゐる。その一つは歷史的事實の選述と云ふことで、その意味は次の時代の歷史的展開に何等かの役割を演じた事柄を歷史的事實として選び出すことで、この樣な觀點から取り上げられた題目は、王政復古、之に伴ふ明治天皇の御親政、立憲政治の確立（憲法發布）、條約改正、朝鮮問題、日淸・日露兩役等である。

第二は明治天皇と明治史との御關係に重點を置くと云ふ事である。明治天皇を中心とし奉らない明治史には凡そ意味がないと云ふのは此著者多年の主張である。そして此主張を肯定せしむるに足る著述を、この著者は旣に數冊有つて居られる事は、讀者の旣に承知さるゝ通りである。

實際、明治天皇を中心としての明治史の講述に至つては、長年明治天皇紀御編纂の事に當られたこの著者としては、正しく他の追隨を許さゞるものあり、正確なる資料を如何に豐富に用意せられたかは、一讀直ちに首肯出來るのである。吾々は本書に依つて今更ながら明治天皇の偉大なる御人格が拜察せられ、讃仰・敬慕・感激の念の新たなるを覺ゆるのである。尙本書は東京中央放送局より放送せられた講演を骨子とし、之に前後數章を增補したものであることを附記しておく。

（昭和一一、一一、二〇　京橋區京橋二ノ一一　吉川弘文館
菊判　三七三頁　二・五〇）

子爵　石黑忠悳著
石黑忠悳懷舊九十年

水哉　坪谷善四郎

日淸戰爭の廣島大本營に　明治天皇の帷幕に參し、當時陛下の御聖德の數々を拜して親しく之を語る人は、當時の陸軍軍醫總監にして野戰衞生長官たりし石黑忠悳子爵の外には最早一人も無い。また當時淸國から媾和全權大臣として我國に來り、馬關の媾和談判中に、端なく無謀の一靑年の爲に狙擊せられたる李鴻章が、負傷の爲に本國へ還らんとするとき、勅命を奉じて赴き慰問し、巧みに彼れと應待して、治療を我が佐藤軍醫監に委ねて、本國歸還を留め、世界列國の同情の我國より離れんとするを支へたのも石黑軍醫總監の功で、當時の交涉始末を語る者もまた石黑子爵の外はない。子爵今年九十二歲、尙ほ能く健在にて、其の過去一世紀に近い間の時勢の變遷と、自ら遭遇したる國家の重大事とを、極めて趣味多く、而かも實況を眼前に睹るが如く、自ら筆を執り、又は口授して筆記せしめて成つたのが此書なさうだ。

全篇百六十餘章、何れの章を讀んでも趣味深く、一席の話題と爲すに足るものゝみで、身を小祿士族の家に起し、幼にして父に別れ、嚴格なる賢母に育てられ、後に尊皇攘夷の志士に交はり、幕府の捕吏に追はれ、越後へ遁れて、十七歲の若き身で塾を開いて人に敎へ、後年の井上圓了博士などを養成し、老詩人長井秋水を食客にしたり、十九にしてまた鄕里を出で、佐久間象山を信州に訪ふて劇的會見に一代の偉人を驚かし、江戶に出ては洋醫の家に書生となり、晝は子守や米搗の勞務に從ひ、夜は徹宵書を讀み、和蘭字書の筆寫までして苦學し、終に幕府の醫學所に召出され、維新後は文部省へ出仕し老西鄕の援助に依り英吉利醫學を排斥して獨逸醫學の採用を決定し、更に陸軍省に轉じ、山縣公の手足と爲て徵兵制度を定め、多くの軍醫を養成し、西南戰後には大阪の臨時病院長として數千の負傷兵を治療し、長くも　明治天皇の行幸を辱うし、其後日本赤十字社を創立すべく夫人を伴ふて幻燈技師に代用し、全國を遊說して終に今日同社の基礎を固めたる等の經歷や、乃木大將との親交や、後藤新平伯を相馬事件の出獄後に救濟や、其他上は皇族方より下は中江兆民、三遊亭圓朝等の交際に至るまで、趣味頗る深き上に、何れも處の敎訓たる事實を以て滿たす。協會が此書を優良圖書として推薦せられたのは宜なりと謂ふべしだ。

（昭和一一、二、一一　日本橋區本町三ノ九　博文館
菊判　五〇〇頁　三・八〇）

高橋是清自傳

高橋是清著

高橋翁が我が國經濟界の元老として、老軀を顧みず國家財政の難局に奮鬪し、その暢達の風格にもかゝはらず不慮の災厄に遭つて斃ぜられた悲運は、まことに遺憾といはねばならない。我々は更めて翁の足蹟を顧み、その功績を銘記すべきであらう。

本書は高橋翁の口述を「翁の側近に在ること二十餘年」といふ上塚司氏が筆記し、更に翁の檢閲を受けたもので、「先に東京・大阪朝日兩新聞社より發表されたものを、今回更に全内容を整備し、訂正し」たものであるといふ。翁の生ひ立ちから、日露戰爭前後の外債募集に活躍した頃までを、詳細に述べてある。

翁が晩年の地位と風格とを築かれるまでの前半生はまことに「波瀾重疊、數奇極まる」ものであつた。仙臺藩の寺小姓から選ばれて洋學の修業に志し、慶應三年僅か十四歳で養祖母の許を離れて渡米し、奴隷の境遇にまで陷り、歸國して間もなく大學南校の教師となつたのを始め、幾度か官職を變へ、事業を企て、やがて專賣特許制度の確立に盡して初代の特許局長となり、また忽ちペルー銀山の事業に失敗して落魄に涙を呑み、「小僧からやり直す心を」以て實業界に轉身し、銀行事業に力を致して、困難なる外債の募集に功を成すに至るまで、實に目まぐるしいほどの變轉を見せ、得意・失意・悲喜交々至るの有樣で、近頃めづらしく興味ある傳記である。

しかもこれを通じて、天眞素直なる心情、不屈なる樂觀、人に接して虛心、事に當つて無私なる精神が遺憾なく發揮されてゐる。翁の行蹟をそのまゝ我々の手本とすることは出來ないであらうが、人それぞれの境地・境遇に於て受けとる教訓・激勵は多大なるものがあると思ふ。敍述は平明輕快である。

（昭和一一、二、九　京橋區第一相互館　千倉書房　四六判
八〇六頁　一・八〇）

二宮尊德傳

佐々井信太郎著

著者は報德社の重鎭であり、尊德翁研究の權威である。昭和七年「二宮尊德全集」を刊行した。本書は全集編纂にあたつて思ひ立つた二宮翁事業概觀といふべきものであり、いはば尊德全集の壓縮である。それだけに本書はその事業の記述については群書を拔いて詳細を極めてゐる。生立より終焉に至るといふ傳記體をとつてはゐるが、各地における仕法の次第が特に詳密に如實に記述せられてゐるのである。本書の特色價値も全くそこにあるといつてよい。文書の引用にあたつても、これを現代文に近く書き直し、出來るだけ讀み易くはしてゐるが、本書は必ずしも讀み易く興に乘つて讀みつゞけることの出來る本ではない。むしろ讀むに艱難を感じるほどの本であるが、讀者はこれを忍んで熟讀含味すれば、事業の實際の中にいふべからざる教訓と實地指導の暗示を得ることが出來るのである。本書は尊德翁の一生を丹念に木彫に刻んだやうな印象のものである。

願くは農村青年諸君も進んで本書を繙き、その事業の實際を仔細に探究して、實際生活に役立てるやうにせられたいとおもふ。

（昭和一〇、六、一五　京橋區京橋三ノ四　日本評論社
四六判　六三五頁　二・〇〇）

二宮尊德の思想と行績

高須虎六著

著者は宇都宮高等農林學校教授である。二宮尊德翁の遺跡の多い栃木縣に住むこと十年、その間農村經濟の窮迫を救ひ、子弟を教育する道は尊德翁の教へにあるとの確信を抱いて、その研究に精進して來たといふ。本書は著者の僅かに會得したところを世に傳へて、翁の教への廣く研究せられんことを希ふためのものであり、記述も特に口語體をもつて親しみ易くしたといふ。

第一編「その生立と修養」、第二編「その事業と教化」の二編が本書の主要な部分であり、約三分の二の紙數を占めてゐる。本書の眞價もこの部分にあるとおもはれる。生立より終焉に至るまでの行績が極めて簡明に要を盡して親しみ易く敍述されてゐるのである。實地踏査・著書參考書等によつて著者の感得せるところが平明懇切に壓縮せられてをり、尊德翁の一生の事業とその中に含む思想精神を簡潔によく傳へてをり、初入の書としては理想的な出來榮えを示してゐるのではないかとおもはれる。

第三編は「その思想と教理」編であるが、これは「先生の

思想」「發展觀」「至誠觀」「人道觀」「報德の道」と分けて、翁の思想・教理を特に抽象して說明してあるので、おのづと無理があるのではないかとおもはれる。著者も認めるとほり、翁の思想はその體驗・事業の中にあるのであるから、抽象的說明は特に困難とおもはれる。

餘編として「後を繼ぐもの」を概說し、さらに「先生の風貌」として、本書の卷頭に揭げてゐる數葉の寫眞について解說を與へてゐることも親切であり、最後に「年譜」を附けてあるなどすべて整つたものであり、內容形式ともに好箇入の門書であるとおもはれる。

（昭和一一、二二、一　神田區小川町一ノ一　高陽書院　四六判　三五八頁　一・六〇）

野の英哲二宮尊德

菅原兵治著

日本精神の勃興と、農村問題の擡頭とが時代の聲となつてゐる時、日本的農村指導者二宮尊德と、日本的農村指導原理たる報德敎とが國民注目の焦點となり、報德運動が一世を風靡するの觀を呈するのは偶然ではない。

本會に於ても昨年來佐々井信太郎著二宮尊德傳、高須虎六著二宮尊德の思想と行績の二冊を推薦したが、此處に菅原氏のものを更に加へようと思ふ。

本書の特色とする處は、前二者が傳記を主とするに對して、翁の思想を最もよく傳へてゐる二宮翁夜話によつて、其の人物・敎學の眞髓を把握せんと努めた點にある。

著者は從來の二宮研究が『兎もすれば、二宮翁を「學ぶ」といふ心よりも「利用」せんとする態度の見えること、』『「餘りにも功利化し、通俗化してしまつた』ことを深く遺憾とし、謙虛に二宮翁に學び、躬ら之を行はうと努力し、眞摯にその敎に參すべきを力說して居る。

更に著者は報德敎を常識敎の如く取扱ふ態度を排して、翁の所謂「神儒佛正味一粒丸」に着眼し、二宮翁の研究をもつと豐かなる東洋學的基礎の上に立たしめなければならないと述べて居る。著者は、

『二宮尊德といへば從來多くの人々によつて勤儉貯蓄の化石の樣に、如何にも窮屈に目せられて來た憾がある。一體之に就ては小學校の國定敎科書の罪もある。あの程度の記載では二宮尊德といふものを精々「柴刈り縄なひ草鞋を作り、……手本は二宮尊金次郎」位にしか知らしめ得ないではないか』

と述べてゐるが誠に同感である、斯うした敎科書によつて養はれて來た人々は、到底翁の眞の偉大さを知ることは不可能であらう。

我々の心を打つものは、難工事櫻川の堰作業に對する左の報德記の記事である。

『初め此の役を擧ぐるや、始終多く酒餅を設け、酒を好む者は之を飲め、酒を好まざる者は餅を食せよ。惟々過酒すべからず、過酒すれば用を爲さず。半日働いて止めんとする者は一朱を受けて家に歸つて休むべしと。役夫大いに悅び、其の勞を忘る。時人此役を唱へて極樂普請と云ふ』

筆者はこの一句によつてあやまれる從來の二宮觀を是正することが出來た樣に思ふ。この他二宮翁の敎學の原理論に引用された報德記の記事は、翁の神儒佛に關する敎義の理解を物語るものである。

著者は菅谷山莊にあつて身を以て農村青年を指導し、二宮研究に專心しつゝあるの人、翁の敎學・人物を簡潔にまとめられた特色あるものとして推したいと思ふ。

（昭和一一、三、二八　赤坂區表町三ノ二四　新英社　四六判　一九五頁　一・二〇）

晩年の父

小堀杏奴著

近代日本文學に於て日本性と世界性とを綜合した大文學者であつた森鷗外博士が、いかにその文學と生活を結びつけやうとしたかを知ることは興味あることに違ひない。小堀杏奴女史は森鷗外博士の次女で、十四歲にしてその父と永別された。この書は女史の幼時の思ひ出、就中そこに大きな影を投げる慈父のおもかげを綴つたものである。與謝野寬氏の雜誌「多柏」に連載されたものが、こゝに一冊に纏められたのである。

「晩年の父」「思ひ出」の二篇には、杏奴の幼なかりし日に旦夕接した鷗外博士其人の生活を子供らしい驚きの眼を以て眺め、博士が家庭に於ける人間味、周圍の人々は勿論、花・鳥・犬等に與へた美しい愛情を物語つてゐる。それは實に美しい表現で、父をなつかしむ心に滿ちてゐて、讀む者の胸にやさしい愛情を湧かせるほどである。

最後の「母に聞いた話」は鷗外博士夫人の口から折にふれて語られた、父との結婚生活の小話を綴つたもので、小倉師團軍醫部長時代以後の博士の生活が物語られてゐる。

全體として女らしいやさしい筆で、父鷗外博士との情操豐かな交涉が記され、博士の床かしい人格が偲ばれるものである。この種の著書の中では好ましい書物であると思ふ。

（昭和一一、二、一〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判　二五二頁　一・五〇）

廣田弘毅傳

澤田　謙　著

政治には時の勢がある。無暗にこれに逆ふものは沈められる。だから廣田氏は首相としてこの一年間、舟を時勢に任せて流されながら、時來らば舵を操つてわが目指す彼岸に漕ぎ着けんものと努力したに違ひない。けれども遂にその時到らずと悟るや、直ちにいさぎよく身を引いたものと思はれる。

二・二六事件の直後、廣田氏が一死報國の覺悟で起つた時、われわれ國民は廣田氏に可なり多くを期待したのだつた。しかし、廣田氏は遂に充分それに應へる事が出來ないで了つたやうだ。世には廣田氏の實行力の缺乏を言ふ者もある。だがわれわれの今日要求する實行力とは眞に正しい世界を實現する爲めの實行力以外のものではないのだ。それは智慧と正義感とに充ちた實行力でなくてはならない。恐らく、今日の時勢の下にあつては、何んな政治家が出たところで、われわれの求めるやうな正しい世界が直ちに實現され得やうとは思はれぬ。時の力を待たねばならぬからだ。われわれは、充分に廣田氏の今日の立場を諒察すると同時に、今後に於ける同氏の健在にこそ、より大なる期待をかけて然るべきだと思ふ。何となれば、眞に賴るべき政治家を廣田氏に於て見る事が出來るからである。

廣田氏がわれわれにとつて親むべくまた賴りになる政治家であることを見る爲に、澤田氏の健筆になる「廣田弘毅傳」の一讀を廣く薦めたい。そこにはむつかしい理窟は抜きにして、石屋の倅としての貧苦の少年時代から、非常時の帝國を背負つて立つ總理大臣に至るまでの廣田さんの人間があからさまに描き出されてゐる。本書を讀んだ人は、きつと廣田さんが好きになる。しかも、それと同時に一方尊敬と信賴との念の起るのを禁じ得ないであらう。

本書は平明を旨とし、且つ興味深く書かれてゐるから、尋常科上級程度の兒童にも面白く讀まれるし、また事實は正確な資料に基いてゐるから、相當教養の高い讀者層にも意味深く讀まれ得る。

（昭和一一、一一、一一　牛込區市五軒町五四　歷代總理大臣傳記勇刊行會　四六判　二九五頁　定價普及版〇・七五）

隨筆賴山陽

市島春城著

此書は大正十四年初版を出し、當時洛陽の紙價を高からしめたもの、卷末に收錄された和田萬吉博士と內田魯庵氏の批評紹介は遺憾なく眞面目を傳へて居る。讀者は先づこの部分から這入るのが便宜であらう。

所謂功成り名遂げ、悠々自適　老を養つて居られる春城翁は近時、年に一・二冊宛の隨筆を讀書界に送つて居られるが、山陽研究に於ても亦依然その手を緩めては居られない。昭和二年第七版以後の涉獵を追加し三六版を改めて四六版とせられたのが本書である。標題下に記された「改訂決定版」の文字は翁の命名か否かは不明であるが、翁の山陽研究も一先づこれを以て完成したと見てよからう。翁の數多い隨筆中最も異彩あるものとして迎へられるのも偶然ではない。

山陽その人が現代人にどの程度に訴ふるかは疑問である。殊に青年學生の如きは日本外史を讀破する機會と興味を失つて居る。然し山陽はこの國の憂國史家として又愛國の詩人として永久に國民の誇りとしてよい人物の一人である。著者は山陽に對する褒貶の極端論を斥けて次の如く言ふて居る。

私は、山陽を以て最も國民に親しみのある先輩とするものであつて、山陽に買ふ可き處は常識があり、人間味があり、多趣味・多藝で、且つ頗る氣格の高い處にあると思ふ。從つて一概に之を崇拜することを非とすると共に、その若い頃の瑕瑾を、いつまでも叫んで之を罪することを欲しないと思ふ。私は、山陽を國民的性格を遺憾なく發揮した愉快なる文豪として大衆と共に親しみ、且つその人氣を長く續けたいと思ふ。

と。著者の意圖はまた本書推薦者の意圖でもある。

（昭和一一、六、一九　杉並區高圓寺六ノ六五九　輪墨同好會　南有書院　四六判　六一八頁　三・〇〇）

明治天皇と軍事

渡邊幾治郎著

明治天皇が不出世の英主に在まし、國利民福に大御心を注がせ給ひしことは、敢へて此處に喋々の要を認めないところである。

本書は前帝室編修官たりし著者が、軍事に關する大帝の御事蹟・御精神を取りまとめたものである。第一部「明治天皇と國軍」は徵兵令の發布、軍人勅諭の渙發、平時の大演習、近衞師團の完成等に關しての御事蹟を述べたものであり、第二部「明治天皇と日淸戰爭」第三部「明治天皇と日露戰爭」はこの國を賭しての兩役に際して、天皇が如何に宸襟をなやまし給ふたかを如實に記述したものである。

その內容は斷片的には或は教科書に或は御製に、或は其他

の記錄によつて人口に膾炙されて居ることではあるが、細部に亘り叙慮のあるところを具さに物語り、これを一本に收められて居るので、皇軍今日の基礎を築き給ひし不拔の靈慮を拜するには洵に、好適の書である。

今や國家超非常時に際會し、肅軍の聲又都鄙に喧傳せらるるの時、大御心を回顧し、軍民一致・聖恩に對へ奉ることは臣子の本分ではあるまいか。敢へて本書を推す所以も亦此處にある。

（昭和一一、五、八　京橋區三ノ一　千倉書房　四六判　三九三頁　一・五〇）

地名の研究

柳田國男著

我々は單に見聞する地名ばかりでなく、極めて密接な關係のある地名さへ、それがどういふ意味を有つた名であり、どういふ由來を有つてゐるかを知らないでゐる場合が大多數であらう。然し如何なる地名と雖も漫然と付けられたものはなく、何等かの程度にそこに住む人間の生活に關係ある意味を負うてゐることは言ふまでもない。しかも我が國の地名は、著者によれば極めて多く、他國に類を見ないほどであるが、古來からの殆んど無數ともいふべき地名を調べて、正確なる結論を導き出すことは決して容易でない。從來とても或は地理學上から、或ひは古代語の研究等に關聯してなされた研究もないではないが、極めて少く、殊に地名の原意を尋ねて、それを裏付けた人間生活の一面を示さうとする試みは稀なものと言ふべきであらう。

著者は周知の如く、わが民俗學の創始者、地名の研究はその文化人類學の一部としてなされたもので、從來所々に發表されて來たものを本書に纏めたのである。著者が地名の問題に手を染めてから三十年といふが、その間の苦辛は得難いものである。讀者は地名の意義、地名研究の方法、地名に使用される主要な言葉の意味等の一斑を知ることができ、單に地名に興味を有する者のみならず、鄕土研究家、ひいてはわが國人の生活文化の研究者に役立つ所は多大であらう。

（昭和一一、一、一八　神田區駿河臺二ノ一〇　古今書院　四六判　三五二頁　一・八〇）

小島烏水著「アルピニストの手記」

田部重治

今日の日本の登山熱の旺んな狀況を、過去二三十年以前の登山の有樣と比較して考へると、全く隔世の感がある。さうなつたことを色々と考へて見ると、一つは時勢であるとも考へられるが、も一つは「日本山岳會」が組織され、雜誌「山岳」により、講演により、登山熱を鼓吹したことが、大きな力となつたことにも歸せられなければならないと思ふ。最初の山岳會員はどちらかと云へば、學者であり學生であり、是等の人々の趣味が自然にそれからそれへと波紋をなして傳はり、それが今日のやうな旺盛な登山の現狀を招致したことも勿論のことである。

しからばこの山岳會を創設する原動力となつた人は誰であつたと云へば、色々の人を數ふることは出來るが、其内にも特に大きな力となつた人は、小島烏水氏其人でなければならないと思ふ。

小島烏水氏と云へば、世人はややもすれば嘗て登山家であつた人位にしか思はないかも知れないが、氏は嘗て日本文壇に「帝國文學」や「早稻田文學」等の僅かな雜誌しかない時に、青年雜誌「文庫」の記者として幾多の青年の血を沸かしたのは、今より三十五六年以前のことである。當時の氏は旅行好きな登山ずきな人として時々、旅行文の發表をやつたが、多くの人は寧ろ氏に文藝批評家として期待してゐた。

しかしさうしてゐる内に、氏はラスキンや英人ウエストン等の影響により、追々、文壇から離れて、登山家として、又、登山文學者としてはつきりした轉向を示すやうになつた。

「アルピニストの手記」は小島氏が登山者としてはつきりした轉向を示すに至つた動機を物語つてゐる上に於て、又氏に影響を與へた色々の人間や書物を物語る上に於て、最も興味深いものであり、或る意味に於て、登山家としての氏の自序傳とも見るべきものである。

勿論、小島氏は是等の動機、氏に影響を與へた人間・書物・繪畫等に就て、自序傳に系統的に物語つてゐるのではない。しかし是等の斷片的にかかれたものによつて、われわれは系統的に考へ、組織的に見ることが出來る。そしてそこに多大の興味を見出すことが出來る。

外に此の著には他には見ることの出來ない貴重な圖版や挿畫が多く這入つて居り、何れも興味深いものである。又、注意すべき考證もある。例へば今日誰も上高地と書いてゐるのは誤であり、神河内でなければならないと云ふ說の如きそれである。これなどは最も傾聽に價ひするものである。

要するに此書は日本に於ける新しい登山の開拓者として、小島氏の自序傳として登山界に寄與するところ多いものであり、日本の登山歷史を知らんとする者に取つては勿論のこと、

山の隨筆を讀まんとする人に取つては、その最も優れたものの一つとして推奬するに價ひすると思ふ。

（昭和一一、八、二〇　京橋區新富町三ノ七　書物展望社　菊判　三一二頁　二・八〇）

東北の細道に立つ

齋藤清衛著

「地上を行くもの」「はてしなく歩む」に次ぐもので、これは東北地方の行脚記錄である。三部作中では、その優れた素材の故に最も興味あるものであらう。重厚な東北の山河と風物は無限の魅力を藏してをり、流石に簡潔と餘韻に富む著者の筆致を以てしても、なほ力足らざるの憾みがある。

陽春四月南千住を起點として日和下駄に踏破する全行程五十餘日。白河關址を越え、磐梯山麓を福島に、仙臺・松島を經、國境を越えて山形に、更に雪の湯殿の山頂を究め、鶴岡・酒田を經て八郎潟に、道を轉じて十和田湖・奥八瀬・蔦溫泉より三本木に、更に荒涼たる下北半島に入り、恐山に攀じ、大畑に下つて津輕海峽を望んで筆を擱いてゐる。なかにも雪の湯殿山・八郎潟・蔦溫泉・下北半島の各章が最も印象深く、著者の旅情は行間に脈打つて止まない。東北の紀行數多くとも本書の如くその核心を掴んだものは類すくないであらう。

（昭和一〇、一一、五　日本橋區通三ノ八　春陽堂　四六判　四七七頁　一・六〇）

京都史話

魚澄惣五郎著

著者の「はしがき」に「出版書肆の希望もあつて、やゝ輕い意味の讀物にしようとて稿を起しましたが、結局こんな堅苦しいものとなりました」とある。內容は「平安都城の經營」「京都市域の變遷」「京都と庶民の生活」「吉野朝廷時代の京都」「室町時代の京都の商業」「應仁大亂前後の京都」「信長・秀吉の京都復興」「江戸時代における洛東豐國廟」「京都人の特性」の九篇、就中王朝時代の庶民生活を說いた第三篇は詳細に亘つて、最も面白い。第五篇は經濟史研究上にも好箇の參考となるものである。各篇何れも廣く資料を涉獵して微細に亘り、流石は專門史家の態度を失はない。しかも學究的無味を免れ、趣味的に立入つてゐる著者の意圖は充分に窺はれる。第三篇乃至第六篇は事實を知らせる以上に、情景を彷彿として浮びあがらせるほどである。「應仁大亂前後の京都」なども、いろいろ事實の記錄を述べる間に、慘たる荒廢の京都が眼に見える感がある。

一千年の長きに亘る帝都として政治・文化の中心たりし京都の歷史はたゞに史家のみならず、我が國民の看過すべからざるところである。本書は著者の言の如く、學究的で、少しく堅くはあるが、好箇の史話書たるを失はないであらう。

（昭和一一、四、一　目黑區中目黑二ノ五八二　章華社　菊判　三〇〇頁　二・八〇）

近畿景觀

第六編　近江・山城

北尾錄之助著

阪神附近、大和河內、近代大阪、紀伊伊賀、京都散歩の五大雄篇を讀書界に送つた近畿景覺はその第六編として近江、山城篇を刊行した。既に前五篇の一冊でも手にした人にとつてはこの新刊の發行を傳へる丈で十分であるが、著者の麗筆とカメラワークとは愈々其の進境を見せ、今や景觀文學の第一人者として烙印をするに十分である。

近江國は東海・東山・北陸への要衝で史上幾多の話題が殘されて居る。「歷史は風景を決定するものではなく、寧ろ風景認識には有害となることもあるので必要以外は、なるべく避けたいのだが……」と著者は述べて居るが、歷史的な背景が地名の上にも風景の上にも見えざる景觀を形づくるのでないであらうか。景觀を單なる自然の線の交錯と見るならば、名も知られてない邊陬の地に近畿以上の景觀があるかも知れない。斯う考へると史的な背景が豐富であればある程人の感興をそゝるものが多いやうに思はれる。追憶や詮索の興味に深入りしすぎると、史蹟行脚や旅行案內に墮する嫌がないではないが、聰明なる著者はこの點に深い注意を拂つて居る。

何といつても近江の景觀は、徹頭徹尾琵琶湖に關係して居る。近江商人や近江聖人を始めとして近江蚊帳までも琵琶湖によつて居るといふのはあながち著者の獨斷ではあるまい。琵琶湖を中心とする風景が著者の隨筆によつて如何に展開されるであらうか。

（昭和一一、三、一五　芝區二本榎西町二　創元社　四六判　四一二頁　二・〇〇）

滿洲から北支へ

神田正雄著

滿洲・北支に關する著述は所謂汗牛充棟も啻ならぬ狀態である。然し一部分に偏せず、又警見に終らず、大所高所より

これを觀察し、局に當る主要の人物と會談し、國策の遂行を阻害する行動に對して所信を卒直に語る本書の如きは、蓋し多くはないであらう。

目下物議の中心となつて居る成都に中國人の教育にあること數年、又某新聞の北平特派員として在平十餘年に亘り、滿洲・北支を恰も第二の故郷とする著者の滿洲觀・支那觀には獨特のものゝあることは否定することが出來ない。

內容は第一篇滿洲國（滿洲國內縱橫の旅—主要人物と會見して語る—建國から今日までの概況—滿洲國視察感想）、第二篇北支那（奉天から北支指して—北平の遷り變り—冀東政府の首府通縣—山西省への旅—察哈爾省の訪問—河南から西安へ—北平から天津を經て山東へ—北支の要人は語る—北支の價値—北支と列國の關係—日支兩國の關係—北支はどうなる。）附錄。

目次は本書の內容を遺憾なく表はして居る。就中滿洲國の主要人物たる張景惠・鄭孝胥・丁鑑修・臧式毅・駒井德三諸氏、北支の要人たる宋哲元・雷嗣尙・曹汝霖・陣中孚・邵力子・韓復榘・殷汝耕・陶希望・賈氏・趙氏等との會見記は簡單ではあるが、日滿支國交上の重要なる基礎論を包藏して居るかに見える。著者の滿洲北支の將來觀は卒直には語られては居ないが、これ等の會見記及び視察感想記を見る時決して樂觀論者でないことは明瞭に觀取される。

言ふまでもなく滿洲は我が生命線である。この生命線を眞の生命線たらしむるには、そこに釀成されつゝある幾多の問題に對し、國民は深く思ひを致さなければならないものが少くない。この點についての著者の批評觀察は、取つてもつて他山の石とするに足るを信ずる。

（昭和一一、六、二五　淀橋區下落合三ノ一三六七　海外社　四六判　三七〇頁　一・五〇）

永遠への思慕

佐野勝也著

「この書の大半は、私が昭和五年から翌年冬にかけて、ヨーロッパを旅行した旅の印象記から成つてゐる。」と序にあるやうに大部分旅行記である。しかし他の一般の紀行と異なるのは、常に永遠を思慕してやまぬ著者の感覺をして描き出されて居る點である。

「東洋の憂鬱」では亡びゆく東洋人のいたましい姿に心をいため、東洋の覇者としての日本人の使命の重大さをしのび、「私の英國發見」では英植民地や英本國に於ける英國人の生活行動の根柢には今尙英國民の優秀國民の素質が深く包藏せられて居ることを述べ、不潔な巴里、質實なフランスの農民の如き一般の觀察とはその趣を異にしてゐる。

「スキス、イタリアの旅」や「ベルリン見聞記」には多くの旅行者が見逃しがちな、人情の機微をつかんで居る。

「聖フランチエスコを生んだアシシの町」「永遠の都ローマ」「ルツターの町ウイツテンベルグ」の遊歩の如きは、この方面を專攻する著者の忘れ得ぬ感銘が盛られて居る。

最後に記されて居る「ナチス治下の宗教鬪爭」の一項は、日本のそれに對比して頗る興味がある。この國に於ては旣成教團は殆んど無批判に爲政者や權力者に迎合しようとし、爲政者は一方邪教退治に狂奔してゐる。ナチスの教會政策が悉く成功してゐるとはいへぬ。しかし宗教に對する積極的な態度は顧みられてよい。これに對する旣成教會關係者が十字架の下に堂々對抗の氣勢を擧げ、又國民的民族的自覺を中心として、「ドイツ的信仰運動」が活潑な動きを見せて居る點は、大いに教へらるゝところ尠くはない。

この外「自叙傳を讀む興味」「生と死の問題」「ドイツにおける大學改造論」等も色々の意味に於て、讀者を益するところ大なるものがあらう。

（昭和一一、七、一　麴町區三番町一　第一書房　四六判　二三〇頁　一・五〇）

第三　法制・經濟・社會・教育

國民政治讀本

馬場恒吾著

本書の著者は學者ではないから、こゝに集められた政治評論も、全體として理論的に深刻なものではないかも知れないが、それだけに却つてよく全體的な見通しが利いてゐて、一般大衆の理解に訴へるところが大きいのだともいへる。

思ふに、或る國に正しい政治が行はれる爲に最も必要なのは、少數の偉大な政治家でも、また高遠な政治理論でもなく、國民全體の政治常識であり、就中その政治に對する熱意である。

聊か例を本書の內容から惜りつゝ說いて見度い。

支那の民衆は家業にはなかなか熱心ではあるが、政治には極めて冷淡な國民である。稅金が安くて商賣が出來さへすれ

ば、誰が出て來て何んな政治を行はふが、彼等には別段文句はないらしい。朝廷の變ることなど、支那の人民には大して痛痒のある出來事ではないのだ。

これを別の側面から見れば、國民が政治に冷淡なことが、朝廷を二十何代も變るやうな支那の國柄を作つたのだ、とも考へられる。萬世一系の天皇を戴くわれわれ日本人から見れば、支那人の如き、まさに亡國の民だといはなくてはなるまい。

英國は今日立憲政治の最もよく行はれてゐる國であるが、そこでは工場から歸る職工達が、三々五々政治を語りつゝ行くのが見られるし、政治的緊張の時には、田舍町の四つ角などで知名の政治家が、五人六人の街の人をつかまへて眞面目に政治を說いてゐる光景も珍らしくないさうだ。フランスでも巴里つ子達は、街角のカフエーあたりで、一杯のコーヒーを啜りながら、二時間も三時間も頑張つて政治論を戰はすのだといふ。そして、この街の政治家達の人氣で政府の政策も左右されるのだ。そこに、輿論が正しい政治に對する批判として力を有つてゐる。

然らば日本では何うであらうか。政治の動きに對する、元老や重臣の殿堂內に於ける勢力に比して、街の聲——輿論の力を想ふとき、われわれは聊さかならず寂しさを感じない譯には行かない。

若人よ、もつと政治に熱意を持て、そして政治を街頭に引き出せ、それが、われわれの國に明るい政治の行はれるために是非必要なことなのだ。

本書は一般國民の政治に對する熱意と常識との增進に資する爲に書かれた讀本である。多くの人々に讀まれんことを切望する。

（昭和一一、二、三　麴町區丸ノ內丸ビル內　中央公論社　四六判　四四四頁　一・〇〇）

南進論

室伏高信著

大陸政策か、南進政策か、今日、日本は何よりも先づこゝに確乎たる方針を立てゝ進まなくてはならない。

本書は題して「南進論」といふ。旗幟極めて鮮明である。聊さかも時勢に媚びんとする風はない。われわれは必ずしも本書の所論を全面的に是認し得るものでない。しかも、この著者の自信と情熱には、强く打たれない譯には行かないのである。

殊に對滿策を中心とする對支並に對露策は、今日われわれの直面する最も重大な問題であつて、その重要性に於て決して南進政策に席を讓るものではない。寧ろ大陸政策こそ日本が、東洋の平和、從つて世界の平和を保證せんとする君子國としての使命を果すべき所以の王道である、と考へられるのである。

けれども、日本の自ら王道と信ずる大陸政策は、世界の殆んど凡ての國々から、侵略政策と誤認されつゝあるのを見るとき（四十二對一はその表明であつた）われわれは少くとも、此著者と共に一應の反省をするところがなくてはなるまい。

要するにこの著は情熱の書である。燃え上る情熱を以て一氣呵成に書かれたが故に、强くわれわれの胸を打つものがあると共に、多少一面に偏した說き方がなされてゐる嫌がないとはいへない。

しかし、われわれは、その强調された一面の眞理を學びとると同時に、その否定された他面に於て、自己批判の一層價値多き機會を捉へることが出來ると思ふ。

日本をして眞に日本的な正しい方向に進ませることはわれ等日本國民の、わけても日本青年の世界的な責任であると共に、またその最大の誇りでなくてはならない。

本書は、この如き青年の自覺を促すに役立つところが大であらう。

（昭和一一、七、二〇　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　四六判　三三一頁　一・〇〇）

文武權の限界と其運用

林彌三吉著

著者は陸軍中將で戰術家として令名がある。嚢に大楠公を崇敬し、其の事蹟を研究し、これが普及に全力を傾倒されて居る。楠氏の盡忠報國の大精神が史乘に燦然たる光を放つて居ることは、三歲の童子もこれを知つて居る。が著者が特にこれを顯彰せんとする所以のものは、現下武人にして政治に關與するもの多きを憂へ、大楠公が湊川戰に臨むに方り、克く文武の道を正し、日本武人の本領を發揮せるに思ひを致し、これが力說强調に力を致すがためである。

「第一篇　滿洲問題に就て」に於ては文武の限界及其運用の根本思想として、明治大帝が國軍の創設にあたり示し給へる「文武の正當なる道を明かにし、文武その職に恪循すべし」との聖旨を述べ、武人の本領を說き「對滿政策遂行の爲め先づ文武の道を直せ」と結んで居る。

「第二篇　隣國としての支那」に於ても武人の政治外交干與をいましめ、文武の職分について再言してゐる。

「第三篇　楠正成公の事蹟」は著者の觀察に基づく湊川戰の眞意義を述べたもので、勅命を奉じ一死報國の志に燃えた楠公が武人としての職分に殉じた忠烈が躍如として居る。楠公の偉大さは、敗戰を覺悟のこの湊川戰に於て見らるゝのである。かくてこゝにも楠公が文武權の峻別について範を示して居る事を指摘して居る。

言々憂國の文字皇軍のあるべき道を縷述して居る。著者の云ふ所は現役軍人の政治干與を非とするものであつて「武人の政治干與は丸腰で」といふことを繰返して居る。隣邦滿洲國及び支那に對する國策の遂行上、武人といはず文人といはず、憂國の士の一讀すべきものである。

（昭和一一、九、二五　赤坂區青山南町二ノ五四　兵書出版社　四六判　一六四頁　・七〇）

現代支那概論—動かざる支那

矢野仁一著

現代支那概論—動く支那

矢野仁一著

日華の關係は正に運命的である。從つて兩國人は好むと好まざるとに關はらず、永劫に密接なる交渉を持續するの外はない。然るにその關係を圓滑にして、所謂東亞永遠の平和を確立することの必要は、既に久しく强調されたところであるが、舊態依然として相剋する所以のものは、果して何に基づくであらうか。筆者はこれを兩國人の相互理解の不足に歸すべきであらうと考へる。相互の理解は啻に爲政者の外交的辭令によるべきではなくして、兩國民性の根本に觸れ、歷史的事實に裏づけられたものでなくてはなるまい。

著者は現代支那論者の二つの型——昔日の支那に非ることを說くもの、其の舊態依然たるを說くもの——を檢討し、その何れも支那問題の一面觀に過ぎずとなして居る。

而して「支那問題の複雜性は世界歷史の潮湧の如く押寄せる大勢の力と、數千年來積疊せる歷史的傳統の力とが同時に支那に働きつゝあるがためである」といつて居る。前者卽ち世界の大勢に基づく支那の一面を「動く支那」に於て觀察し、後者卽ち歷史的傳統に彩る支那の一面を「動かざる支那」に於て檢討して居る。

「動く支那」の樣相は主として支那の邊疆問題並に對外關係である。此處には「一國領土の要求に反し、國の主權によらず、或は國の主權が行はれないといふことの爲めに、政治上・經濟上・軍事上等において列國と種々の關係を生じつゝある」所謂邊疆問題を歷史上及び現實の事情から詳細に論究して居る。「滿洲は支那の領土にあらず」との命題が著者の歷史的研究の結論として生れるのは所以なしとしない。

「動かざる支那」には主として支那の社會・政治に關する組織並に思想を史的に考察して居る。此處で我々の最も多く教へられる點は支那の德治主義と共和政に就いてゞあらう。德治主義の帝政は淸朝によつて一旦其の終結を告げ、新に共和政治が實現したが、その共和政治は熱烈なる國民の輿望卽ち支那人の深い自覺に基づいて生れたものではなく、從つて帝政時代の惡政を、そのまゝ繼承してゐることを詳細に述べ「眞の共和政治を建立する爲めには支那全國の人民が否が應でも一致協同してこの困難を排除するだけの決心をなさなければならぬ」と結論して居る。これ等の論策は寧ろ民國人への反省の資とすべきであるが、同時に我國人にもかくの如く透徹せる支那觀があつたならば、兩國提携の將來に資することは尠くないであらうと考へる。

而して、この「動く支那」と動かざる支那觀は相待つて著名の現代支那觀を完くするものであることは言ふまでもないが、我々はより多く「動かざる支那」についての理解を深めることが、隣邦の理解に貢獻するであらうと思ふ。

何れにしても、支那研究の權威たる著者の論策は、目下の日華關係整調の基礎として、我が國人の大いにきかんとするところであることを思ひ、江湖に推したいと思ふ。

（昭和一一、三、二一　神田區駿河臺三丁目一　目黑書店　四六判
現代支那概論—動く支那　三〇四頁
現代支那概論—動かざる支那　三〇八頁
各二・三〇）

蔣介石と現代支那

吉岡文六著

支那問題はなぜこんなにわかりにくいか。それが先づ問題となり得る。あたりまへのことのやうだが、支那問題は支那の現實に卽して具體的に考へられることが、何よりも先づ必要なのである。そしてこのあたりまへのことが、實は今日の支那問題の批評に最も缺けてゐるのではあるまいか。

若し、支那の現實をまのあたりに見るものは、恐らく支那を一個の獨立した近代的國家と考へることを躊躇するであらう。

なる程、最近支那は蔣介石西南工作着々効を奏し、更に新聞の傳ふる所によれば、蔣介石は進んで北支にも工作の鋤を

入れんとしてゐるといふ。かくて、全支は今や日毎に蔣介石の獨裁的權力の下に、統一されつゝあるが如くに見える。

しかし、試みに蔣權力の背後からソ聯邦を除き、英國を除き、米國を除いて見たら、後に何が殘るであらうか。多少の言ひ過ぎを敢えてするならば、支那とは、蔣介石の武力と財力とを中心として、日・露・英・米の各國の勢力が巴の如くに相錯綜して、互に咥み合つてゐる狀態であると定義することが出來るかも知れない。要するに今日の支那は、蔣介石の支那であると共に、英國の支那であり、米國の支那であり、ソ聯の支那であり、そしてまた日本の支那である。そこに獨立した中華民國といふ國家――少くとも近代的國家――は存在しないのである。

この現實をはつきり握んで支那問題を見る者のみ、よくその眞相に觸れることが出來るのだ。

徒に歐米流の國家概念を振りかざして支那問題を論ずるものは、謎の國支那を前にして、いつまでも腕を拱いてゐなくてはならないであらう。

本書の著者吉岡文六氏は東京日日新聞の記者として永らく支那にあり、よくその現實を見て來た人である。本書の正しい立場は「蔣介石と現代支那」といふ表題からも、充分に察せられるであらう。

（昭和一一、六、二〇　本郷區曙町一一　東白堂書房
四六判　二五〇頁　一・五〇）

日本外交論

佐藤忠雄著

本書は有爲の前途を惜しまれながら昨年夏、病の爲めに急逝された在米大使館二等書記官故佐藤忠雄氏の遺著である。

氏は歐洲に在勤せられたこともあり、また多年外務省情報部にあつて國外國內の情勢に通曉し、殊に情報部第三課長として國內の外交知識普及に力を盡し、講演にラヂオに一般國民に呼びかけると共に、世界の輿論の指導にも多大の貢獻をせられたのであつた。

本書もまた、かゝる努力の過程に於て生れ出たものに他ならない。

著者が本書に於て述べんとするところは「日本外交の本質的態度といふ種のもの」であり、これによつて一方國民に自國の外交に對する認識と信念とを養成すると共に、他面外國の日本外交に對する疑惑を一掃し、正しき輿論を啓發せんとするものである。

著者は先づ第一章に於て、日本外交政策の沿革と現狀を概說し、これによつて外國の誤解宣傳にもかゝはらず、日本の態度が如何に終始一貫非侵略的であり、平和を熱望し來つたかを證據立て、歐米諸國の日本外交に對する「依然たる治外法權的解釋」を以て東洋平和を攪亂する一切の禍根であると斷ずるのである。

次いで第二章に於て帝國外交の基調を檢討し、進んで日本外交の進路如何に說き及ぶ。著者はこゝで日本外交の動向に於ける二つの過誤を認める。一は日本主義を曲解して結果的に偏狹な孤立外交に墮する排他的見解であり、他は協調精神を誤解して追隨を事とするセンチメンタリズムの態度である。殊に今日のインテリ階級間に多く主張せられる誤れる理想主義的平和論は、この著者の極力警告するところであつてこれは、文化の美酒に泥醉して日本精神を失へるものとせられる。例へば滿洲事變に際して示されたインテリ階級の言動の中には、正にかゝる意味での「ヒステリー」的人道主義の現れと解すべきものがあると、この著者は慨嘆してゐる。

第三章では更に筆を進めて、日本外交の汎世界性が說かれる。日支關係を中心として動く外交舞臺は實は日英關係であり、日米關係であり、日露關係でもある。更につきつめれば、それ等の動きの凡ては、結局は世界の歷史的必然の發展の各種相に他ならないのである。ファッショの出現も、ナチスの擡頭も、そして滿洲國の成立も。かくて世界は今や「武裝の平和」の下にをのゝいてゐる。歷史は繰り返す。世界は再び一九一四年前の狀態に返つたのだ、と著者は叫ぶのである。

終りの二章は最近に於ける國際關係並に情勢の鳥瞰で、著者の該博な知見がそこに遺憾なく展開されてゐる。

外交問題に關心を有つものはもとより、一般國民は是非本書を讀んで、日本外交の基調を正しく把握して欲しい。

（昭和一一、一二、五　京橋區入舟町三ノ二　國際經濟研究所　四六判　二五二頁　二・〇〇）

初歩國際讀本

平野等著

世界大戰後十八年、世界の外交界は再び破局に瀕してゐるやうに見える。毎日の新聞を見ると世界の政局はまるで蜂の巢をつゝいたやうな有樣である。第二の世界大戰はほんとに避けられないのだらうか。愈々そうなれば、何時頃、そして、何所と何所とが戰つて、何所と何所とが味方になるのだらうか。

動搖に動搖を續ける世界の情勢を前にして、人々は唯、危惧の念に驅られるばかりで、はつきりと正しい見通しの上に、

乎確たる決心と態度とをもつて望む事は難かしいらしく見える。

しかし、試みに顧つて、第一世界大戰及びベルサイユ條約締結當時の世界の情勢をつぶさに吟味し、爾來その大勢が如何に推移し來つたかを考へるならば、われわれは、そこに必然的に相對立する世界の二大勢力の分立を看取せざるを得ないのであつて、一度かゝる觀點の上に立つて、再び世界の政局に眼を注ぐならば、その騷然たる動搖の中に、自づから動くものが動き、進むところに進んでゐる經緯をはつきりと認めることが出來るのである。

本書は、國際知識には極く初歩の人々の爲に平易を旨として書かれたもので、ベルサイユ條約後ヨーロッパ勢力の二分對立から說き起して、最近スペインの內亂に至るまで、世界の動きを歷史的に鳥瞰したもので、誰にでも面白く讀めて、しかも、これだけのことを知つて置けば、日々の新聞に現はれる國際記事を見る眼は大いに變つて來て、それに對する興味も倍加すること必定である。

著者は「世界知識」の主幹として、國際知識の大衆化には充分の經驗を有する人、資料も豐富で、所々に漫畫や地圖が挿入されてゐて、讀者の眼を休めて與れる。

唯、慾をいへば、國際動向の思想的意義について、も少し突きこんだ說明が欲しかつた。

今後の世界の動きは、其思想的背景を度外視しては決してほんとにはわからないのである。

（昭和一一、八、二〇　本郷區曙町一一　東白堂書房　四六判　本文三九四頁　附錄一八頁　一・四〇）

波高し太平洋

米國とその極東政策

藤岡啓著

われわれは決して太平洋を距つる米國と事を構へることを好むものではない。また日米の間に今日戰爭で解決しなくてはならぬ程の差迫つた問題は一つもない筈である。それだのに、率直にわれわれの氣持をいふと、何かしら米國が氣に喰はないのである。

最近の日本の國際的のし方は、正に世界の驚異であらう。それはアメリカにして見れば、恐らく日本が感じてゐる以上に氣に喰はんことであるに相違ない。そしてこのお互に、氣に喰はんといふ國民的氣分こそ實は大いに曲物なのであつて、諸々の行動的なものがしばしばこの上に踊らされてゐるのである。これまでも、われわれは幾度日米戰爭來を口にしたことか。

軍縮會議は當然のことながら、悉く失敗に終つた。米國は無論日本海軍を假想敵として、その太平洋作戰を進めることであらう。

われわれは今日米國を恐れる必要は少しもない。けれども米國を知ることは此の上もなく必要である。兩國民の間に動く氣分の何から來るかを知る爲に。戰爭を無用のこととして米國民と手を握る爲に。そして不幸戰爭の避けられなかつた秋にわれわれが勝つ爲に。

この目的の爲に、卽米國をよく知る爲に必讀の一書として本書を推す。著者は大每及び東日の記者でニューヨーク特派員として永く米國に滯在した人、自序の一節に「本書の目指すところは、二十世期の一大怪物たる米國の政治・外交・軍事を日・滿・支の視角からメスを加へると共に、米國の經濟帝國を俎上にして、米國對日滿支の通商經濟關係を研究し、云々と」以て本書の抱負と內容とを察するに足るであらう。

（昭和一一、四、二一　麴町區有樂町一ノ一一　東京日日新聞發行所　四六判　五三〇頁　一・五〇）

民族と平和

矢內原忠雄著

史家は嘗て世界大戰の原因として、當時歐洲諸國を風靡した民族主義を指摘したのであつたが、今日に於てもまた民族主義は愈々支配的となりつゝあり、それは更に來るべき第二の世界大戰の原因をなすのではないかと憂へられてゐる。

若し民族の自覺が、たゞ自民族の優越性のみを强調するものであり、他民族との對立意識・競爭意識のみの上に止るものであるならば、民族主義は必然に帝國主義に發展すべきものであり、更にそれは軍國主義と聯結すべきものであらう。

かゝる意味での民族主義の支配する世界にあつては、戰爭は不可避の宿命であるといはなくてはなるまい。

イタリーのファッショ、ドイツのナチス等は明らかにこの意味での民族主義の現れである。

我國に於ても滿洲事變以來、日本精神の復活がしきりに叫ばれてゐる。それはいふまでもなく民族的自覺の結果に他ならない。がその聲の中に、われわれは何かしら重苦しいものを感じない譯には行かないのである。

しからば、民族主義は本質的に平和とは對蹠的なものであ

り、反動的なものである他はないのであらうか。

實はこゝで、民族或は民族主義の語を常識的に漠然と用ひたのであるが、著者に從へばわれわれが民族主義として考へてゐる運動の中には、思想的社會的一面と、政治的軍事的一面との二面が含まれてをり、また民族とか國民の語の用例も一般に不明確なのであつて、これ等を充分明確に研究しくなては、民族主義に關する諸問題を正しく理解することは出來ないのである。

等しく民族主義といふものゝ中にも民族國家の民族主義あり、植民地民族主義あり、又帝國主義國の民族主義がある。そして反動的なるはこの最後のものなのである。著者は本書に於て上述の諸點を檢討して、民族主義の有つべき進歩的意義を明らかにしてゐる。

思ふに、民族主義が或國家に於て如何なる發現形態をとるかは、これをその國に於ける資本主義の發展段階に於て理解し得べしとする事も一理あるであらう。しかしわれわれは、それよりも文化史發展の起る地盤としての國民精神に、一層の重要性を認めたい。それは「教育せられ訓練せられ洗練涵養せらるべきもの」なのである。

かくてわれわれは著者と共に叫びたい「進歩主義者が民族を戰ひ取るとき民族主義は始めて進歩的となり、平和主義者が民族を戰ひ取るとき、それは平和となる」と。

（昭和一一、六、二五　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判　三七〇頁　一・八〇）

一法學者の嘆息

栗生武夫著

今の世の有樣を眼のあたり見て、長大息するもの、豈ひとりこの法學者のみに止まらうか。

現實の世界は、もろ〳〵の不合理なものゝ場として、非ユークリッド的な歪曲を受けてゐるものと考へることが出來ないであらうか。

そこでは正しきものは、正しきが故に、却つて正しく立つことが出來ないことになるのではなからうか。

法律の目的は正義にあるといはれる。しからば、法律家こそは飽くまでも正しきものを正しからしめる任務を有つものといはなくてはなるまい。しかも、正しき言葉は動々もすれば、世の耳に逆らふ今日なのだ。法律家たるもの惱みなくしてあり得やうか。

「法律を學んで法律に安住すること能はず、政治を憂へて政治を動かすこと能はず、病んで死すること能はざる一個の學徒が、折にふれ、時に應じて洩らし來つた感慨の小錄である。收むるところ短章五十篇、法律論あり、政治論あり、論壇時評あり、時としては身邊の雜記、女給論、戀愛論などもないではない。

けだし、時事に對して率直な發言を禁じられてゐる苦惱の兒が、時として風流世に背き、自狂人と離れたい氣持になるのも、これまた一つの心理的必然ではあるからである。」と著者は序文で漏らしてゐる。

かゝる苦惱を克服する爲めに、然らば法律家は何を爲すべきであらうか。徒らに嘆息これを久しふする事は、もとより法律家の能事ではあるまい。また、われわれは今日われわれの無力を卿つ必要は斷じてないのだ。われわれの一人々々があくまで眞面目であり、正義への情熱を失はない限り、やがて世界は自づから正しき姿をもつて、われわれの前に現はれるであらう。

本書を、單に一法學者の嘆息として讀むに止めてはならない。その底に潜む烈々たる正義への情熱を讀み取ることが大切なのだ。

（昭和一一、一〇、一五　京都寺町丸太町　東京・神田・駿河臺　弘文堂書房　四六判　二七九頁　一・五〇）

穗積陳重博士の「續法窓夜話」を讀む

宮澤俊義

法律の本はつまらないもの、無味乾燥なものと昔から相場がきまつてゐるやうである。事實僕の經驗からいつても法律の本であまりおもしろいものに出會したことはない。どれもこれも申し合せたやうに片假名で文語體で、しかもはなはだしいのになると濁りもつけず、句讀點も打たない。この頃はだん〳〵平假名で口語體の本が多くなつたが、それでもとかく學者といふ者はたゞむづかしく分りにくゝ書くことが「學術的」だと考へるくせがあるので、大體において法律學者の書くものはむづかしくて分りにくい。また分つたところでおそろしくつまらない。

この點で例外を爲すものゝひとつに穗積陳重博士の「法窓夜話」（大正五年）がある。これは法律學に關するアネクドーツを集めたもので、いづれもきはめて有益な話でありながら、肩のこらぬやう輕妙に書かれてゐる。僕なども學生時代に耽讀したものである。その續篇が「續法窓夜話」として先日公

にされた。これは陳重博士の令嗣重遠博士の編纂に成るもので、さきの「夜話」と同じやうなアネクドーツ百話を集めたものである。そのはじめの半分は陳重博士が書き殘されたもので、後の半分は陳重博士の「法律進化論」のうちから重遠先生がひろひ出されたものであるといふ。

收められたアネクドーツは古今東西にわたつてゐる。固いものもあれば軟いものもある。「最も條數の多い法典」といふやうな好奇的な話もあれば、「片聽の陪審員」といふやうなユーモラスな話もある。さうかとおもふと「學者の眞勇は怯懦に似たり」や「骨董屋の論法と看屋の論法」や「諱に關する疑」のやうに一般に學問研究の態度についての注意もある。いづれも讀んでおもしろいだけではない。そこにきはめて有益な教訓が含まれてゐる。その意味でそれらは單に法律學に興味をもつ者だけでなく、一般知識階級のひろく、一讀すべきものであるとおもふ。

西洋に『笑ひながら眞理を語る』といふ言葉がある。穗積陳重博士の「續法窓夜話」こそまさに『笑ひながら眞理を語る』ものといはなくてはならない。

（昭和一一、二、神田區一橋通　岩波書店　四六判　一三三九頁　二・五〇）

妻妾論

中川善之助著

「法律は家庭に入らず」といふ法諺があるが、家庭内の問題は、なるべくならば義理や人情に任せて置く方がよいのであつて、これを頭から法律問題とすることはもとより愉快なことではない。況んや男女間の問題を法律的に考へるなど、聞いたゞけで凡そ野暮な話だと思はれるかも知れない。

ところが本書は「妻妾論」といふ表題からも察せられるやうに、我が國の家族制度並に婚姻制度を背景としての男性對女性の問題が全篇の中心を貫いてゐるテーマなのであり、またこゝに「論」とは法律論に他ならないのである。嘸かしぎこちなくて水臭いものだらうなどゝ思ふと大間違ひ、ひとたび本書を繙く人は、その法律論のあまりにスマートで且情熱に滿ちてゐるのに目を瞠ることであらう。

本書に收錄されてゐる二十三の短篇は、昭和五年から昭和十年までに雜誌新聞等に發表されたもので何れも一般大衆を對象として書かれたものである。試みに目次の内から主なものを拾つて見れば「現代民法と女子の生活權」「妻妾論」「内緣の法律意義」「Companiate Marriage」「結婚解消に孕まれたる諸問題」「結婚無軌道時代と現代家族制度」「現代離婚論」「試驗離婚の提唱」「民法改正案批評」といふ如く何れも一般性ある重要性をもつたものばかりであり、從つて今日の教養ある一般人士の充分な興味と關心の對象たり得べきものばかりである。中でも「試驗離婚の提唱」の一篇はそれ自身一つの試論で尙檢討の餘地は大いにあると思はれるが「離婚の輕卒」を幾分でも救ふ方法として決定的な離婚の判決を下す前に一應別居判決を與へるといふ考へ方は確かに面白い思ひ付きで、世の識者の一考を煩はすに足る問題たり得るであらう。

（昭和一一、一、一二　東京丸ノ内　中央公論社　四六判　二九二頁　一・五〇）

法學協奏曲

中川善之助著

『法學協奏曲とは隨分洒落た標題だなあ』之がこの本を初めて手にする人のきつと口に出す言葉だ。「凡ゆるリズムとメロディが、法學といふ樂器によつて表現され、其法學的に表現される音樂を社會といふオーケストラが伴奏してゐる」といふのが、この本の名のいはれである。

同じ著者の隨筆集「妻妾論」は、さきに本誌でも紹介した。本書は、それに漏らされたもろ〳〵の短篇を集めたものである。

先づ目次を見ると「法律家は人がいゝ」といふのが眼についた。ハテナと思つてそこを讀んで見たら、矢つ張り詰る處は「法律家世間知らず」の例話だつた。なる程、ほんとによい法律家である爲めには、世間の凡ゆる面と層とを見つくさなくてはならないのだとつく〴〵思ふ。

本書は、著者が眞面目な法律家として、日常諸般の問題に不斷の注意を拂つてゐるところから生れた副產物なのだ。著者もそのはしがきで「よくもこう色々とあちこちのことを問題に取り上げて來たものだ」と述懷してゐるのである。

内容を筆勢或は文意の緩急によつて、一、アレグロ、二、アンダンテ、三、アレグレットの三部に分つ。飽くまでも音樂ばりといふ譯だ。アレグロの部にまた「音樂家と法律家」といふ一文がある。一見何のかゝはりもなさゝうなこの兩者の間に著者は奇しきまでの類似を認める。「音樂は生活に潤ひあらしめるものゝ一つであり、法律は生活に整ひあらしめるものゝ一つである。生活を乾燥と蕪雜とから救ふ一つの道はこの二者に理解を持つことである。……何れか一方に理解ある人は僅か視野を轉ずることによつて他方を理解し得る程兩者の間には相似點がある。」といふのである。けだし、この兩

者をその人柄に於て結ぶ著者の筆が、讀者の胸に快よく響くこと誠に故なしとしない。

（昭和一一、一〇、一〇　日本橋通三丁目一　河出書店　四六判　三四七頁　一・五〇）

法哲學

尾高朝雄著

今日の不安の世相の下に於て、青年達は何を爲すべきかに迷ふ前に、如何に考ふべきかに迷つてゐるらしく見える。

今日彼等に最も必要なものは、理論にも實踐にも、迷ひなき方向を示すに足る人生觀の基礎となるべき哲學であると思ふ。しかもその哲學の關心は、從來の講壇哲學に於けるが如き抽象的形式的な論理の問題に止るべきではなくて、人間存在の問題、わけても、道德・法・國家・政治等、社會及び歷史の生きた問題が中心となるのでなくてはならない。

法哲學は、この故に、獨り法學を志す者に必要な知識であるばかりでなく、苟くも現代の不安を克服して信念ある生活に精進せんとする眞面目な青年の充分の關心に値するものである。

本書の內容は三部に分たれてゐる。緖論は法哲學の概念の說明で、先づ人間の生活に於ける實踐の態度と、理論の態度との區別から始められる。第一篇は、法哲學の傾向の概觀で、簡潔の文字の中に過去及び現在の法律思想を深き洞察の下に極めて把握的に解說してゐる。第二篇で、著者は特に純粹法學に對する、より深き理解と、現象學の最も正しき理解の上に立ちつゝ、法の本質、法の目的、法の方法等、法哲學の最も重要にして興味深き諸問題に關する著者獨自の見解の展開を試みてゐる。この編に於てわれわれは、法學上に啓發されるところの大なるはいふまでもないが、その上に、現下の世相に就ても、種々敎へられ且考へさせられるところがある。

知識偏重の弊が不當に强調され、精神科學界は萎微沈滯し、わけても法學界は麻痺狀態を呈してゐる秋に際し、學界の一角に於て、この著者の如き新進氣銳の青年學徒によつて、着々法學再建の作業の進められつゝあることを見るは眞に意を强ふするに足ることゝいはなくてはならない。本書を讀んで、著者の一しをの自愛と健闘とを祈るの念を禁じ得ない。

（昭和一〇、一二、一八　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　四六判　一三二頁　一・八〇）

協同組合研究

本位田祥男著

本書は著者が學術雜誌・一般雜誌・組合運動機關誌及び新聞紙上に發表した諸論文を組織的に纏めたものである。著者は協同組合研究の權威者であり、其研究は二十年の長きに及んでゐる。

本書の內容は「協同組合の思想と理論」「消費組合の諸問題」「農村と協同組合」「反產運動批判」「協同組合と政治運動」「統制經濟と協同組合」の六篇から成つてゐて、協同組合に關する問題を網羅し、理論實際の兩面に亙り、首尾よく整つて出來てゐる。

本書を一貫してゐる著者の思想は、愛の基礎に立つ協同の世界を實現せんとする協同組合の發達を促進し、農村振興國民生活の向上を熱望するにある。本書は協同組合の根本理論を確立し、廣く實際問題に亙り、學者的論究と改革者的論策とを兼ね備へ、所論現實に立脚し、理想を離れず、適正を得てゐる。

本書は協同組合に關する全般的組織的研究であるが、論述平明であつて、懇切に理路を盡し、難澁なものではない。知識階級一般の讀書に適してゐるが、わけても農村における協同組合當事者、更生運動を背負つて立つ農村青年の必讀を希望したいものである。協同精神の理解は現下改革の氣運に際し、國民の重大な關心事であらねばならぬとおもふ。本書はこれに稗益するところ多大であると信ずる。その意味で、本書が文部省から推薦せられたことは當然といはなければならない。

（昭和一一、三、二五　神田區小川町一ノ一　內神田ビル　高陽書院　菊判　五〇二頁　三・五〇）

支那民族の展望

後藤朝太郎著

いつも支那服をつけて飄々乎として支那大陸に往復去來してゐる著者は、支那の實生活に卽した民俗の委を常に咫尺のあたりに目にしてゐる。それ故支那の衣食住には慣れ親しんでゐるやうに、その國民性民俗性には絕えず新たな理解と親炙とを感じてゐるに相違ない。前著「支那文化の研究」からすでに十二年を經て「支那民俗の展望」として、その年來の實地踏査により蓄へられた蘊蓄を傾けられたことは、意義のある仕事といはねばならぬ。

それは、著者も知つてゐる如く、支那に關する我々の知識は經籍詩文の上にのみ限られて、その色彩の引立たなくて、臭い韮蒜の氣分のする、實生活方面のものとなると、等閑視された傾きが多分にあつた。本書はその缺を補ふべく著者が

視、聽き、觸れた支那實社會の狀態、衣食住からみた彼の大陸の民俗生活を具體的に述べたものである。身邊の支那風懷から說き起して、支那服に現れた國民性、支那卓上の五味八珍から味覺を通じてみた彼地の姿、また住宅、婦人、細民の生活に至るまで、その實狀をつぶさに傳へて餘す所がない。四百餘州を股にかけて遍歷した著者の見聞錄として、水村山郭の風俗、習慣、民情の實相、田夫漁翁商賈工匠たちの間の年中行事、冠婚葬祭、慰安娛樂の一切に亙り、奇習あり珍談あり、興趣盡きざるものがある。加ふるに犯罪支那の展望、土匪海賊の研究あり、支那經濟生活商取引の實狀まで述べられてゐて、陰慘な民族として觀られ勝ちな支那にも、案外明るい場面もあることが窺はれる。

日支關係が白熱化せる今日に於て、支那の實狀を知り、その生活の實相を究める上に、本書の如きは最も適當の良書といふべきである。

（昭和一一、五、一八　神田區神保町一ノ二七　富山房
菊判　七五四頁　三・〇〇）

子供の道德

波多野完治著

序によると、本書はスキスの心理學者ピアジエの著「兒童の道德判斷」（一九三二年）を紹介したものである。紹介と言つても、著者はピアジエの著述を次々と讀んで甚しく感激せられ、感激の餘り、難解な原著の日本化と、同時に通俗化を計つて本書が出來上つたのであるから、ピアジエの學說がよく咀嚼されて再現されてある事は、一讀直ちにそれと窺へる。

ピアジエは心理學者であり、又教育學者でもあるが、その研究方法が多分に社會學的であることが、著者の序の中に見えてゐるが、本書を讀んで行く中に、全くその感を深ふする。從來道德教育、又は新らしい教育運動と稱せらるゝものゝ上で屢々口にせらるゝ「自由」を批判して、ピアジエは「あたへられた自由」と言つてゐる。言ふ意味は、大人は子供より一段高い所にゐて子供に自由を與へてゐる。大人は常に子供に對して優越者の氣持を失はない。そこで「大人に對する尊敬、大人を優越なものと考へることが、子供の心に倫理學者の所謂結果論、ピアジエの言葉をつかへば、道德的實念論を發生させる（序の中より）」と言ふことになり、子供は全ての行爲を結果に從つて判斷して動機の問題を考慮に入れないことになり、結局道德的には餘り望ましいことではないと言ふ結論をピアジエは得たとのことである。

こゝでピアジエは「子供は眞にたゞしい道德觀をうゑつけるには、子供と大人とが同一水準に立たねばならない。大人も子供も同じ一個の人格として相對し、一つの協力的な社會をつくつたとき、眞の道德が生れる。」と言ふ結論に到達したのである。

本書は內容を「あそびの倫理學」「あやまちの倫理學」「嘘の倫理學」の三つに分つてあるが、「あそび」と言ふのは、子供の世界は「あそぶこと」でつきるので、全て道德と言ふものが人と人との關係の中で成立して來る關係上、子供にとつては「あそび」こそ最も切實な人と人との交涉の場合であると見るのである。この「あそび」の中に、子供の道德判斷の研究を求めやうとするので、「あやまち」「嘘」何れも同樣である。

記述は實例を多く用ひて平易に理解せしむることに注意されてあるが、それでも未だ通俗書の域には達せず、小さい本ではあるが相當努力を以て讀むべきである。兒童教育にたづさはる人々には是非一讀を薦めたい。

（昭和一一、七、二〇　神田區駿河臺三ノ六　刀江書院
四六判　一九五頁　一・〇〇）

倉橋惣三氏著「育ての心」について

青木誠四郎

この書は子供と親とについて、又育ての心についての一篇の詩であり、直觀の記述である。著者の所謂「實際と實踐のまゝに卽して書いた實感の書である」內容を分つて「子ども達の中にゐて」五〇篇、「母ものがたり」九篇、「子どもの癖しらべ」八篇、「子どもの心」六篇、「子どもの相手」八篇、「名畫の子ども」一二篇、とし、四六判三九二頁のうちに溢れる實感が盛られてゐる。

まづ、子どもについてのこの書の記述は、子どもの生活の雰圍氣を描き、子どもの心のありのまゝの姿が、軟い手で觸れた思ひで、よくよく味はゝれた思ひで描かれてゐる。そこには日向ぼつこをして無心に玩具を弄んでゐるやうな愛すべき子どもの姿が、自ら讀者の心のなかに浮べられるやうな筆觸があるのである。子供の心を味ひ、子供の心を感じ、子供の心もちに觸れること、これが著者が子供に對ふあらゆる人に求めてゐるこゝろであるが、その心もちが、直ちにこゝに盛られてゐる「子供の詩」にもられてゐるわけである。

次に親のこゝろもちとして著者は、理智と意志とに偏ることをいたるところで警めてゐられる。いはゞ著者の主情主義とも名づけて見られる主張が、はつきりと描かれてゐると言はれる。實際著者のやうに所謂インテリのお母さん達に常に接せられて、いろ〳〵な問題をもちこまれいろ〳〵な事件に

遭遇されると、この理智と意志とには、ほと〳〵困ぜられてゐることだらうと感じ、それとこれとを考へ合せて見ると、母親達のともすると理智と意志とに偏するこゝろが、この書の叙述によつて溫かに溫はされて來ることを思つて微笑ましく感ずるのである。子供の心の問題は、たゞ知ると言ふことでは、ほんたうにわからないものなのである。殊に子供の心の斷片的な知識をもつことで、子供の心がわかつたなどゝ思つて子供に接してゆくことは大きい誤りである。この點から、著者は子供を育つてゆくこゝろは、子供の心に觸れて、溫いこゝろでこれに對し、子供と共に生きて愛育を樂しむこゝろのうちに、子供が育てられなくてはならないとするのである。かゝる點についてのこの書のこゝろもちは、よく著者の筆致のうちに表されて、讀むものゝこゝろに自らな同感を與へることであらう。

かやうにしてこの書は、育てのこゝろを論理の外におき、溫かな感覺と軟かな感情とのうちに求めやうとする態度によつて描かれてゐる。全篇を通じて現れる子供の心の感じ方、親の態度の考へ方を味ひながら讀むことで、人々は自らの心に、子どもの心を感じつゝ育てのこゝろを味ふことができやう。まことに育兒の重い勞作に溫ひを與へる書だと言ふべきである。

たゞ著者の抱懷する感じと味はひとの感情（センチメント）の世界だけで愛育の問題が解決できないことは、既にこの書にも考へられてゐることであるが、また考へなくてはならぬ問題をもつてゐはしまいか。理智の過剩に惱む心はまた、理智の貧困に惱むことをも反省しなくてはならぬものがあるからである。そしていまの愛育にどちらがその惱みを重くしてゐるかをも、また考へて見なくてはならないのである。

（昭和一一、一二、八　神田區駿河臺三ノ六　刀江書院　四六判　三九二頁　一・五〇）

若き友への手紙

野上彌生子著

これは「子供の研究と教育叢書」の第八編として刊行されたものである。この叢書は教育家や心理學者たちの擔當執筆になるものゝやうであるが、その中でこれだけは紅一點とでもいふべき作家の文集であり、異彩を放つてゐるものである。この叢書中にこの書を加へたことはいろ〳〵な意味で、まことに當を得てゐるとおもふ。人間觀察の眼をもつてゐる作家、わけても子弟の成長・教養に並々ならぬ注意と關心とを示してゐる著者の、時にふれて書かれたこれらの文集には、一般の教育論や心理學說には求められない貴重なものが含まれてゐるのである。

內容は「小學生の母へ」「若い女教師へ」「農村の母と子に」「山の家から」「若い娘をもつた從妹へ」「パンドラの箱（少女期の誘惑）」「山の家から」「若い甥について從妹へ（ある夫人に代つて）」「若い友へ」「娘へ」「青葉のたより（X—夫人へ）」といふやうな題目の十一篇から成つてゐる。著者は「はしがき」でかういつてゐる。「最初にはつきり斷つておかなければならないのはこれらの手紙は實在の人に與へたのではないと申すことであります。はじめの數編は雜誌兒童に、あとのものは婦人公論と中央公論の求めに應じて、この四五年來の險しい社會的な事相に對しての感懷を架空の人物にあてゝ書き送つたもので、取り扱ひ方は個人的になつてゐても、それに含まれてゐる主題は誰にも考へて頂きたい、また恐らくは多くの人々の思念にのぼつたことであらうと信じます。」

われわれは著者の如き高度の教養と體驗とをもたれる人の子の母が、現代の日本に存在することに何かしら歡びを感じないではゐられない。この書は小冊子ながら、著者の理解と愛に輝く豐醇な言葉に充ち滿ちてをり、忘れがたい感銘を讀者の胸に殘すのである。世の子弟の母たる人々に、是非讀んでもらひたいものである。

（昭和一一、一二、一　神田區駿河臺三ノ六　刀江書院　三五判　一七二頁　・五〇）

現代の陸軍　伊藤政之助著
現代の海軍　匝瑳胤次著

世界大戰で戰爭の慘過を深刻に體驗した歐洲諸國はもとより、近時米國や支那に於ても、平時並に戰時に對して、國防の見地からそれぞれ國家總動員の組織制度を確立し、また大學其他の學校には戰爭學・國防學等の講座を設けるものも少からずあつて、國を擧げて所謂「國防國家」の實現に努めてゐる。

我國でも最近非常時意識の現はれとして、國防を主眼とする國策が特に重要の地位を占め、一方一般國民の間でも、國防問題乃至軍事問題が眞面目な關心の焦點となりつゝあることを見るのである。

われわれはこゝで必ずしも近き日に於て某國との間に戰爭が起るか否かを問題にする必要があるのではない。國防・軍備は決して戰爭のみを目的とするものではないからである。しかし、戰爭を目的としないといふことと、一朝某國との間に戰爭の起るべき日を豫想するといふこととは全く別問題

である。國防・軍備は相對的のものであるから、或特定の一國又は數國を「想定敵國」とすることによつて、何が合理的な國防乃至軍備であるかが具體的に考へらるべきは當然である。そして、民族的・傳統的・地理的・經濟的等の諸條件は、かゝる想定敵國を定むる標準となるであらう。

かくて、われわれは先づ滿洲を中心として・露支兩國に對し、次に支那を舞臺として、支那自身はもとより、米國を始め、英・獨・佛・伊等の各國とも對立する。故に我が國防・軍備は、これ等の諸國の現勢を眼中に置かずして考へることは出來ない。

こゝに薦める二書はそれぞれ陸軍及び海軍の權威者が、一般國民の國防常識涵養に資せんが爲に書かれたもので、現代に於ける列國の陸海軍の情勢を知らしめ、帝國々防の今日如何に急務であるかを悟らしめるに役立つであらう。

（京橋區銀座一丁目五　大日本圖書株式會社
昭和一一、四、一〇　現代の陸軍　四六判二七七頁
昭和一一、四、一五　現代の海軍　四六判三七〇頁　各一・〇〇）

第四　自然科學

天然記念物を探る

大阪毎日新聞社學藝部
東京日日新聞社學藝部編

昨年の秋大毎東日兩紙上に連載されて好評であつた「天然記念物を探る」に幾分の增補をしたものである。

日本各地に散在する天然記念物が「自然の國寶」とも云ふべき意味を以て、法律によつて保存されてゐることは洽く知られてゐる。然しそれならば如何なるものが如何なる理由で如何なる場所で天然記念物として指定されてゐるかを知つてゐる人は割合に少い。本書はこの自然の國寶を國民一般に知らしめて、その學術的價値を認識せしめようとするものである。

記述は一般讀物として新聞紙上に掲げられたものであるから平易で興味深く書かれてゐる。然もその間に、平易さを破らない程度に學術的な說明を織り交ぜた所は如何にもジヤーナリストらしい手ぎわのよさが現はれてゐる。收められた範圍は北は北海道から南は臺灣迄、卽ち我が國の殆ど全部に亘つて居り、一項目二三頁乃至四五頁づゝにまとめられ、記述を補ふ意味での挿繪が豐富である。指定されたものも植物もあれば鳥獸もあり、奇巖もあれば魚類もあり、指定された範圍も一本の樹木、一個の岩石もあれば、一つの群落、或は時に一島全部と云ふものもあり千差萬別である。

以上本書は系統的ではないが科學知識を與へらるゝ所も多く、又單なる讀物としても面白いものである。

（昭和一一、三、一五　大阪市西區靱北通二ノ一八　盛文館
菊判　三三五頁　三・五〇）

天氣と天氣豫報

梶間百樹著

一昨年に於ける近畿の颱風以來天氣豫報に關する關心は一段と高められた樣に考へられる。しかしながら日日數回ラヂオを通じて發表せられる中央氣象臺の全國の天氣概況がどれ程一般人に理解されて居るか、又その天氣概況と天氣豫報とが如何なる關係にあるかを理解し得る人が果して幾人あるであらうか。

本書はかつては中央氣象臺の豫報係であり、其の後各地の測候所に奉職して久しく氣象の觀測、天氣豫報の任にあたられた著者が氣象に關する知識の普及を目的とし簡明を旨として記述されたもので初版は十餘年前に出されたものである。今回これに一大修正を加へ、前版と同樣通俗を旨とされてゐる。

內容は　氣象の觀測—天氣圖—低氣壓—不連續線—高氣壓—豫報、特報及警報—附錄晴雨計示度の原生に就て—から成つて居る。隨所に天氣圖を挿入し懇切に說明されて居るから何人にも容易に理解されると思ふ。

（昭和一〇、一二、二六　東京市神田區駿河臺二丁目一〇
古今書院　四六判　一七二頁　一・二〇）

日本の星

野尻抱影著

「日本の星」と云つても、日本でだけ見える星と云ふ意味では決してない。世界の人類が共通に見てゐる星に、例へば「すばる」とか「たなばた」「ひこぼし」とか云ふ風に日本人特有の呼び方をしてゐるが、それについて考證的に記したのが本書である。枕の草子にある樣な「星はすばる、ひこぼし、明星、夕つゝ云々」と云ふ樣なのは我國何處へ行つても通用す

る古典的な呼び方であるが、中には奥州だけしか、或は九州だけしか通用しないと云ふ様な方言的な呼び方もある。この様な星の和名が本書には百幾つか集められ、之を星の見える時期に依つて春夏秋冬の四季に分ち、その各々について、その呼び名の由來、傳說、萬國共通の學名との關係等について語られたものである。天文隨筆としてゐるが、同じ著者によつてものされた從來の數多くの天文隨筆――夫等は多くは神話傳說を主とした讀物であつたが――それに比較すると本書は讀み物としての興味よりは寧ろ考證的な研究書と見るべきであらう。

（昭和一一、六、一〇　麴町區富士見町一ノ五　研究社
四六判　三五四頁　一・五〇）

昆蟲讀本

中西悟堂著

詩人悟堂氏はアルピニストとしても又蟲鳥の生態觀察家としても素人の域を脫してゐると云ふ世評である。そしてその後者としての好著「蟲鳥と生活する」「野鳥と共に」は何れも既に本會の推薦する所であり、中にも「野鳥と共に」は文部省の推薦圖書ともなつてゐる。氏の蟲や鳥の觀察の仕方は如何にも詩人らしい。氏は嘗つて「標本の世界は概ね死の世界である」と云つて居られるが、之などは明かに科學者としてよりは詩人としての氏の本領を示すもので、專門學者が氏を遇するに飽く迄も詩人を以てし、又或る人は氏を評して「蟲鳥を弄する」と云ふのも、畢竟氏の自然觀察のスタートが自然科學者の夫と異る所以を指摘してゐるものと思はれる。從つて氏の著書が好著として世にもてはやされ、又もてはやされてもよい理由は、嚴密な自然科學書としてゝはなく、自然觀察についての興味を人々に敎ふると云ふ點にあるのであつて、この點については科學者の容易に及び得ない腕前を持つて居られる。

本書は小學校の高學年から中學初年級の人達の爲の爲に書かれたものであるが、誠に「童話」の世界から「事實」の世界へと一歩踏み込んだ少年諸君にはこの上もない好著であらうと思はれる。これらの諸君に取つて望ましい事は一字も忽にしないと云ふ科學的の嚴密さよりは自然觀察に就てのフアミリアーな態度を敎ふることである。本書を推す理由も無論そこにある。取り扱はれた昆蟲も蝶蛾、蜻蛉、螢、蟬、蜂、蟋蟀、甲蟲等我々の身邊に近いものゝみで、採收法、標本の作り方等にも親切に云ひ及んでゐる。

（昭和一一、七、二五　神田區小川町一ノ一〇　巢林書房

菊判　索引共二七八頁　二・〇〇）

野の鳥の生態

仁部富之助著

內田清之助氏の序に「著者は農事試驗場陸羽支場にあつて米の研究を專門とし、その品種改良に特筆すべき貢獻を殘されて居る。鳥類の方は寧ろ餘技だが、これがまた素晴らしい餘技である。幾多の鳥類專門家が此の謂はば飛入りの門外漢に蒙を啓かれるの奇觀を呈した。觀察の精緻、着想の警技、鳥學の沙漠を旅する者に、これはどんなにか魅力あるオアシスであらう」と述べられて居る。

著者の自序には

「私が野の鳥に特に親しみを覺えるやうになつたのは、大正の初頃からであつた。……公務の餘暇に稻作と密接關係ある鳥類、就中「雀の生態的研究」を許され云々」

とあるを見れば著者の野鳥の研究は必らずしも趣味に出發するものではない。寧ろ研究と趣味との融合せるもので、其の態度に於て一般讀者の學ぶべきものである。

但し本書に於ては雀に就ては獨立の一章として、「雀の巢」の一項が收められて居る丈であるが、巢の利用性、模倣性、修理性等には精緻な觀察がなされてゐる。

內容は燕の夫婦―鳧の移民―同胞愛（雀、燕）―雄鳥（燕、もず）の營巢本能―翡翠の生活處々―郭公卵の入替―小千鳥の巢と營巢―育兒能力（雀、雲雀）―母性愛（こかはらひわ、もず、こよしきり、くろつぐみ、雀、燕）―玉川河原の鳧の蕃殖―杜鵑類卵の大きさの問題―雀の巢―親鳥の慈悲、無慈悲（こむくどり、きせきれい、雀、もず、こさめびたき、ひばり）―雲雀の特殊な產卵性―鶯の思慮（攝食本能）―燕の特殊防寒―小千鳥の巢卵保護（飛砂排除）―鶯の惡戲である。

これらの觀察には一年がかりのものもあり、一ケ月に亘るものもある。小千鳥の巢卵保護のための飛砂排除の觀察には五月の中旬猛烈な風塵を冒して午後二時十分から三時三十分まで腹這ながら刻々の狀態を記錄したものや、「燕の特殊防寒」の一日にわたるもの、午前九時から十一時十九分に至る翡翠の觀察の手記の如き誠に興味深いものがある。これ等の觀察と實驗とは極めて輕快な筆致を以て通俗的に描寫され、隨所に鮮明な寫眞を挿入されて居り、一讀卷を措く能はざらしむるものがある。

（昭和一一、七、一〇　神田區小川町一ノ一〇　巢林書房
四六判　二七八頁　一・五〇）

中西悟堂著
「野鳥と共に」を讀んで

清樓幸保

本書は放飼篇と山野篇との二部に大別されてゐる。放飼篇には葭五位、鵜、鷺、尾長、嘴細鴉、雀、鵯、虎鶫、大瑠璃、鶺鴒、椋鳥、大木葉木兎、頰白、小河原鴫、赤啄木鳥、郭公、小諸鶏等の諸鳥を雛から育てて飼ひ慣らした經驗を細々と記してある。著者は普通の飼鳥家と違ひ鳥類を家族の一員として飼つてゐる人であるから、此の書中に記された事からよく動物心理の一端を知る事が出來る。唯注意すべきは動物には本能だけに依る行動のある事である。人類は動もすれば之を人間的主觀から律し勝のものである。此の著の記事にも此の點が多少ないでもない。さはあれ此の書中に溢れた動物愛の發露を見ては、何人と雖も微笑ましく和やかな感を懷かぬものはないから、現在の様な殺伐なる非常時には、一般人が此の様な本を必讀すべきであると思ふ。

後編には著者が鳥類を求めて歩るき廻つた東京近郊、富士山麓、榛名山等への紀行文と秋の霞網獵場等の風景描寫等が隨筆に學術味を加へた様な巧みな文章で記されてゐる。本邦では尙鳥類を觀察すると云ふ習慣に乏しく、紀行文中に植物の事は記されてゐるが鳥の事は更に無いので、此の著書は鳥類に關心を持つ様に一般人を啓發指導するものであると云つてもよい。唯文中鳥類の分布や習性に就いて他の研究者の說をその儘轉用されたと感ぜられるものが多少あるが、之等は學者の研究上の苦心を推察してその氏名を明らかにされた方が尙奥床しい様に思はれる。

然し何はともあれ學術書としても亦好參考とするに足るから、鳥類研究者たるものの見逃す可からざる良書であると思ふ。

其の上書中には著者の撮影になる鳥類放飼の有様や蕃殖狀況等の美麗な寫眞が多數にあつて錦上花を飾るの感がある。

（昭和一〇、一二、二五　神田區小川町一ノ一〇　巢林書房　小菊判　三八八頁　二・八〇）

榮養讀本

鈴木梅太郎
井上兼雄　著

榮養と云ふ言葉は俗語として吾々は不用意に毎日用ひてゐる。所が、では「榮養とは何ぞ」と開き直つて聞かれたら、われわれは直ちに返答に窮して了ふ。榮養と云ふことはそれ程われわれの生活に關係深いものでありながら、又それ程學問的常識としては普通一般人には考慮されてゐない。

本書の著者は「榮養」を定義して「生物が適當な物質を外部から取り入れて生活現象を續ける事を榮養と云ひ、この攝取する物質を榮養素と名づける」と云つてゐる。本書ではこの「榮養」と「榮養素」との二つを考究の對象として「榮養編」「食品編」の二編に分かつて述べられてある。榮養編では人間の成育とか體溫とか骨骼とか、或はビタミン、ホルモン、或は消化とか榮養の吸收とか云ふ、主として榮養の理論方面を網羅的に而も平易に述べてあり、又適當に脚註を施して本文の足らざるを補ひ、理解に便ならしめてゐるあたり、全く讀本の名にふさはしい。食品編では、個々の食品の名を提げてその榮養素としての價値を論じて居り、前者を假に理論編とすれば、之は正に應用編にも相當しよう。

榮養と云ふことは國民保健の上から、家庭生活に於ても團體生活に於ても是非共考慮されなければならないことである。唯漠然とは從來とて考慮されてゐたことは、榮養と云ふ言葉が通俗語として盛に使用されてゐる一事でも分ることであるが、學術的の解明を伴はない醫學常識が如何に無價値であるかは今更云ふ迄もない。今こゝに本書の様な平易に書かれた「榮養學」書を得たことは誠に幸であると云はなければならない。著者の一人鈴木梅太郎博士は東京帝國大學名譽教授として、又理化學研究所員として斯學の大家であることは云ふ迄もない。

（昭和一一、七、京橋區京橋二丁目　日本評論社　菊判　二九〇頁　一・〇〇）

第五　產業

家の建て方

山田醇著

著者は曩に「住宅建築の實際」と題する著述を公刊されて好評であつたが、本書はその續篇の意味で執筆されたものである。

內容は中流並にそれ以上の紳士向住宅を主としたものであつて、大住宅には及んで居ない。卷頭言に「過去廿有餘年間に、數百の家を建てゝ見て、色々苦い經驗を嘗め、注文主か

らのお小言は大概聞き盡したと思ひますので、その結果一番よいと信ずる事柄を本書に記述する事にしました。」とある通り、すべて著者長年の經驗を基礎としたもので、著者自身の設計になる多くの名士邸の寫眞並に間取圖の實例が示されてある。

記述は談話體の極めて平易なもので、敷地の選定・濕氣の豫防と云ふ樣な一般的方面から、次いで間取の作成法、構造、材料、設備、施工と云ふ風に段々技術的方面に及び、最後に直營實費精算法と云ふことにも簡單ながら言ひ及んでゐる。專門技術的な方面も記述が平易である爲、何等の豫備知識なしに充分理解の出來る程度のもので、尙挿入された多數の寫眞、說明圖は一層理解を助けるものである。

卷末には著者漫談と題して十數篇の、多くは建築に關した小文が集められてゐるが、中には著者以外の人の筆になつたものも二三收められてゐる。

以上の如く本書は專門家よりは一般素人向に述べられた建築指導書とも云ふべきものである。

（昭和一〇、一二、一五　神田區錦町一ノ五　誠文堂新光社　菊判　一八五頁　圖版並說明圖　四〇枚　二・五〇）

日本庭園史圖鑑

重森三玲著

本圖鑑は豫約出版物であり、全二十四卷である。最近第一回配本として「桃山時代第二部」が刊行せられた。本圖鑑は著者重森氏の獨力の集成に係るものであるといふ。著者は京都における隱れたる庭園研究家であり、併せて花道茶道の達人であるといふ。時代は古代より現代に及び、全國三百に及び名園を實地に踏査研究して、審に寫眞版を作り、寫眞に現はし得ざる見透し細部の寫生圖を作り、さらに特に綿密な平面圖を完成してゐる。その努力のほどは察するに餘りあるものである。この一事は本圖鑑最大の特色であり、功績であらう。

現今日本文化の反省期において、かくの如く古來の名園を一望の下に鑑賞し、研究することを得しめる本圖鑑の刊行は、まさに一大文化的事業と呼ぶに値するものであらう。本協會が豫約出版物たるを問はず、進んでこれを世に推擧する所以である。

（昭和一一、六、二二　麹町區丸ノ内三ノ八　有光社　菊倍判　一册六・〇〇　特價〔豫約者ニ限リ〕四・八〇）

第六　美術・諸藝

日本文化私觀

ブルーノ・タウト著
森儁郎譯

本書は獨逸の建築家ブルーノ・タウト氏の日本文化觀である。二年前同じ著者に依る「ニッポン」が飜譯出版せられ、當時好著として我が讀書界に迎へられたが、本書はその續篇とも見做さるべきものである。前著「ニッポン」が氏の我國渡來數ヶ月目の所產であり、然も主として日本建築を通してみた日本觀であつたのに對し、本書はその後二年間の滯日中に獲た新たなる觀察を基礎として、藝術一般の廣い範圍から日本文化を批評したものである。

從來歐米人の日本文化觀といへば、多くは皮相で取るに足らぬが、或は特殊な方面のみを興味本位に取扱つてゐるに過ぎない。然し本書の著者の場合決してそうではない。勿論二年三年の短年月の滯日であるから、我國民性を知りつくすと云ふことは不可能であるが、然し氏は大體に於て日本藝術、或はもつと廣く云つて日本文化の底を流るゝ日本精神を理解して、その上で犀利銳敏な藝術家的直觀を基として日本文化を批評してゐる。故に云ふ所仲々肯綮に當るものがある。

著者は文化日本を第一日本、第二日本、第三日本の三つに分つて考察してゐる。第一日本とは伊勢大廟などに見る純粹古典の日本の姿で、第二日本とは支那文化を完全に日本化し得た日本の姿である。第三日本は西歐文化を取り入れて後の日本であるが、この第三日本の完成は遺憾ながら未だしと云ふのが本書に於ける著者の結論であると思はれる。卽ち現代日本には西歐文化と日本文化とが分裂して居り少しも渾然とした所がなく、又日本人が西歐文化として取り込まうとしてゐる所のものが案外西歐文化の本質をはづれてゐると云ふのである。云ふ處如何にも辛辣であるが、行間に溢れた日本文化批評に對する眞摯な態度は、たゞ之を我國民に對する好意ある忠告として受けとるより他はあるまいと思ふ。輓近西歐文化と日本文化との交涉著しき折柄、日本に對して深い好意と理解とを有つ一外人の言葉に一應耳を傾ける必要があると思ふ。

（昭和一一、一〇、一五　神田區駿河臺二ノ四　明治書房　四六判　二三八頁　三・〇〇）

歐洲美術の歴史
―エヂプトから現代まで―

相良徳三著

中等學校の上級生位の程度で、歐洲美術の歴史をエヂプトの古代から現代迄簡潔に一冊の本の中に述べつくさうと云ふのが本書に於ける著者の目的である。この著者には既に歐洲美術に關する二三種類の著述があり、その何れも平明よく要をつくしてゐると云ふ點が評判がよい。本書の如きも、丁度若い人々を前にして歐洲美術の講話をすると云つた態の、極めて親し味深い平易な文章で書き綴られたもので、その述べられた範圍も繪畫とか彫刻とか云ふ小範圍に限られず、當時の社會情勢一般を背景として見た美術の發展の跡を述べたもので、宛然歐洲文化史を讀む樣な興味を覺える。

すべてのものがそうであらうが、特に美術に於ては最初から正しい知識と美しい感情とを以て之に接しないことには、結局美術と云ふものは理解出來なかつたのである。その意味で若い人々の爲に平易に正しく美術の知識を敎へ込む樣な本の出ることを我々は待ち望んで居たのであるが、本書の如きはこの望をかなへて與れるものとして、極く入門的な內容ではあるが、まづ上乘の出來と思はれる。之を中學校の三四年生以上の人々に少しの不安もなく薦めることが出來る。唯この種の本として最も必要である名畫の挿繪が餘りよい出來でないのが如何にも殘念に思はれる。

（昭和一一、五、二二　神田區小川町二ノ二　清和書店
四六判　二四八頁　一・六〇）

旅人の眼

川島理一郎著

著者は帝國展會員たりし著名な洋畫家であることはいふまでもない。本書は著者の旅の記錄であるとともに、畫業の記錄である。著者は「私ほど、世界を歩き廻つた人間も少いのではないかと思ふ」といふほどに世界の到るところを歩いてゐる。著者の旅は自然探究の旅であり、著者の畫業もまた自然探究の道を歩むものゝやうである。

紀行は珍らしい所が多い。熱河・スペイン・コルシカなど、殊にスペインについては數多く書いてゐる。紀行の筆もその畫風のごとくかつきりと鮮明で、印象的である。本書の後半を占めるその畫談に至つては、まさに達人のことばであり、その認識の明確さ、その思想の確固たることは尊敬に値するものである。繪畫と時代性といふこと、繪畫における日本的なものといふこと、繪畫における新しさといふこと等々、繪畫における現代の問題或は根本の問題について說くところすべて的確であり、正當である。ただに畫業にたづさはるもの、もしくは繪畫に關心をよせるものにとつて敎へとなるだけのものではなく、ひろく藝術について思ひをはせるもの、さらにひろく文化について考へをめぐらすものにとつて、幾多貴重な暗示を與へるのである。今日文化の轉換期において尊重すべき言說であり、一畫人の隨筆として輕視すべき類のものではない。こゝに至るまで著者は「畫業三十年」の勞苦を潛つてゐるのである。世界を舞臺として眼界をひろくし、著實に本道を歩んで體驗を深く豐かにせる人間並に藝術修業の結果としてこゝに至つたものであることをおもはなければならない。

畫人の優秀な隨筆集もいろ〳〵あるが、本書は稀有の異色ある良書として推奬したい。

（昭和一一、五、二〇　芝區新橋復興ビル　龍星閣　新菊判
三〇五頁　二・五〇）

日本工藝沿革史

金子清次著

本書は我國の工藝史についての學術的な或は考證的鑑賞的なむつかしい研究ではなく、各時代の工藝美術の發達乃至は外國の影響など云ふことを中心にして我國工藝の動向を平易に示さうとするものである。書き方も趣味的な態度を特に避けて、知識的に事實的に事實の記載を間違ひなくすると云ふ方法が採られてあり、從つて一見敎科書風である。全卷二七四頁の中、明治、大正、昭和の現代に關する部分が約百頁にも及び、全體の割合に比較的多くの頁の割かれたのは、趣味的に昔の工藝美術を語るのではなく、現代の我國工藝の由來する所、竝に將來の方向を暗示することに主力を注いだ著者の意圖に外ならない。全卷の時代別として上古前後期、奈良朝、平安朝前後期、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代、明治時代、大正昭和時代となつて居り、一時代の中は先づ總說としてその時代の大體の傾向を述べ、以下その時代の特徵に依つて、金工、陶工、漆工、織工、染工、革工、刺繍蠶絲等々に細分されてある。著者は神奈川縣立工業學校圖案科長である。

（昭昭一一、三、二五　神田區駿河臺三ノ九　共立社　菊判
二七四頁　二・五〇）

明日への音樂

須永克己著

本書は師友によつて編纂刊行された著者の遺稿集である。著者は京大出身の音樂美學專攻の異色ある音樂評論家であつた。本書の末尾には師友の數人が「追悼錄」を記してゐるがいづれも口を揃へて故人の優れた才能を賞讃し、仕事の意義を尊重し、その夭折を哀惜してゐる。

著者の仕事は新なる眼をもつて東西音樂を徹底的に研究し究極は西洋音樂理論の束縛を脱した須永音樂美學の建設にあつたやうである。著者はこの大目的に向つて着々工事を進めつゝあつたのであるが、いはゆる研究の塔中に入つてゐたわけではない。むしろ反對に街頭に進出して多方面の活動に忙殺された。その點著者は決して學究人ではなかつた。これはおそらく著者の關心が異常に強く音樂教育の分野に向けられたからではないかとおもはれる。本書の中にも音樂教育に關する論文が五篇含まれてゐる。特にレコード音樂教育を重視してゐることは注目に値する。說くところすべて基礎的研究の上に立つて確固としてをり、しかも學究的無味に陷つてゐない。「レコードによる音樂鑑賞入門」など、これは未完にをはり、著者の絕筆となつてゐるのであるが、その明確な良き解說を見るにつけ、讀者は轉哀惜の念に驅られるのである。

「樂史」の篇は大方學究的業績にかゝるものであるが、著者の研究は極めて克明に丹念なものであつたことを知るのである。本書の初篇をなす「樂論」中、「音樂と日本國民性」「音樂に於ける日本主義に就て」の二篇は一般の讀者にとつて最も興味ある論文であつて、著者の豐富な學識と堅實な見解とが具體的に最もよく現はれてをり、前者は日本音樂の特性とその世界音樂において占める位置とを明示し、後者は音樂に於ける日本的なることの眞意義を暗示してゐるものであり、現代日本音樂界にとつても指導的意義を有するものといつていゝであらう。

たゞに音樂に關心あるものといはず、ひろく知識階級の人たちに奬めたいとおもふ。

（昭和一一、七、五　神田區神保町一ノ一四ノ一　名曲堂　菊判　三五二頁　二・〇〇）

西洋音樂史

乙骨三郎著

著者は東京音樂學校教授として三十年の長きにわたり音樂教育に從事されて居たが、去る昭和九年九月病を獲て逝去され、本書はその遺著となつたのである。著者が本書の執筆に着手されたのは大正十年の秋と云ふことで、以來千推萬敲、研究に調査を重ねつゝ十數年を費されたのであるが、然も尙近世の部は草稿のまゝで殘さるゝに至つたが、著者の門下たる太田太郎・高橋均の兩氏が遺稿を整理して、今回出版の運に至つたのである。

元來我國人の筆になつた西洋音樂史は、その學ぐべきもの僅に二三種類を出でず。然もその何れもが今日音樂研究家又は愛好家に參考書としてすゝむるには、或ものは近世の部を缺き、或ものは繁簡要を得ずなどして遂に完全なるものとは云ひ得ず、各方面から完全なる音樂史を要望せられつゝもその刊行を見ず、遂に今日に至つたのである。この點で本書の出現は音樂界の爲に誠に慶賀すべきことである。

本書は章を分つこと三十一、基督教發生以前の希臘の古代音樂から二十世紀の今日に迄及んで居り、その間音の組織、對位式から和聲式への發達、樂器の變化とそれに伴ふ器樂の發達、音樂形式の變遷、ヘンデル以後の大音樂家の音樂上の事蹟、曲目の解說、その他あらゆる方面に精粗なく說き及んでゐる。唯專門的な音樂用語の頻出、特に中世史以前の說明に多く出る音譜の例示等が本書をして稍々專門書的な感を抱かしめるが、元來が本書は通俗を旨とした書ではない爲寧ろ當然なことで、それだけ研究家に益する所が多いと思ふ。文章は哲學的な音樂美學の論に入る所はなく、單に音樂發達の歷史を記述したゞけであるから難解と思はるゝ點は少しもなく、寧ろ簡にして極めて要を得てゐる。

以上の如く本書は單に從來類の少なかつたと云ふだけではなく、內容亦甚だよく整ひ、之を一般音樂研究家竝に愛好家に推し少、しも不安の念を覺えしめないものである。

（昭和一〇、一一、一〇　神田區淡路町二ノ一七　京文社　四六判　八二七頁　索引九六頁　四・八〇）

箒庵　高橋義雄著

茶道讀本

高橋龍雄

あらゆる方面に涉り、それ〳〵讀本と名づけられる者が出來てゐるのに、茶道だけにその讀本がなかつたといふのは、どういふ理由であるかといふに、茶道は日本文化の骨董的綜合藝術であつて、書畫骨董を初め、陶器漆器釜工より茶室の建築、之に伴ふ築庭、又懷石料理及禮儀作法に至るまで、な

か〳〵文章では書きあらはし難い爲に、非常にむづかしいものであるからだ。

篠庵翁は、茶道に精進せらるゝことこゝに四十有餘年、又文筆に於ても頗る達者であるからで翁をおきて茶道讀本を著作し得る人はないのである。

本書はまづ茶道の沿革を三段に分けて說き、第一章茶道前記に於て、茶の起原から喫茶の風が一般に行はれた次第を叙し、第二章茶道本記に於て、珠光、紹鷗、利休に至る茶道の創立から大成に至る徑路を說き、殊に信長と秀吉とが茶道の一大後援者であつたことを、說かれてをる。

次に茶室、茶會、點茶を簡明に記述し、一度も茶會に入つたことのない人にでも、茶會に列席して恥をかゝない程度に說明してある。殊に茶室內の道具、卽ち掛物、花入、釜、茶入、茶碗、香合、水指以下の諸道具は、最も說明に骨を折るものであるが、流石に茶臘四十有餘年の翁の手腕は、すらすらと說き去り說き來り、茶器全般の物に涉り、一般的の知識を與へることに於て、老熟の筆致が運ばれてをる。

最後の茶訓、茶讃は、茶書中の有益にして趣味ある逸話を列記し、茶道に對する古來の認識不足な點を懇篤に說得し、茶道が日本文化の上に多大の貢獻をした點を述べ、將來の日本が、世界に誇示する模範的風流道の立場に於て、世界を指導すべき所以を高唱されてゐる。

要するに、茶道は茶界の實物敎授、茶室茶庭の實見の上ならでは、容易に讀本などで說明の出來るものでないのを、本書はこの最も學者が難事としてゐた點を容易に成し遂げたものである。

美術工藝の日本として、風流風雅が修養道であるものとして、世界に誇るに足るべきものは茶道であることを知らしめるのは、所謂日本精神の呼聲の高い現代に、極めて必要なことである。

この點に於て、本書は現代の缺陷を補ひ、現代の要求に應じて現はれたものであると思ふので、敢て一般の讀書界に本書を推薦する所以である。

（昭和一一、四、五　神田區小川町　秋豐園出版部　四六判　二七六頁　一・五〇）

第七　文學・隨筆

お話のコツ

安倍季雄著

心ゆくまゝに話して聽かす名人は別として、座談にしろ、雜談にしろ、或は又講演にしろ、人に話を聽かせると云ふ事は可成りの難事である。何げなく話すと云ふ事が話のコツである樣ではあるが、何げない前に話す人は隨分と氣や心をつかひ又研究をおこたらないものである。本書は此の話を人に聽かすためにどんなに話手が苦勞して居るかを、童話家の安倍季雄氏が述べたものである。

著者は話す人に取つて一番大切なのは結局は此の話は眞實だ、是非人に聽かせたい、聽かせれば人の爲になる、是非聽いてもらひたいと云ふ信念が必要であるといつて居る。此の信念なしにいたづらに技巧の末にはしる事は話手に取つてもつとも危險な事で、先づ技の前に信念をもつ事が第一となる。

「眞の雄辯は信念を持つて眞實を語る事だ」とは雄辯道の眞理であるが、然し乍ら童話にしろ、講話にしろ、話すのと聽かせるのとは自ら意味が異る。如何に話が眞實であり信念を持つてしても、しんみりと心から傾聽せしめなければ、其の話の生命が生れて來ない。著者は聽かせる話を話すために、過去幾度か自らなめた幾多の思ひがけぬ失敗談や、とんだ成功談を話して居る。體驗から得た平易な知識であるだけ、解りやすく且つ得がたいものが多い。

「話せばわかる」と云つた犬養首相が話さざる中に刺客の兇手に殘れたのは、群集心理を逆に利用したもので、先づどうしたら話をうまく聽かせる事が出來るかと問はれた時に、吾々は「先づ群集心理を研究せよ」と答へると云ふ。

本書は話しをすることを職業とする者はもとより、一般に取つても話す者のよき參考書である。

（昭和一一、二、五　麴町區下六番丁二七　白鳥社　四六判　三〇二頁　一・二〇）

綴方讀本

鈴木三重吉著

「一校の成績を下するには全校兒童の綴方の作品を見よ」と

は久しい以前から小學校の視察要項の一として掲げられて居る。蓋し綴方は諸學科の綜合による兒童の創作であり、指導者の側よりは、最も指導難を訴へらるゝ學科だからである。而して其の困難の大半は、教ふるものにも教へらるるものにも適當な標準が見出せないからである。

本書は正にこの綴方教育上の缺陷を補ふものである。十有八年前より「赤い鳥」を創刊し、綴方・童話・兒童歌謠の根本的革正のためにその半生をさゝげ來つた著者が「赤い鳥」の入選作の優秀なるものを一冊にまとめ、綴方の標準を示した一大金字塔であると言つてよい。

本書に收められた作品は五十六篇で、兒童獨自の叡智と純情と鮮鋭な感覺を如實に表現した作品、小さきものゝ人生觀には時に微笑をさそはれるものもあるし、時に又深刻なる反省の資料となるものもある。

學年別に見ると尋一は一篇、尋二は七篇、尋三は一篇、尋四は五篇、尋五は十五篇、尋六は十七篇、高一は三篇、高二は七篇であるから、尋一・三・四・高一は稍均衡を缺いでは居るが、取材はあらゆる方面に亙り、各篇には著者獨自の透徹せる、然も詳細な批評が附せられて居るので、何人も各篇の特異性を知ることが出來る。それ故に本文は兒童の副讀本としても好適であり、批評は指導者への好指針である。

下篇の「綴方と人間教育」は教師の綴方指導方針に對する痛烈なる批評に始まり、次いで製作指導の要點、綴方の教育的意義に及んで居る。純文藝の立場に立つ著者と、所謂教育を其の觀點とする一般教育者との間に於てはその出發點及び目的に於て見方の相違はあるであらうが、他山の石とするに足るであらう。

實地指導者による指導書は頗る多い。然も本書の如く學校教師のみならず、兒童並に心ある父兄に呼びかけたものは尠い。半生を綴方教育の向上に委ねた著者は已に地上を去つたのである。この書はその遺書としても顧みらるべきものである。

（昭和一一、四、八　一五版　麹町區丸の内二丁目一　中央公論社　菊判　八四頁　一・六〇）

日本文藝學

岡崎義惠著

この本は國文學の分野に於ける劃期的な試みになる研究書である。從來國文學の研究は概して考證的研究を出なかつたものであるが、廣く文藝理論の發達に刺戟されて、國文學の社會學的研究といふべきものは、近來現はれるやうになつた。

この本は文學を獨立のものと見て、古來の國文學を一貫して流れてゐる本質を究明し、日本文學の體系化を企てた純粋に文學的な研究である。著者の研究態度はいはゞ文學史と文學理論との切點に立つて、日本文學の文學的意義を把握し、闡明せんとするものである。それ故從來の文獻學的研究は勿論のこと、其他思想史的・風俗史的研究との交渉はあつても問題はあくまでも文藝的意義の探究であつて、從來のやうないはゞ混合的研究ではなく、方法的にも純粋性を求めるのである。これらのことは「方法と體系」篇のはじめで詳論してゐる。その理論の具體化と見るべきものが、同篇中の「日本文藝思潮」「日本文藝理論の主流」の二論文であつて、本書中最も重要な論文である。これによつて日本文學の原始より現代に至るまでの思潮について體系的な概觀を與へてゐるのである。「解釋と批評」篇は、古くは「古事記の國しぬび歌」近くは「新體詩の本質」等特殊の題目について、著者の觀點より新しい解釋を與へたものである。最後の「美學的基礎」篇では、過去の日本文學において重要な理念となつた「あはれ」「有心と幽玄」等の問題について全面的の考察を下したものである。「あはれの考察」は平安朝初期で斷たれてゐるのは遺憾であるが「有心と幽玄」は完全に纒まつたことに貴重な論文である。

著者の見るところには、個々の部分において異論も出て來るであらうが、著者の研究態度は全く正しいといはざるを得ないであらう。日本文學の研究もこゝまで進歩したといはれる所以であらう。

（昭和一〇、一二、一〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　菊判　六六〇頁　三・二〇）

感動と批評

本多顯彰著

著者は新進の英文學者であり、批評家である。本書は「未完成批評家の肖像」と副題された瀟洒たる本である。篇別は前後二篇に分れてゐるが、第一篇は研究的な評論文であり、第二篇は隨筆風のものである。「デイケンズとその文學」「ゴールズワージの藝術論から」などは研究的な力篇であらう。流石にロレンスに關するものが多い。「ロレンスの性の意味」「ロレンス斷片」「逆說風に」などこれで、これらはロレンスを理解する助となり、現代文學によい示唆を與へるものであらう。

著者は日本の古典文學に對して意外に強い興味をよせてゐる。本書の中にも短歌・俳句に關する隨筆が數篇ある。なんといつても素人境を脱しないものではあらうが、一種新鮮感

は與へるであらう。新進英文學者の評論集として一讀に値するものである。

（昭和一一、七、二　渋谷區金王町七　作品社　新菊判　二四七頁　一・七〇）

日本文學の世界的位置

勝本清一郎著

本書は世界的見地から見た日本文學の評論集といつていゝであらう。その意味で第二篇が本書の中で最も重要な位置を占めてゐる。そこには「民族文化と世界文化」「藝術の國民的評價と世界的評價」「藝術上の日本的性格とは？」「藝術の國民的形態と國際的形態」「日本文學翻譯問題」等の諸篇が含まれてゐる。本書全體は四篇から成つてゐて、その題目は多方面に亘つてゐるが、文壇近來の問題を論じた時論的なものが多い。第三篇に雜誌論があるが、著者の論筆は「委託販賣制の問題」にまで及んでゐるほど實際的な問題にも觸れてゐる。第四篇は近時著しく論壇の表面に現はれ出た國字國語の問題を取扱つてゐる。

本書の特色はなんといつても眼界の廣いことである。日本文學を世界文學舞臺に持ち出して自由に大膽に論議してゐることは、容易に他に求め難い、特異の感觸に滿ちたものである。この著者のいはゞ世界的見地は文學論文化論にのみでなく、雜誌論や國字國語論においても一貫して現はれてゐるところである。著者の見地はあくまでも合理主義的であつて、日本文學の短を突くこともその見地よりかなり短兵急の嫌ひがなくもないが、それだけに反省を促すものはある。たゞに文學の仕事に携はる人のみでなく日本文化の將來をおもふ人は誰しも一讀して種々得るところがあるであらう。

著者の文筆は全然ジヤーナリステツクのものではあるが、日本文壇の垣内における狹小な評論に滿されてゐる今日、著者の評論は特異の地位を占めるものであらう。

（昭和一一、一〇、七　神田區神保町三ノ三　協和書院　四六判　三五八頁　一・五〇）

日本文學論素描

志田延義著

本書には特に「歌謠圏の國文學」と副題されてゐるが、これは本書後篇の題名ともなつてゐる。前篇は、書名と同じく「日本文學論素描」であり、こゝでは日本文學ひいては日本文化一般の特性を論究してゐる。後篇は歌謠の研究であるが、主として閑吟集及び室町時代の小歌の研究になつてゐる。

本書は歌謠を中心として日本文學の特性を探究した論文集である。著者の見解では日本文學の特性は俳句に集注せられるものとし、これを「北極」と名づけてゐるが、その當否は別として、少くも日本文學の中心を貫流するものが歌謠的なものであるとの見解は卓見といはざるを得ないとおもふ。さらに小歌的なものが大歌的なものに上昇する過程を繰返すと見る見解は本書の最も重大な特色の一つであるが、これまた卓見といはるべきであらう。後篇は著者の專門的研究であるから委曲を盡したものであるが、著者の日本文學論の素描は前篇にほゞ盡されてゐるのである。中でも第一章「大文學と地盤的文學」、第二章「俳句的性格と日本文學の表現」、第四章「俳句の本質に就いての一解釋」の三章に窺はれる。但し第三章「日本文化の樣式と歸一性」は、あまりにも大きな問題をあまりにも簡略に結論づけたもので、もとより未完のものである。一般の讀者にとつては、いふまでもなくこの前篇が最も興味あるものであらう。

本書は全體として研究覺書の集成風のものではあるが、著者の着眼並に研究は、極めて有意義なものゝやうにおもはれる。近來日本文藝學の論議擡頭し、日本文學の文藝學的研究の勃興期にあるとき、本書の研究はまさしくそれに貴重な一石を投ずるものであらう。

（昭和一一、五、三　日本橋區通三丁目一　成美堂書店　四六判　三一四頁　一・五〇）

文學の周圍

谷川徹三著

谷川氏が今日の日本の評論壇において占めてゐる地位は、いまさらいふを俟たないところであるが、本書を讀むと、氏の思想家としての意義は、今日の日本において極めて大きいものであることを、いまさらに悟らざるを得ないやうにおもふ。

本書は氏の第何番目かの評論隨筆集であるが書名が「文學の周圍」としてある事も偶然でない樣におもふ。本書は素より文學評論を多く含んでゐるが、文學その他の藝術を通じて氏の文化觀を表明したものと見らるべきものである。氏の文學評論がいかなる場合においても常に原理的なものに關聯をもつことが、他に見られない特色であるといはれてゐるのであり、まさしくそのとほりなのであるが、本書は特に色こくその背後的なものが露呈してゐるやうである。

本書に於ても教養の問題が取扱はれてゐる。教養の問題は

近來氏の力說する問題の一つであるやうである。氏は本書において繰返し文化の平衡運動を說くのであるが、教養の問題も其一部面であらう。國民的に文化の水準が高まらなければ新しき文化は形成され得ないとの見地は、原理的にも承認せざるを得ないであらう。

こゝに筆者の主觀を附加する事を許してもらへば「評論の文體」「賢者の文學」の二篇に最もこゝろ打たれた。いづれも小篇ながら、氏の最も深奥に毅立するものに直面し得たと思はれた。忌憚なくいへば、氏の評論にはいはゆる「展望者」といふ言葉に含まれるもの、いはゞ主張の核もしくは主觀性の熱度ともいふべきものゝ不足を感ぜしめるものがあつた。曇りなき明鏡、稀に見る明智を歎稱せしめつゝも、讀者に燒きつける熱情的なものを、むしろ被はんとするかの如き踏み止まつた態度が、一抹の拭ひ難い不滿を與へるのであらう。右の二篇は少くも筆者にとつては秘めたるものをこつそり出して見せてくれたの感があつた。

（昭和一一、二、一〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店
四六判　四五四頁　二・〇〇）

明治文學管見

成瀨正勝著

著者は雅川湜なるペンネームによりわが文藝評論壇の俊秀として夙に著名である。最近「新思潮」「文藝都市」時代の鋒鋒を收めたるが如き感あるが、こゝに「國語と國文學」「文學」に發表せる四篇を編んで本書を成した。名づけて「明治文學管見」といふが、收むるところは明治文壇の四大巨匠紅葉・露伴・逍遙・鷗外の再檢討であり、所謂明治文藝史家の安易なる常識の埒外に犀利透徹の解剖刀を揮つてその業績と思想の展開を跡づけたものである。その序文によれば氏は鷗外の豐饒にしてかつ冷嚴なる知性に傾倒し、こゝに出發して逍遙との比較を試み、更に近似を求めて露伴に進み、更にこれと紅葉との比較に至つたものであり以て鷗外の統一的研究を目ざすものであるとしてゐる。從て四篇の中「鷗外の傳統」の如きは稍鷗外を强調するの傾きもあるが、しかも四大巨匠の思想を的確に把握して殘すことないことは充分に認めることが出來る。

まづ時代の近接と思想的對蹠より紅葉露伴、逍遙鷗外を組合せたのは當然である。紅露は同じく西鶴の影響下に出發し

乍ら市井的自由の環境に育つた前者が雅俗折衷の多彩なる文體と人情家的風丰を具へ、後年寫實小說に赴き德川文學と明治文學の過渡的表現となつたに對し、後者は儒教的精神と佛教的諦念とに培はれて所謂理想小說の高塔を築きあげた點をあげ、逍鷗は啓蒙的實際家としての前者と主知的、藝術至上主義の後者を論じてゐる。「鷗外の傳統」は歐洲文學に精通せると共に藝術至上の立脚地によれる鷗外の思想的展開とその系統を引ける諸作家に論及したものである。

（昭和一一、二、二五　牛込區柳町二四　野田書房
四六判　二〇四頁　一・七〇）

素月集

尾上柴舟著

「水甕」の主宰者としてわが歌壇に重きをなす著者が昭和五年九月以後より昭和十年末までに發表せる作品を收めたものである。昭和五年に上梓せる「閒步集」につぐもので著者の第十一歌集である。その四十年に近き作歌生活を通じて、その歌境にも大きな波のうねりに似たる變化を示してきたが、その穩健なる性格と國文學に於ける深い教養と草假名の研究とは渾然と相融和して、素直にして溫和な歌品を築き上げてきたものといふことが出來る。まことに素月の如き靜かに寂びた歌境といふべきである。

昭和五年、氏の業績を記念する柴舟會が起り同會によつて十一月二日祝賀會が催された。又翌年四月三日、伊豆伊東にしてその歌碑が建設せられ、この巨匠がわが歌壇のために貢獻せる大いなる努力に報ゆるに最も適しい記念であつた。

樽前山近く

北の空晴れてはてなし樽前の煙ひとすぢ直上りする
靑深きみ空を衝きて樽前の煙ぞ上るあとよりあとより
樽前のなだりの末を黃にぼかしあな女郎花咲き續きたる
女郎花黃に亂す風の吹き通る野は牛かひも牛もあらざり

伊東にて

妻とわがことばと絕えて眞晝間の障子の外の遣水の音
きむぎむと矢筈の岳に雲のゐて春の天城は今日いまだ雪
たたなはる雲氣の雪の際ありや遠笠山は黃に晴れて見ゆ

原始林

さるをがせかかる枝のみ白うして闇きはてなき
林を行くも
奥ぶかう物にあたりてかへるかも林突き切る車の響
木木のみな生きむ死なじの爭ひに原始よりかも
陽のなき林

（昭和一一、四、三　麹町區富士見町　雄山閣　四六判
四〇七頁　二・〇〇）

俳句教程

荻原井泉水著

本書は著者の唱道する自由律俳句の立場から俳句の全般に亘つて平明懇切に解説した俳句入門の書である。俳句を詩の一形體として見る著者の廣い自由な立場は本書の中に餘すところなく説述されてゐるやうに見える。俳句をまづ第一に詩として見ることから入らうとする人々にとつては重要な示唆を與へる好箇の入門書とならう。既に定型俳句に進みつゝある人々にとつても、俳句が詩としての反省を迫られつゝある今日、本書に一顧を與へることが決して無意義ではないとおもふ。

著者は自由律俳句についてのみ説くのではない。古來の定型俳句についても終始一貫して説き及んでゐる。俳句の歴史的發展の上に立つて、文學として俳句が自由律俳句に進展せざるをえないことを説いてゐるのである。俳句の傳統的二大約束は定型と季題とであるから、本書においてもそれの排棄が第一の重要な論點とならなければならない。さらに自由律となりし場合の構成或は音律が最大の重要論點とならなければならない。それらの點については縷々説述してゐる。かくして著者の企圖する自由形態の俳句が新しき自然印象詩として、古來の俳句道の發展であることを説いて終つてゐるのである。卷末に自派の俳人の作を評釋して參考に供してゐる。

（昭和一一、三、二一　京橋區京橋三ノ一　千倉書房
四六判　四六四頁　一・五〇）

句日記

高濱虚子著

これは虚子の昭和五年四月より昭和十年十二月に至る間の句作にして、雜誌「ホトトギス」に發表されたるものを收めたものである。

虚子は「ホトトギス」の主宰者にして、わが俳壇に最も重きをなしてゐる一人であり、現代の俳向といへば先づ指を虚子に折るのが常識であらう。全國「ホトトギス」の會員は夥しい數に上つてゐる。

虚子は碧梧桐その他の提唱する新傾向と對峙し、飽くまでも傳統に忠實ならんとし、その内容に就いての主張に於ては客觀寫生を唱導し、近時は更に花鳥諷詠論を提げ、あるがまゝに自然を觀賞すべきことを説いてゐる。更にその形式に於ける主張に於ては、古壺新酒論があり、自由律を排擊し、俳句は飽くまでも定型律によるべく、新酒なほよく古壺に盛り得べしとなす所以のものを説いてゐる。兩者の主張のいづれを是とすべきやは知らぬが、虚子の句作は老熟枯淡といふべきか、或は墮平俗といふべきか、ある時は餘りにも燃燒する句精神といふべきものに缺けたるところがあり、いはゞ面白からぬ感があるやうに思はれる。しかもそれと同時に巨匠の面影は隨所に閃き、流石はこの人なりと三唱とすべきものが甚だ多い。

本書はこれを年別、更に月別に排列したものである。今ここに數句を拔いて紹介に代へる。

大原も時雨れぬ日あり暖し
見えてゐる御門遠しや御所の雪
梢より小鳥をこぼす高木かな
花疲れ東寺の塀に沿ひ曲る
祭見の知る人多し押されつゝ
こゝも亦バスが通るや瓜の花
打ち渡る伊勢の大橋日永し
灰皿に煙立ちのぼる更衣
枯野宿ラヂオは常に話しをり

（昭和一一、一一、二〇　芝區新橋七ノ一二　改造社
四六判　五八六頁　二・五〇）

渡佛日記

高濱虚子著

本書は俳人高濱虚子の歐羅巴の旅日記とそれに因んだ感想を集めたものである。虚子はこの年六十三歳ださうだが、壯者をしのぐ元氣で歩き廻り、各地の模様を簡潔な筆で達者に書き綴つてゐる。卽ち、昭和十一年二月十六日横濱を出帆、三月二十七日マルセーユに上陸、その後巴里に滯在、句會や何んかを開いて在留邦人と交り、四月十八日にはベルギー・アントワープに向ひ、同二十日にはラインに沿うてハイデルベルヒを訪うてゐる。同二十四日には伯林で日本學會に臨み俳句講演をし、同二十七日には倫敦に入り、また沙翁の誕生地たるストラットフオン・アポンに遊んでこの英國の文豪を偲び、五月五日には倫敦のペンクラブで講演をしてゐる。

五月六日には再び巴里に戻り、トリスタン・ドレーム、フエルナン・ロット、スーベルヴイエル、ロベル・ド・スーザ等の巴里はいかい詩人と俳論を戰はし、同八日マルセーユ出帆、歸路を辿り、六月十五日横濱に歸つてゐる。この四ケ月

の旅で、虚子は全く和服で押し通し各所でその門人知友に迎へられて、俳句道を說き、今樣「奥の細道」を歐洲に求めたのであつた。

別に「渡佛雜記」として新聞等に載せた通信を集錄してゐる。「海外に於ける俳句熱」その他を說き、また「俳話」として伯林日本學會に於ける講演、倫敦ペンクラブの講演、東京中央放送局からの講演等を再錄してゐる。相變らず俳句に「季」の必要な所以を說いて、旅中到るところで句を作り、老俳人の面目を現はしてゐる。歐洲紀行は今更珍らしくも無いが、俳人の紀行として本書は各方面に喜ばれるものであらう。

（昭和一一、八、一八　芝區新橋七ノ一二　改造社
四六判　五四三頁　二・〇〇）

源氏物語新考

島津久基著

著者は源氏物語研究の權威者、本書は新潮社の「日本文學講座」岩波講座「日本文學」その他に發表されたる諸論文よりなり、源氏物語を凡ての角度よりとりあげ、その全要素を分析し、精緻なる論評を下すと同時に、その全價値を究めんとしたもので、縱橫の論評は何人をも首肯せしめるものがあり、懇切なる解說には國文學に造詣の乏しい讀者をして、なほよく源氏物語の眞髓に近づくことを得させるものがある。

內容は研究篇、講說篇、論說篇の三部よりなつてゐる。

研究篇に於ける「源氏物語總論」「源氏物語論考」は全面的に源氏物語を把握したもので、「總論」では宮廷生活を中心に平安世相を描寫せる寫眞小說であり、同時に宿命觀と信念と倫理的意識を渾一せしめたる紫式部がその全力を傾注せる一大理想小說であり、心境小說であり、性格描寫、事件の展開上に於ける數々の不備にも拘らず、主觀と客觀との融化、寫實と理想との渾一、小說と詩の合流に於て餘りにも傑れたる作品であるとしてゐる。「論考」の方は客觀小說としてみたもので、文化資料、風俗資料として源氏物語のもつ價値を論じたもので、いかに正しく平安貴族文化を記錄し得たかを各卷に亘つて論じ、なほモデル、先行文學との關係等に及んでゐる。「源氏物語に描く作者の自畫像」は各卷に於ける女性の諸性格の中に紫式部の影像を求めたものでまことに興味のある一篇である。

講說篇は研究篇につくされたる諸要素を更に平易に取扱つたものでその梗概を述べた「源氏物語と宮廷生活」、鑑賞入門者のための「玉の小櫛から更科日記」の鑑賞の歷史及び源氏物語研究書の紹介等がある。

論說篇は更に源氏物語を中心とした諸論文で「紫女と清女」は兩才媛を比較論評して興味が深く、その他「源氏物語と現代作家」「紫式部日記と源氏物語」等の諸篇がある。

（昭和一一、五、五　神田區錦町一ノ一六　明治書院
四六判　四三一頁　二・三〇）

眞實一路

山本有三著

山本有三氏の作品はその人道主義的の色彩と一字一句を忽せにせざる刻銘なる良心的表現とを以て知られてゐるが、更に近年は描寫上に凡ゆる無用の文字を却け、極めて平易にして而も嚙みしめ味ふべき行文をとつてゐる。氏の作品を一貫する眞摯なる風格は、人間性に對する深い洞察、之を構成表現する作家的手腕はもとより、常に理想と現實との相剋に取材し、人生の精神的調和に對する强烈なる思慕を盛り込む氏の人生觀によつて釀し出されてゐる。

「津村教授」「生命の冠」時代より「生きとし生けるもの」「波」「女の一生」に至るまで、氏が文壇に築いて來た功績はまことに尊敬すべきものである。近來頓に圓熟境に入り、就中、兒童の世界、兒童の心理・感情の理解及び表現に於ては何人の追隨をも許さぬものがある。

「眞實一路」は昨年主婦之友に一箇年に亘り連載されたものであつて大いなる反響を呼んだものである。一編の主流をなすものは、氏の最も得意とする少年の世界を描いたもので、母の愛に餓えて、次第に素直な童心を失ひつゝある少年と之をめぐる父親と姉と母親との苦惱である。この少年の表現に於ては既に「生きとし生けるもの」「波」に於いて示した如く、こゝにも殆んど完璧に近く描き出されてをり、讀者の心をしみじみと打つものがある。

この少年の世界をめぐつて、更にその父親は連れ子のある恩人の娘を妻とし、その妻に家出され、その連れ子を眞の子として育て、しかも不貞の妻に最後まで誠意を捨てないチエホフの「伯父ワーニヤ」の如き重厚篤實なる人間であり、又その母親はその夫に愛を抱くことを得ずこれを捨てゝ眞實の道に生きんとし、愛人を追ふて自殺して終る。「眞實一路」に生きんとする人間、性格の相違が釀し出す人生の不幸の諸相、男性に對立する女性、男性に殉ずる女性、父性愛と母性愛等々、今日の時代が孕む問題が誠實に取扱はれてゐる。

（昭和一一、一二、一　牛込區矢來町七一　新潮社
四六判　二・〇〇）

夜明け前 第二部

島崎藤村著

前後七年に亘るこの大作は昨秋その完結をみた。一字一句をも忽せにせず周密なる計畫と準備の下に進められて來たこの大作がみごとに成就した時、人はたゞ感嘆の聲を惜しまなかつた。まことにこれはわが文壇が持ち得た最も優れたる作品の一つであり、世界文學の列にも伍すべく、不朽の名作であると云ふも過言ではあるまい。その評價は今さら玆に敞々するまでもないであらう。

第二部は幕府の崩壞に筆が起されてゐる。新政府の樹立、續いて東海、東山兩道軍の江戸進發、諸藩向背の形勢、對外關係等の騷然たる不安定の雰圍氣が主人公青山半藏の居村木曾谷の馬籠村に波及して來る姿を如實に描きつゝ混沌として夜明けの遠いわが國情が浮彫りにされてゐる。更に既に東都遷幸をみ、新政府は樹立され、封建制度は全く破壞されたが、なほ理想と現實との開きは遠く、民意尊重の實は擧らず、却て急激なる泰西文物の輸入があり、平田篤胤門の半藏が胸に描く王政復古の理想は脆くも潰えて、彼は時代の潮流の外に押流され、遂に漸く冬を迎へんとする木曾谷に狂死して終る迄、藤村の悠々たる筆致は些の亂れもみせず描きつくしてゐる。

明治維新史は數多いであらう。併しその孰れもが記錄したものは多く史實に留まるであらう。そこには大いなる肉付けを缺いてゐるの憾みがある。藤村は木曾谷を描いた。しかも描かれたものは當時の眞の世相であり、平民の世界であり、國民の姿であつた。歷史書の持ち得ない文學の使命がこゝに果たされたと云ひ得る。

（昭和一〇、一一、二五　牛込區矢來町　新潮社　四六判　七二五頁　二・三〇）

英吉利文學點描

小日向定次郎著

著者は廣島文理科大學教授で「英文學史」「近世英文學史」の著述によつて知られてゐる。本書は最近五六年來、雜誌に發表せられたる論文隨筆中より英文學に關係あるものを集めたもので、研究といふ性質のものではないが、英文學より興味ある主題を選んで紹介したもので、叙述も平易であり、英文學に關心をもつ讀書子にはもとより、一般讀者にも得る所が多いものである。十二篇及附錄を收めてゐるが、數篇をこに擧げてみよう。

「エリザベス時代の世相とはやり唄」「チャールズ二世の代のことども」の二篇は俗謠を通して當時の頽廢的な世相を說いたもの、「外國文學に見られる心中」は日本・支那の文藝作品に現はれてゐる心中と歐洲文學に扱はれてゐる心中とを比較したもので著者の文學的教養の廣さを示してゐる。「オフレアテイの紹介」は最近米國でその作品が映畫化され好評を得た愛蘭の作家オフレアテイの思想及全作品の詳細な解說で本書中の眼目である。「ハーデイの人と詩と」「斯うも見られる」『「カスタブリッヂ市長」の第一章の身賣に就いて』の三篇はハーデイの一面を傳へたもの。

その他、ベオウルフ物語よりミルトン時代に至る各時代の物語文學を紹介した「十八世紀以前の英吉利の物語文學」、西洋人の迷信として知られてゐる金曜日、蹄鐵、ウイッチを扱つた「英吉利文學と迷信」等がある。

（昭和一一、一、五　日本橋區大傳馬町　英進社　菊判　五〇〇頁　二・八〇）

ゲーテと伊太利

馬場久治著

ゲーテの伊太利紀行が、伊太利の美術風土を知る上に、またゲーテの魂の發展を迹づける上に、極めて貴重な事實であることに着目した著者は、ゲーテ自身の書いた伊太利紀行に基いてゲーテの思想、藝術の上に考察を試みたのが本書である。

ゲーテは伊太利旅行を轉機として古典主義へ轉向したといふ。本書はそのことを序論として筆を起し、第二章以下は伊太利紀行の順を追うて解說を進め、をはりに伊太利旅行以後東洋への轉向を說いて筆をおさめてゐるのである。デオニソス的ゲーテが伊太利旅行を轉機としてアポロ的ゲーテに轉向したその過程が伊太利紀行の中に如何に現はれてゐるか。ゲーテは伊太利旅行以後いはゆる疾風怒濤時代の浪漫主義的激浪を如何に毅然として防衞し、おのれの古典主義を築いて行つたか。それが如何にして東洋への關心に進み至つたか。そこでは特にデオニソス的ニイチエとの對比において興味深く說かれてゐる。

本書は成瀨無極氏が「序」にいふやうに、「或は叙述の冗漫

重複に陥り或は所論の正鵠を失したところ」があるやうにおもはれるが、それにも拘らず「全體に亙つて著者の熱誠と努力とは十分に認められる」のである。本書のやうな書を讀むことには一つの時代的意義があるやうにおもふ。即ちある意味において疾風怒濤時代である現代の日本において如何なる生活態度をとるべきであるか、また更に東西文化融合の問題長の事實から我々は多大の示唆を與へられるとおもふのである。

（昭和一一、二、五　京都市中京區二條通河原町
東政經書院　四六判　三五八頁　一・八〇）

學生と教養

鈴木利貞編

近時、青年殊に知識的な青年達の間に教養の問題が眞面目に考へられるやうになつたことは喜ぶべきことだと思ふ。知識的な青年の無氣力が言はれるのも、青年の教育に於て知識偏重の弊が問題にされるのも、所詮は教養の問題と關聯して考へられなくてはならぬことなのではあるまいか。けだし「教養」の問題は、畢竟「人間」の問題に他ならないのだ。

大ざつぱに、學問を知識の體系だとすることに對して、教養とは人間そのものの體系だといふことが出來やう。あらゆる文化的所産が人間に於て綜合されたものが教養である。教養ある人とは、眞の意味での文化人の事であらう。そして、文化はかゝる教養高き眞の文化人の生活層を地盤としてのみ正しく發展するのである。

今日青年の無氣力が言はれ、その文化上に於ける發展的契機としての意義が疑はれるのも彼等の有つ知識が單に知識たるに止つて、人間的に綜合されてゐないからだと思ふ。また知識偏重の教育が非難されるのも結局この意味に於て理解しなくてはならぬものであらう。今日量の上から知識が多く與へられ過ぎてゐるなどゝは苟くも教養あるものの夢にも思はぬことである。知識を知識としてのみ與へるといふところにこそ、知育偏重の當に非難に價すべき過誤が存するのだと思ふ。して見れば、知育偏重を改めて、德育に力を入れるとしても、それが人間そのものを作ることを忘れて、ひたすら形を整へることをのみ念とするのならば、そこでも同じやうにまた德育偏重の弊が言はれねばなるまい。要するに問題は人間にあるのだ。

然らば如何にして青年の「人間」を作ることが出來るであらうか。

思ふに教育者自身の人間を作つてかゝることが先決問題なのであるが、少くとも青年の側に於て內面的に崩し來つた人間組織の問題を正しく導いてやることは、さしあたり最も有效な方法たるを失はぬであらう。

本書は正にかゝる目的に副はんがために企てられた著述である。

先づ青年に與ふる一般的助言を安倍能成氏が書き、次で哲學、倫理學、文學、歷史、傳記、自然科學、社會科學等が青年の教養と如何なる意味に於て交渉するかをそれぞれ、桑木嚴翼、倉田百三、谷川徹三、大類伸、鶴見祐輔、石原純、蠟山政道の諸氏が述べ、更に青年時代の自傳的叙述を、美濃部達吉、河合榮治郎、東畑精一、高田正、木村健康、上田達雄の諸氏が執筆してそこに時代と年齡とを異にする人々の特徵が浮彫りに示され、最後に青年に對する家庭よりの言葉として野上彌生子氏の母としての注文が聞かれてゐる。

本書は標題にも示されてゐる通り主として學生を對象として書かれたものであるが、一般知識的な青年はもとより、廣く青年の教育並に教養の問題に關心を有つ知識人は一讀して欲しい。

（昭和一一、一二、一〇　京橋區京橋三ノ四　日本評論社
四六判　四六二頁　二・〇〇）

學窓雜記

小泉信三著

かつて推薦した「師・友・書籍」の姉妹編と見られるものである。編纂も大體同じやうな骨組みで、初めに福澤先生に關するもの、漱石・鷗外等文學者に關するもの、內外の經濟學者に關するもの、をはりに旅行・讀書についての隨筆といふやうな工合になつてゐる。そのほか本書には「鎌田榮吉先生一周忌」「堀內輝美君」といふやうな特に慶應義塾に關係ある人々について書いたものもある。

福澤先生・漱石・鷗外に關する最初の數篇はなんといつても力篇でもあり、最も一般的な興味があらう。福澤先生に對する著者の尊敬と關心とは限りなく大きいものゝやうである。「理論家漱石」「森鷗外と社會思想」の二篇は、從來文學の畠では全く看過せられて來た方面であつて、著者のやうな人でなくては出來ない貴重な考察である。

經濟學・經濟學者に關するものは、いづれも著者の堅實無比の學風を窺はせるもので、例へば「マルサス百年所感」の如きも、簡約の中によくマルサス人口論の眞意義を闡明して

る。「福田博士を弔する」一文も、著者の師に對する愛敬の念を示すと同時に故博士の學者・教師としての眞面目を明かにしてゐるものである。その他の諸篇もそれ〴〵學究上參考となるものである。

をはりの旅行・讀書に關する數篇の隨筆は、著者の文筆の才を一入思はしめるものである。學術論文やエッセイにおいても現代有數の名文家たるを思はしめるのであるが、これらの隨筆において一層自由な才能の流露が見られる。著者の文學に對する興味關心は一朝一夕のものではないことが知られるのである。前者と共に讀むべき良書として推奬する次第である。

（昭和一一、七、二五　神田區一ッ橋　岩波書店　四六判　三四一頁　二・〇〇）

學窓隨筆

金田一京助著

一高の野球の聲援に「勝つた方がええ」といふのがあるは何人も知つて居るが、その出處が何であるか知る人は少なからう。サイノロジーも今ではモダン語辭典になくてはならない語になつて居るが、その出典は何處であらうか。これ等は單なる訛語ともいふべきもので別に文化的意議がある譯ではないが、金田一博士のあの纖細な筆致を以つて綴られると、しみ〴〵と我々の胸憶に甦つて來るものがある。この隨筆には斯うした、俗語や、轉訛語の類が興味深く取り扱はれて居る。

然し著者は何といつてもアイヌ及びアイヌ語學の最高權威である。從つて本書の大部分はその研究の餘暇に生れたものといつてよい。この意味に於て學窓隨筆の名は最も相應しい。

アイヌは今では其の數一萬五六千に過ぎず、亡び行く民族であることは何人も知つて居る處であるが、何時の代にどの民族と別れ、どこをどう通つてこの島に渡來したかについては未尙學者の間に定說がないと言はれてゐる。さうして有史以來このアイヌが我大和民族と如何なる關係を持續して來たかと云ふ樣な點については「蝦夷知識の消長」の項に簡明に記述されて居る。

アイヌの習俗についても種々記述されて居るが、就中「歌の審判」「賠償」「アイヌの慰」「熊祭の話」等は最も興味ある話柄である。

（昭和一一、三、一五　京都市河原町二條下ル　人文書院　四六判　三一四頁　二・〇〇）

藝林間歩

木下杢太郎著

「南蠻寺門前」「厥後集」の名作又は切支丹文學の研究によつて文名高い著者も近年は專攻の醫學に匿れて創作に筆を絶つてゐるが、折々發表してゐる隨筆は教養の深さ、感受性の豐かさに於て蕪雜なる雜文を外に香氣を放つてゐる。こゝに昭和初年以後最近に至るものを收めて本書がなつた。「森鷗外」は岩波講座「日本文學」に執筆せるもの、師事せる鷗外の全貌をその生涯の時代別に描き出したもので短章よく鷗外の眞髓を傳してゐる。同じく改造社の「日本文學講座」のための「幸田露伴」が收められてゐる。露伴の全思想を分析しこれをその諸作品の中に把えたもの、これまた露伴を傳して殘すところがない。明治大正文學の變遷に觸れて「我々の通つて來た時代」「與謝野寛先生還曆の賀に際して」「パンの會と屋上庭園」があり文壇の推移を知ることが出來る。「俳諧と自然」は各時代による月の文學的觀照の差異に筆を起し萬葉・古今・新古今を經て連歌師・俳諧人・芭蕉・蕪村の自然に及んだもの。「日本文明の未來」は「假名遣改定案抗議」「古典復活禮讃」「古語は不完全である、然し趣が深い」と併讀すべきもので、便宜主義・多數決主義・能率主義に加へられたる一大鐵槌であり、功利主義臭味の文明を排擊して、精神文明を高揚し、古文明の再檢討を說いたもので、國語問題に對する諤々の名論文である。「フランソワ・ドキュレル」「ポオル・ジェラルディ」「アクロポリス山上のアナトオル・フランス」は著者が佛蘭西文學に於ける研究の一端を示したものである。終りに著者の美術に於ける業績であるフウシエの「健駄羅藝術序論」の鈔譯、シタインの「燉煌千佛洞の裝飾藝術」の鈔譯がある。

（昭和一一、六、一五　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判　五二八頁　二・六〇）

珊瑚樹

小牧健夫著

小牧健夫氏は丸大教授で獨逸文學を專攻してをられるが同時に隨筆家としても著名である。本書は最近數年間に新聞・雜誌に寄稿されたものを收めたものである。書名「珊瑚樹」は氏の庭に美しい珊瑚色の實を結ぶ愛木にとつたものゝ由である。

獨逸文學を扱つたものを中心として、その他書誌關係のも

の、知友錄その他を收め、いづれも教養の深さを隨所に示してゐる。その數篇をこゝに引用すれば、

卷頭の「沈める鐘」は諸國に傳はる沈鐘傳說をとりあげ、ハウプトマンの名作「沈鐘」に及んでゐる。「海上一月」は氏が渡歐せる際の紀行で、上海・香港・印度洋・コロンボ等の印象記で、才筆まことに味ひみるべきものである。伯林の春秋を描ける「伯林消息」、ミラノの輝くが如き「紺靑の空」、さては有名な「ハイデルベルク」の紀行があり、又「ノヴァリス斷想」「ギルヘルム・テルについて」「綠鸚鵡」等の隨筆といはんよりは稍々研究に類するものもある。更に「獨逸文學夜話」と題する一聯は「獨逸のサツフオー」「哀れなハインリヒの物語」「ゲーテの遺言」「新らしきクライスト劇」を收め、氏の專攻の副產物である。知友の憶ひ出を扱つたものでは「あゝ玉杯の作曲者」は一高寮歌「あゝ玉杯」の作曲者楠正一氏が氏と同じ寮に起臥した頃、ある櫻月夜にベートホーヱンの「月光曲」を彈じた思ひ出である。「透谷の墓」は芝區伊皿子の北村透谷の墓について述べたもの。「文庫の思ひ出」は年少、「文庫」に詩を寄稿した頃の思ひ出で、文庫の詩風をあげたものである。終りに「明治文學と西洋文學」があり、明治文學に及ぼした外國文學の影響を記したものでこれも讀物といはんよりは日本文學研究の一資料といふべきである。

（昭和一一、九、二五　神田區小川町三ノ八　白水社　四六判　二七八頁　一・八〇）

散人偶記

佐藤春夫著

この書に集めたものには、著者の本領たる文學的氣分の濃厚なものと、著者の風貌を偲ばせる紀行とがある。前者に屬するものは「日本文學觀」「秋花七種」「和漢春の詩歌」「漢詩漫妄解」等であり、後者に屬するものは「西湖の遊を憶ふ」「水樹記」「再遊長崎」「洗塵紀行」「高野山上の春雪」等である。更に「德島見聞記」として「日本精神」の著者でポルトガル人モラエスが住んだ德島の地に遊び、モラエスの人と文學について詳しく語つてゐる。尙人物評論としては、芥川龍之介、蘇曼殊、內田百閒、生田長江等を論じ、著者獨自の觀察眼を働かせてゐる。また「花火はなし」とか「鮨はなし」とかいふ氣輕な隨筆もあり「慊齋閑話」（因にいふ慊齋とは佐藤春夫の雅號である。）の類もあるといふ風であるが、著者の醇美な文學精神はどの一篇にも藝術的な氣品を保つてゐて、讀者を飽ましめない。よく隨筆集として此の書を推薦する所以である。

（昭和一一、六、麴町區三番町一　第一書房　四六判　三四二頁　一・五〇）

昭和隨筆集　第一・二卷

文藝家協會編

「昭和隨筆集」は全二卷にして、文藝家協會加盟の現代日本の文學者三十八名の隨筆を、各自選して世に問ふたものである。島崎藤村をはじめ文壇現役の人々がその最も意を得たりとする隨筆を一篇乃至三篇づゝ自選せしめて成つただけ、後代に殘しても恥しからざる名筆の多くが集められてゐる。文學者と一概にいつても、小說家もあれば劇作家もあり、飜譯家もあり詩人もあるといふ風で、三十八名各人各說でその特異の筆を駈せたもので、流石文筆をもつて立つ人々だけに文章上の範とすべきものあり、その感情流露の特異なるものあり、又その所見考證の秀拔なるものあり、各々その筆者の本領を瞥見せしめるに足るものである。

本書は現代日本の讀書層の鑑賞に堪へ得るばかりでなく、また後代よりみて昭和年代の文章家の文章として味到し批判し得るものである。また隨筆であるだけに讀んで興深いものがあるから、汎く一般の家庭にも品のよい讀物として薦めてよいものと思ふ。

（昭和一一、二、一五　神田區一ッ橋二ノ九　日本學藝社　四六判　第一卷三三四頁　第二卷三一八頁　各三・〇〇）

生活の窓ひらく

新居格著

この本も第一書房出版の文學讀本・人生讀本風に、月別に配列編纂された讀本式の文集である。著者は「あとがき」の冒頭でいつてゐる。『これがわたしの「生活を映じた文章」である。わたしの生活が形を成してゐないやうに、わたしの文章も體を成してゐないのではないかと恐れる。』と。またいはく「わたしは筆を執つて來た。これからも執つて行くであらう。わたしの執筆は生活のためであつた。その生活も高邁なる精神に刺戟されたのではなく、卑近な生活の事實に引きずられての執筆であつた。」またかうもいつてゐる。「わたしは多年筆を執つて來た。しかし、文學のためとか、また、人生のためとか言つた意識は强くはなかつた。只管に生きてゆくためのものだつたが、その中に或はわたしの文學、人生、思想があるのかも知れない。それらのものがないとしても、わしただけの人間感情はある筈だ。」と。これらのことばは、最

もよく著者の性格とこゝに集められた文章の性格とを、語つてゐるとおもはれる。著者はいはゆる現世の自由人といふべき人であらう。開放的で柔軟で、センシブルで明朗な、一見無性格に見えるものが、最もよく現代都會人の一典型をなしてゐるのである。著者はこの本の題名の如く、まさに「窓をひらいてゐる人」なのである。その中には現代のいはゆるいとも朗かな、さわやかな空氣が自由にはいりこんで來るのである。讀者はこの本のどこを開いて讀んでもいゝ。いたるところにモダンなサロンが開かれる。その中に出入りする人物はいづれもみな輕ろらかで、自由で、たのしげで、屈托がない。讀者の中にはむしろ却つて憂愁を感ずるものがあるかも知れないほどである。かくの如きが現代か。しかりたしかに現代である。現代といふことばによつて理解せられるものは複雑であるが、現代理解の一助としても讀んでいゝ本である。

（昭和一一、八、二〇　麴町區三番町一　第一書房　四六判　四七六頁　一・五〇）

涯てしなき道程

田部重治著

山の隨筆家として知られる田部重治氏の新著「涯てしなき道程」は、教養ある氏の生活から生み出された人生隨時のユニック感想と、氏の倦まざる散歩愁・登山愁によつて享受された自然觀より成るものである。最初の「涯てしなき道程」といふ感想から四十七篇の多きに亘り、そのうち「再びアベラールとエロイーズに就て」といふ中世文學研究の所產たる一篇を除いて、すべて著者の心境を率直に物語るものであつて、著者もいふ如く、作者の心持に這入る上には、之ほど適切なものはないといへるであらう。

人生の道程は無限であり、人間は無限に涯しなく問題を作り、無限より無限にその道程の極りないのを思へば、われわれは自からを知り盡したと思ふことは大きな認識の誤りと云ふべくわれわれの魂の內容は、時代をふるにつれ、經驗をうるにつれ、豐富にされ、絕えず流動するものであると感じた著者には、その道程を行く一人として、文學に行き、高原に行き、山岳に行きする一先達の姿を眺めることが出來る。篇中「散歩禮讃」の如きは、著者の最も得意とする主張で、散歩はどこまで行かなければ一段落つかないといふものでもなく、どこででも切上げることの出來るもので、最も害のない、調節の出來る、又豐富な內容をもつ運動で、これこそ本當の意味に於て、自然に還る運動であると氏は述べてゐる。世の最も消極的な、無精な、散歩者達にも肯定出來る議論で

ある。

これと同じやうに氏の隨筆は、常識を幾度も嚙み味ふて、常識の眞味を會得させる程のもので、一般の讀者を多く得てゐる所以であらう。この一新著を讀書子の机上に薦めたいと思ふ。

（昭和一一、一一、一〇　麴町區三番町一　第一書房　四六判　三四六頁　一・五〇）

空谷先生の「人犬墨」

野上豐一郎

「人犬墨」は近頃おもしろい本である。

——しかし、「ヒト・イヌ・スミ」と訓んであげてください。これは芥川龍之介のひそみに倣つた言ひ方であるが、此の本を讀むと、芥川的雰圍氣に包まれてしまつて、ちよつとそんな口吻をまねて見たくなる。そのくせ、著者空谷先生自ら、恐らく自嘲的にではあらうが、時時「ジンケンボク」と發音される。

「人犬墨」は讀んで字の如く人間と犬と墨を主題とした隨筆集である。そのうち人間に關するものが最も多く、人間篇は芥川龍之介・俳人井月・森鷗外・德弘太無・佐竹蓬平等に關する追憶を主とするが、その中でも芥川龍之介に關するものが最も多く、全篇三十二章のうち十章を占めてゐる。

空谷先生は芥川龍之介の主治醫でもあれば、雅友でもあり心友でもあつた。年は親子ほどちがつてゐたと先生自らも言はれて居るが、眞の交遊の上で年などは問題にならぬ。芥川龍之介も空谷先生には深くゆるす所があり、空谷先生もまた芥川龍之介をば弟の如く愛し兄の如く敬してゐた。その空谷先生の筆に上つて一代の才人芥川龍之助の面目はまことに躍如たるものがある。殊に「芥川龍之介終焉の前後」「芥川龍之介のこと」の二篇の如きは他の何びとにも書けないもので、芥川龍之介を知る上に於いて貴重な文獻である。

俳人井月は空谷先生と鄕國を同じうして生きてゐた乞食俳人であつた。良寛・桃水と竝べて聯想される一種の畸人であるが、併し單なる奇行の人ではなく、その性格に甚だ尊敬すべき多くのものを持つてゐた詩人であつたことが思はれる。空谷先生は曩に「井月句集」を編纂された事があつたが、本集に收むる所の「井月の逸話」は文章としても確に全篇中の名文である。

次に犬に關しては、空谷先生が若かりし頃臺灣の或る衞戍病院分院長時代に經驗した一つの興味ある觀察が持ち出されてある。

墨は筆墨韻事に關するものであるが、特に「墨病」の一篇が他の數篇に立ちまさつて空谷先生近來の風流癖を最もよく物語つてゐる。空谷下島勳氏は醫の人、また能書を以つて聞こえ、畫技を以つてすれば觸筆忽ち山紫水明の姿を抒ぶ、と室生犀星君が跋書してゐられるやうに、最近殊に山水畫の製作に淫して、心境欣美に堪へないものがある。私も一見をゆるしてもらつた「梓川溪谷畫卷」の如きは、枝はもとより素人の域を多く出でないものがあるとはいへ、いかにも金のほしくなささうな算致であつて、ひそかに雲林・黄鶴の壘を摩さうとねらつてゐる意氣旺んなりと謂ふべきである。芥川龍之介が生きてゐたならばまさに拍案一番するであらう。空谷先生もまた誰よりも芥川龍之介に見てもらひたいであらうと思つた。

空谷先生は私の家の主治醫でもある。しかし幸ひにも——恐らく空谷先生にとつても——私の家では病氣になるものが少く、隨つて空谷先生に主治醫として接する機會よりも風雅の先輩として接する機會の方が多い。さういふことが機緣となつて、私はをこがましくも「人犬墨」の題簽を揮毫することをうかうかと引き受けて、後悔臍を嚙むとも及ばざる拙を天下に曝してしまつたが、之は空谷先生竝びに讀者諸君に深くおわびをしなければならぬ。

終りに、私の此の紹介は世間によくある提灯持の意圖から出たものではなく、帝國圖書館員の方が見えて、「人犬墨」は良書と思ふから何か書けと云はれ、喜んで禿筆を呵した次第であることを一言附記させていただきます。

（昭和一一、八、一五　四谷區坂町七八　竹村書房　四六判　三三七頁　二・〇〇）

隨筆楓荻集

入澤達吉著

入澤達吉博士の隨筆集は、昭和八年に「雲莊隨筆」が出たが、この程楓荻集が刊行された。これには博士が新聞雜誌に寄せられた隨想・史傳・紀行の類と、ラヂオや日本醫學會で爲された演說及び思ひ出の記が含まれてゐる。その隨筆は芳醇な酒の如くコクのあるもので、どの一篇を讀んでも、學識才氣共に逸つて興味深甚なるものがある。

「隨想」に含まれる「屠蘇危言」「詩話數則」「遁世者」その他の諸篇及び「紀行」中の「ダブリンの思ひ出」「觀九州記」「東北閑話」その他五篇には、著者の日常或ひは旅中の觀察の周到、その著眼の非凡、加ふるに著者の學殖の豐富を窺はせるに足るものがある。而もその中に好謔あり、皮肉がある。例へば「詩話數則」の中に、死後の詩といふものがある。それは平生漢詩も何も出來ぬ男が、漢詩人を氣取つて代作させたゐたから死後にも詩が生れた所以であるとか、菊池五山が五山堂詩話を刊行したが一向に賣れない、世人之を老妓と比した。その譯はシワ（皺—詩話）ばかりで、顧客が無いといふ意味であるとか、なかなか乙な落し話も入つてゐる。

著者の幼少の生ひ立から、四年間の洋行の間のことを書いた「思ひ出の記」といふ文章には博士の人格風貌を偲ばせると共に、母に對する敬慕の念が泌々と物語られ、讀者をして襟を正さしめるものがある。

「史傳」に於ては、レエオポルド・ミユレル、グロートの如き本邦醫學界發達に貢獻されたる人々の傳記や、エミン・パシヤ傳、ミユツケ大尉遭難記、マラーが事、ギロチン等について綿密なる史資調査の結果が熱烈なる筆致で綴られてゐる。科學者として著者を物語るものであり、その方面の研究への新らしい貢獻でもある。

（昭和一一、八、五神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判　六〇二頁　二・六〇）

偏光鏡

辻二郎著

寺田寅彦博士を總帥として、近年科學者の隨筆は讀書界に相當廣範圍に亘つてファンを獲てゐる本書もその一つに數へることが出來る。

著者は工學博士と云ふいかめしい肩書を有つて居られるが本書を通して窺つた所では趣味の廣い、モダーンな紳士であるらしく思へる。文章は誠に達者で唯々感歎の外はないが、學問上からも隨筆の上からも師事して居られると云ふ寅彦博士のあの透徹した人生觀や社會批評に較べては未だしの感のあるのは、著者の既に承知せらゝ所であらうし、又この樣な紹介の仕方は、寅彦博士の並外れてすぐれたことの證明になつても、決して本書が平凡であると云ふ證明にはならない。それ所か本書は寅彦博士には及ばずとも、その次に位する程のすぐれた隨筆である。

內容は「續西洋拜見」「窓の外」「偏光鏡」と云ふ樣に大別せられ、續西洋拜見は先年出版されて好評であつた「西洋拜見」の續篇と云ふ意味のもので、歐米を旅行された折の見聞やら印象やらが誠に巧みな筆致で描き出されてゐる。「窓の

外」は山の話、演藝の話、その他著者の身邊、趣味の廣さを語るもの、最後の「遁光鏡」だけは著者專門の科學に關するものであるが、これとて玄人用のものではなく、多くの素人を對象とした平易なものである。全卷を通じて洵に輕快な、モダーンで、明るいと云ふ印象の强い隨筆集である。

（昭和一一、一二、二〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判　三六七頁　二・二〇）

もめん隨筆

森田たま著

森田たまといふ名はおそらく廣く知られてはゐまい。しかし知つてゐる人には注目せずにはゐられない名であらう。それほどにこの人の書くものは、忘れがたい味をのこすものである。女としてはまさに現代有數の名隨筆家といはるべき人であり、もつと有名になつていゝ人のやうにおもはれる。主として婦人雜誌に、ときどきは新聞紙上に現はれるこの人の文章には、意外に多くの愛讀者が吸ひよせられてゐるのではあるまいか。この人の文章は相當磨きのかゝつたものであり永い修練の結果をおもはせるものではあるが、文才は天禀とおもはせるほどに、禀質と渾然結びついた天衣無縫ともいふべきものである。

本書に集められたものは、これまで雜誌や新聞に發表せられたもので、すでに讀者の眼にふれたものが多いのであるが纏まつて一本となつたものを讀んで見ると、著者の特色が一段と色濃く感じられ、一入その妙趣に包まれる思ひがするのである。日常身邊の事實に取材することは、女の人の隨筆として極めて自然でもあるが、それがまた古來の日本の隨筆の傳統を偲ばせ、遠く「枕草紙」に親近するものを感じさせるのである。著者を現代の清少納言といつても或は甚だしい見當違ひではないかも知れない。著者の文章の風格は非常に粹なものであり、氣品の高いものである。趣味情操すべて贅澤な感じのものではあるが、やはり貴族的なものではなくて、市井の風雅といふべきものであらう。書かれてゐる生活は殆んどすべて個人的な生活であり、全體として生活の沈滯を感じさせるものではあるが、近代人としての鋭敏纖細な神經の動きは至るところに見られるのである。なんといつても近來の名隨筆集の一つとして推奬に値するものとおもはれる。

（昭和一一、七、三　丸の内ビル五階　中央公論社　四六判　三九〇頁　一・七〇）

桃の雫

島崎藤村著

「飯倉だより」「市井に居りて」等に次ぐ、六十歳を迎へた後の島崎藤村の感想集である。この著者の文學的業蹟については此處に喋々するまでもなく有名であるが、これは小さい言葉によつて藤村文學の背景を示すものである。著者は自己の身邊を顧みて、「年若い時分には、私は何事につけても深く深くと入つて行くことを心掛け、また、それを歡びとした。だん〳〵この世の旅をして、いろ〳〵な人にも交つて見るうちに、淺く淺くと出て行くことの歡びを知つて來た。」と述懷してゐる。老藤村の心境は益々透徹して溫いこゝろと靜かな眼が古人に往き、新らしい時代に行きして、身に泌みて味ふべき言葉を綴つてゐる。それらの小粉ではあるが、藤村のやうな人が到達した境地を示すものである。老子、杜子美、芭蕉、本居宣長、岡倉覺三、鷗外漁史等について語り、またトルストイ、チエホフ、パスカル、シエークスピア、バルザック、ゾラ等の著作刊行の序跋として感想を述べてゐる。また此處には著者の大作「夜明け前」を書いた折の「覺書」を綴り、「小半日」「伊香保土產」「京都日記」等の紀行も加へられてゐる。淡々としたる中にも滋味掬すべき感想隨筆集で、何人にも感銘を與へるものであらう。

（昭和一一、六、五　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　菊判　二三〇頁　一・二〇）

第八兒童讀物

日本少國民文庫

發明物語と科學手工

廣瀨基著

心に太陽を持て

山本有三著

世界名作選（一）

山本有三選

少年少女は一般に旺盛なる讀書慾を有する。教科書に興味

を持たない彼等すら課外の讀み物に寢食を忘れて讀み入る姿は隨所に發見することが出來る。これ心ある世の父兄教師が兒童讀物の選擇に人知れぬ苦心をなす所以である。

本文庫の編者執筆者は各其の方面に於ける一流の人士で、該博なる學識、典雅なる文藻を少國民の讀み物のために捧げられたもので、世の父兄、教師の期待に添ふものであることを確信する。

「發明物語と科學手工」は標題の如く各種發明家の苦心談、兒童に喜ばれる科學手工の工作法を平易に說いたもの、「心に太陽を持て」は古今東西の逸話美談であるが山本有三氏の麗筆によつて文學的の香を漂はしてゐる。「世界名著選」にはレシングのたとへばなし、キプリングのタヴイ物語、トルストイの人は何で生きるか、ロマン・ローランのジャンクリストフ、ケストネルの點子ちやんとアントン等が各々一流の譯者によつて平明に譯出され、興味津々たるものがある。

裝釘は恩地孝四郎氏の手になり極めて瀟洒たるもの、挿繪も亦、恩地、大野、武井、田中、中村等一流の挿畫家を網羅し、內容外觀共に兒童讀物に相應しい。

（發明物語と科學手工　昭和一〇、一二、二〇
心に太陽を持て　昭和一〇、一一、五
世界名作選　昭和一一、四、八

昭和十二年三月二十八日印刷
昭和十二年三月三十一日發行

良書百選第六輯

定價金二十錢

編輯兼發行者　社團法人　日本圖書館協會
代表者　松本喜一

印刷所　株式會社　東京築地活版製造所

發行者　社團法人　日本圖書館協會
東京市麴町區三年町一番地文部省內
振替東京二四一八一番

牛込區矢來町　新潮社　四六判　各一・〇〇）

日本讀書新聞

自熱的歡迎裡に愈〻創刊!!
知識人の爲の文化新聞!!
最も深切な讀書ニュース!!

▼美しいカバー（實費卅錢）がありますから永く保存されゝば出版年鑑となります

清新潑剌多彩なる內容!!
讀まねば損をする新聞!!!!
毎月三回發行・一部三錢!!!

誰に買ひよいも
購讀料と
御申込方法

▼旬刊（毎月三回一の日發行）
▼新聞半截型・毎號十六頁
▼一部代金三錢（稅五厘）
▼六ヶ月代五十五錢（送料共）
一ヶ年一圓
〜〜〜各書店にもあり〜〜〜

創刊號主要內容

▽讀書論　三木清▽國民文化のために　德富猪一郎▽出版文化の橫斷面　河上徹太郎▽文藝時評　本多顯彰▽新聞時評　阿部眞之助▽美術時評　森口多里▽ドイツの讀書文化　大塚虎雄▽日本讀書新聞の任務　岩波茂雄▽讀書評論　馬場恒吾、柳亮、正木千冬、水原秋櫻子、村田孜郎▽「地中海」梗概　富澤有爲雄
▼內務省納本目錄（十日間の新刊）▼雜誌總目錄　安田德太郎▽職業婦人讀本　▽島崎藤村歸朝談集　▽アメリカの十仙雜誌　▽石川武美氏に訊く

第三號・主要目次

▽讀書文化の爲に　長谷川如是閑
▽政黨の恥　尾佐竹猛
▽名著の紙上陳列　市島春城
▽讀書政治家　山浦貫一
▽空漠　兼常清佐
▽文學を愛するソヴエート國民　熊澤復六
▽「百貨店論」書評　小汀利得
▽「蒙古近世史」書評　小林高四郎
▽圖書館レポート
▽戀愛の書を語る　伊藤整
▽魯迅著「阿Q正傳」梗概　增田涉
▽「戰爭は儲かるか」書評　四地與四松
▽「隣邦ロシヤ」書評　馬場秀夫
▽支那文化の悲哀　山本實彥
▽新興宗教刊行物を檢討する

◆第四號主要內容

▽眞の情操的敎育　田部重治▽青年の學問的頽廢　岡邦雄▽「日本的」の幽靈　本田喜代治▽お小使ひ　森田たま▽驚くべきフランス女性の讀書慾　水戸俊雄▽ドイツ新刊報告　灰川庄介▽讀書評論—十一册の本を取扱ふ▽西鶴とエロチシズム　鶴見誠
▽裸の町梗概▽テレビイの話▽新刊類別揭載▽滿鮮臺の讀書界▽本の社會人に訊く　下中彌三郎▽「紅塵煙身邊記」評　尾山篤二郎▽「綠の木陰」書評　本多顯彰▽おとなの小說　東郷青兒▽舞踊藝談　永田龍雄

東京小川町　神田通
神田神町

日本讀書新聞社

電話神田・四六六九
振替東京一三二四二三

!! よへ備に庭家に館書圖に校學

第一書房

ズイリン本讀

夏目漱石 春夏の卷 秋冬の卷
文學讀本
つた夏石文學の問題、名所案内。多彩なる文豪の生面のみづみづしさに、今更新しき漱石の出現かと讃目される。

正岡子規 春夏の卷 秋冬の卷
文學讀本
明治の文壇に隠離たる光芒を放つて君臨する英雄兒、正岡子規の全著作の精髄は悉くこの二卷に集る。編纂者柯東碧梧桐氏は子規の最も良き理解者である。

島崎藤村 春夏の卷 秋冬の卷
文學讀本
春夏秋冬に分けて編纂によつて、日本の季節のうつろひが、この藤村の文字を通して、一層鮮かに讀者の心に印象づけられる『文學讀本』だ。

菊池寛 春夏の卷 秋冬の卷
文學讀本
多面多様なる大作家、菊池寛氏の偉大なる人格と識見とが一字一句の隅々に反映してゐて、これは又他がたき『人生讀本』である。『社會讀本』でもある。

吉田絃二郎 春夏の卷 秋冬の卷
文學讀本
高き思索者であり、清き純情の作家である吉田絃二郎氏の珠玉の文字、蹴味盡るる『文學讀本』氏自ら感激と道懐の中に一篇一篇に註書を加へられた。

佐藤春夫 春夏の卷 秋冬の卷
文學讀本
詩人にして作家であり、その識識と洞察に於て他の追從を許さぬ佐藤春夫氏の『文學讀本』。氏自ら全二卷の全著作は一冊の中に網められる。

寺田彌吉著 **親鸞聖語讀本** 四六判五七〇頁 定價一圓五十錢
寺田彌吉著 **蓮如聖語讀本** 四六判三五〇頁 定價一圓八十錢

山田靈林著 **禪學讀本** 四六判三二〇頁 定價一圓五十錢
大田黒元雄著 **音樂讀本** 四六判四六〇頁 定價一圓五十錢

横光利一 春夏の卷 秋冬の卷
文學讀本
横光利一氏の數多い著作より、その全部を季節に、けて鮮、く敎めたる文學讀本。我文壇に燦然、輝く氏の偉大なる業績のエッセンスの一大集成である。

山本有三 春夏の卷
人生讀本
山本有三氏の全著作の中から人生に關する佳句のみを拔萃し、季節に配列したる『人生讀本』。讀頁なるヒューマニスト、氏の面目躍如たるものがある。

高山樗牛 春夏秋冬
人生讀本
絢爛たる美文、純潔なる心情、明敏なる思索、明治の天才思想家、我國ロマンティシズムの精華たる高山樗牛の全體はこの書によつて生々と再生した。

萩原朔太郎 春夏秋冬
人生讀本
すぐれたる詩人であり、それにもまして直觀の智人である萩原朔太郎氏！これは說かれた人生ではなく、發見され、創造された新しき人生の海圖である。

賀川豐彦 春夏秋冬
人生讀本
『死線を越えて』『一粒の麥』の著者にして、人類愛の戰士、大宗教家、賀川豐彦氏、これぞ眞の生命の文學、眞の愛の聖書、修養の書である。

土田杏村 春夏秋冬
人生讀本
思想生活二十有餘年、半生不治の病と闘つて、堅歩よく等身の大著作を殘した土田杏村氏の人生讀本。陶山務氏苦心の編纂、懇切なる註書が添へられた。

四六判總布裝美本 各冊著者肖像入 各一圓五十錢 (書店にて發賣中)

第一書房

(目錄進呈)
東京市麹町區三番町一
振替口座東京六四二二三番 電話九段(二)三三四一四五四

坂井豐著

禪と數學

再版出來

「禪と數學」此の一見何の聯絡も無きさうな二つの對蹠的な命題をとりあげて、著者は其處に獨自の藝術的境地を展く。即ち茶道と共に我國獨自の形態をとつて發達してきた禪が武士道精神に結びつき其處に高邁なる日本精神文化の花を開いた。かゝる禪の汎神論的虛無の境地に立つて、著者は生活を語り、宗教を語り、更に數學のより觀念的歸納を思辨する。即ち、此處に淡々たる筆致の下に描かれ、語られる所のものは、最早や單なる數學書や哲學書ではない。さらに單なる詭辯の書でもないことは勿論である。之こそ優れたる叙智の人のみが知る生活の白道を照す聖典である。之こそ最も新しい意味に於ける近代科學隨筆の最高峰である。

近代文化の喧騒の中にあつて人は時として混亂の白晝夢に醒はれるであらう。生活と思索と道德との上に立つて、逡巡するとき本書はより新しい思惟の扉開を敎へ更に之を數學的に指し示すものだ！

四六判布裝本文二二三頁 定價一圓五〇錢 送料一四

日本工藝沿革史

神奈川縣立工業學校圖案課長 **金子清次著**

菊判上製二七四頁 定價二・五〇 送料一四

本書は我邦に於る上古時代より現代に至る迄美術工藝及び產業工藝の發展の推移を詳細に述べたもので、上古前期、上古後期、奈良朝、平安朝前期及び後期、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代、明治時代、大正、昭和時代等に分け各時代の工藝の發生、進步を說き更に之が美術的批判に迄論及して剩す所なし。其の論旨の整然として問題の中樞を衝くは實に一偉觀である。

柳田國男著 **民間傳承論** 菊判上製二九三頁 定價二・一〇 送料一四

田邊章一著 **トーキー大日本帝國史** 四六判三五四頁 定價一・三〇 送料一四

風俗研究所長 **江馬務著** **國文故實風俗語集釋(容儀服飾篇)** 菊判上製二五〇頁 定價四・六〇 送料一三

理學士 **佐々木彦一郎著** **經濟地理研究** 菊判上製三三五頁 定價一・六〇 送料一四

神奈川工校教諭 **金子清次著** **基本圖案學** 菊判上製二〇〇頁 定價一・八〇 送料一四

慶大教授 **松本信廣著** **古代文化論** 菊判上製三二〇頁 定價一・八〇 送料一四

理學博士 **江淺次郎著** **猿の群から共和國まで** 菊判上製三〇六頁 定價一・八〇 送料一四

東京市神田區駿河臺三丁目 **共立社** 振替東京四六〇七四番 電話神田一五一八・二六二四番

さきに完譯三卷の豫約頒布を再びしたが、世の翹望は益々廣く、眞價は愈よ知れ渡つた。然るにその要望に密に應へずにおくことは遺憾の極みである。ここに改めて普及のための抄譯版を上木することにした。如何に多くの識者が本書を江湖に推薦し、又文藝懇話會が飜譯に對して最初の賞を授與した大譯業であることは周知のことであらう。殊に今日の如く力と理とが悲しき對立をしてゐる世には、高き常識の書として、心の糧として座右すれば、我等の眼界を深く且つ廣くし、我等の心境をして愈々濶達無礙ならしめるであらう。

選抄 モンテーニュ 隨想錄

本多顯彰氏評　モンテーニュの「隨想錄」は、聖書ほどではなくとも、とにかくヨーロッパ文學に廣い影響を與へた古典であり、孤立した文學的制作ではないのだから、常に座右にそなへて讀み且つ參照すべき書である。だから本當は全譯を手元に持つのが便利なのだが、短い時間に手取り早く彼を知りたいと思ふ人々はこの「選抄」を讀むのがいい。

長與善郎氏評　モンテーヌのものは初めて讀んだのですが、特色は讀んでゐて何となくのんびりした氣持になれること。而もその中に深い叡智の言葉が光つてゐて、些かも理窟じみず、尊い經驗としてなだらかに此方の胸に入つてくる滋味、佛蘭西人らしい表現の藝術味等にあると思ひます。

關根秀雄譯

自ら「モンテーニュ隨想錄」を選抄して、以て凡ての同胞に贈る。何れも萬人必讀の書百冊、爲政者にも役人にも一般人民にも、宗教家にも信徒にも、醫者にも病人にも、教師にも學生にも、老人にも若者にも、又親たる人にも子たる者にも、必ずや忠告と激勵と、健康と幸福とを、齎すであらう。

成程、原書は、四百年前、しかも異朝の人に、書かれたものであるけれども、我等は、宛も今日現存の一自由人の手記の如くに、何等の樣偏智識なくとも、之を味到し活用することが出來るであらう。否、現代の日本人には、かゝる漢の古典以上に、多くの共鳴を以て、新奚せらるゝことゝ思ふ。（譯者）

四六判　五二二頁　總布裝　箱入

定價二圓　送十四錢

忽ち三版

パンフレット送呈

東京市下谷區　振替東京三三三二八　電話神田三三五八

白水社

短歌入門

四六判端麗本　本文三六〇頁　定價一圓五十錢　送料（四種）十二錢

土屋文明著

〔待望の書愈々發賣〕

短歌入門の書はこれまで先輩によつて幾つか書かれてゐるが、正岡子規の傳統相承のものは島木赤彥の歌道小見ぐらゐなものである。併し環境は進轉する、新時代の氣運に適應して、然かも正しき道を導くべき入門の書はいつも必要であつて、長いあひだ歌壇の主潮流にゐたアララギ流派の入門書は熱望の聲を聞くこと久しくして未だその出現を見るに至らなかつたが、土屋文明君深く感ずるところがあり今やうやくにして本書を完成した。本書所收の「短歌概論」「現代短歌指針」の如く理論精到にして作歌の眞諦を說いた點に於て既に流派を超絕した力量ある一般歌人向のものもあるが、それよりも特色のあるのは、「短歌手ほどき」「短歌の作り方味ひ方」「初心者のために」「添削と批評」「應募歌選評」等、初學の人々に嚙んでふくめるやうに、正しい而して新時代の作歌の手ほどきをした點にある。本書に據れば、何人も心を安んじて新時代作歌の初途にのぼることが出來る。第一步は常に生涯を決定すべきものであるを思へば、本書の使命もおのづから明瞭だと信じて之を歌壇に推薦するのである（齋藤茂吉）

東京市神田區　駿河臺ノ二十　古今書院　振替東京三三五三四〇番　電話神田三三五七三番

日本の日生★

祖國の星に歸れ!!

自分達の空の星を外國の名で呼ぶ。これは永い間不思議とされてゐなかつたが、一たび「日本の星」が現れてからは、今更その不自然さが反省されて來た。誠に本書こそは我國の農村漁村に埋れてゐた星の和名約四百を東北・關東・關西・四國・九州・沖縄等に亙つて蒐集し、語源・口碑・俚謠・文獻までをも考證し、更に西洋の星座とも一々比較した最初の星の和名集であり、趣味濃かな隨筆集である。本書によつて諸君は日本の空の星を純粹の日本名で呼び、祖先同胞の感じた星への親みを自分の胸にも感じ得るのだ。清讀を仰ぐ。

四六判高雅布裝
總三八〇頁美本　定價一圓五十錢
（送料十二錢）

發見された日本名約四百!!

野尻抱影先生著

學界の激讚裡に

忽ち再版!!

東京麹町區富士見町
研究社
振替東京二八六〇一

同じ著者の星の本

肉眼・双眼鏡・小望遠鏡觀測
星座めぐり　三・〇〇　一四

十二ケ月
星座巡禮　一・五〇　六

天文隨筆
星を語る　一・五〇　六

天文隨筆
星座風景　一・五〇　六

天文隨筆
星座春秋　一・五〇　六

春夏秋冬
星座神話　二・〇〇　一二

千倉書房
好評重版圖書

東京京橋第一相互館
振替・東京九七八
電話京橋（三七一六 八一一五 八八七九）

高橋是清著	高橋是清自傳	價一・八〇 送料四六判〇・一四	
近衛文麿述	清談錄	價一・二〇 送料四六判〇・一〇	
伊藤博文述	伊藤公直話	價一・五〇 送料四六判〇・一〇	
白柳秀湖著	日本女性史話	價一・五〇 送料四六判〇・一〇	
白柳秀湖著	民族日本歷史（建國編）	價一・五〇 送料四六判〇・一三	
白柳秀湖著	民族日本歷史（王朝編）	價一・五〇 送料四六判〇・一〇	
白柳秀湖著	民族日本歷史（封建編）	價一・五〇 送料四六判〇・一五	
白柳秀湖著	民族日本歷史（戰國編）	價一・五〇 送料四六判〇・一七	
白柳秀湖著	民族日本歷史（近世編）	價一・五〇 送料四六判〇・一五	
白柳秀湖著	明治大正國民史（初編）	價一・五〇 送料四六判〇・一八	
白柳秀湖著	明治大正國民史（次編）	價一・五〇 送料四六判〇・一九	
白柳秀湖著	明治大正國民史（中編）	價一・五〇 送料四六判〇・一六	
前帝室編修官 渡邊幾治郎著	日清・日露戰爭史話	價一・六〇 送料四六判〇・一三	
前田晁著	日本古典物語	價一・五〇 送料四六判〇・一八	
柳田泉著	東洋古典物語	價一・五〇 送料四六判〇・一六	
江原小彌太著	男女生活の設計	價一・五〇 送料四六判〇・一四	
江原小彌太著	心の置どころ	價一・五〇 送料四六判〇・一七	
江原小彌太著	父は何をなすべきか	價一・五〇 送料四六判〇・一五	
江原小彌太著	女よ、母となれば	價一・五〇 送料四六判〇・一三	
室伏高信著	戰爭と平和	價一・五〇 送料四六判〇・一三	
前帝室編修官 渡邊幾治郎著	明治天皇と軍事	價一・五〇 送料四六判〇・一一	
前帝室編修官 渡邊幾治郎著	明治天皇と輔弼の人々	價一・五〇 送料四六判〇・一八	

シナリオ文學全集

責任編輯　飯島正・内田岐三雄・岸松雄・菅見恒夫

前衛シナリオ集

小說・戲曲・詩などの舊文學形式を打つて一丸とした新らしい文學的ジャンルがこれだ！　映畫新美學の示唆と純粹藝術化運動がこれだ!!　會ては撮影臺本にすぎなかつたシナリオを文學形態にまで高めた新鋭な泰西文壇人のフアンテジーをこゝに仰がう！

フイルムバルレ　イレーヌ・ネミロフスキー作
人生案内　エヌ・エック作
パバウオ　サルヴアドール・ダリ作
母　プトウフキン作
貝殼と坊主　アルトオ作
狂熟　ルイ・デリユック作
メルリユス　マルセル・パニヨール作
アンダルシヤの犬　ルイ・ブヌエル　サルヴアドル・ダイ　共作

シナリオ大系

シナリオの凡ゆる表現事典とシナリオ制作便覽を兼ねたシナリオ百科全書!!

シナリオとは何だ。どんな形式で書いたらいゝのか？　どんな内容を盛り込んだらいゝのか？　どんな術語を用ゐたらいゝのか？……これらに對する懇切な回答が本書である。

シナリオ文學論序說　飯島正
シナリオ・ビ臺詞　岡田眞吉
シナリオ構成　小林勝
シナリオ研究　岸松雄
シナリオ・ビ企劃　菅見恒夫
歐米シナリオ・ライター列傳　飯島正　高野口久光　澤村手彥　双葉十三郎　滋野辰彥　岡田眞吉　菅見恒夫
日本シナリオ・ライター列傳　岸松雄　滋野辰彥
シナリオ用語　滋野辰彥

全六巻内容

1 シナリオ大系
2 日本シナリオ傑作集
3 歐米シナリオ傑作集
4 映畫入オリジナルシナリオ集
5 文壇人オリジナルシナリオ集
6 前衛シナリオ集

既刊　日本シナリオ傑作集
文壇人オリジナルシナリオ集

四六判美裝　各卷三〇〇頁　送料十四
各卷　壹圓五拾錢
目下第四回配本中・毎月一册配本本年五月完結の豫定

内容見本進呈

東京市日本橋區通三丁目
振替　東京一〇八〇二番

河出書房

東日。東亞課長　吉岡文六　著

蔣介石と現代支那

定價金一圓五十錢
全一冊　送料十錢

○今後支那はどうなるのか、日本は如何にすべきか、政治も、教育も、實業もこの問題に對し正確なる認識の上に立たねば駄目だ、著者は現代支那問題に對する權威者である
○第一篇蔣介石の全面的解剖、第二篇現代支那の考察、第三篇北支問題と蔣介石、第四篇日支外交の檢討

世界知識　主幹　平野等　著

國際讀本

定價金一圓四十錢
全一冊　送料十錢

文部省推薦　社會教育ニ稗益アル優良ノ圖書ト認メ文部省令第二十二號圖書推薦規程ニヨリ推薦
○デリケートな國際關係を平易に要領よく且つ卒直に正しく說いたもの、小學上級、中學校の副讀本として適切　○極平易にかゝれた國際問題百科辭典。○大學、中學、小學校の圖書室に無くてはならぬ本

神田兆齊　著

漢詩の作り方

定價金一圓
全一冊　送料六錢

○所說丁寧懇切、引用漢詩古今二百餘首、普通最も困難とせる作詩法を、一讀容易に理解せしむ
○作詩法の外、字音引平仄判別表、四聲一覽表、兩韻文字抄、熟語表、漢詩の作り方と軸物の文句の見方、類似漢字の識別法等あり、三五判五三〇頁、ポケットに納めて野に山に隨時吟誦に便

東京市本郷區曙町十一番地
東白堂書房
振替東京六五六一〇番

露光量違いの為重複撮影

好評重版圖書

日本圖書館協會推薦圖書
陸軍少將 伊藤政之助著

現代の陸軍

皇軍の大使命を明かにし日本と支那露國、日本と我滿洲帝國陸軍戰術と列國陸軍の各講に分ちて說述す

定價一圓 送料十錢
新四六判 總クロ一高雅裝函入 總紙數三七〇頁

日本圖書館協會推薦圖書
海軍少將 匝瑳胤次著

現代の海軍

艦船兵器は多く秘密に附せられ現代海軍の核心を掴むことは困難であるが本書は其の難點を除き現勢を明かにした

定價一圓 送料十錢
新四六判 高雅裝函入 總紙數三七〇頁

日本放送協會教養部長 小尾範治著

社會教育概論

社會教育の實際に多年携つて來た著者が其の意義發達の徑路の對象、現下の實際と理想について叙述された貴重な一書

文部省推薦圖書

内容
第一章 社會教育の意義 社會教育の意義—社會教育の重要性
第二章 古代中世及び近世に於ける社會教育の發達
第三章 社會教育の對象 母體及び幼兒—兒童男女青年—成人
第四章 社會教育の施設及び方法 少年團體—男女青年團體—青年團體—勞務者教育—成人教育—教化團體—圖書館—博物館—新聞・映畫・ラヂオ—民衆體育・民衆娛樂

定價一圓 送料十錢
新四六判 布裝函入 三三〇頁

宇山熊太郎 國防論

定價一圓 送料十錢
新四六判 布裝函入 三三〇頁

杉田直樹 社會病理學(一)

定價一圓 送料十錢
新四六判 布裝函入 三〇〇頁

十時彌 最新論理學綱要

定價一圓 送料十錢
新四六判 布裝函入 三五〇頁

海軍兵學校 東郷元帥景仰錄

定價七十五錢 送料十錢
菊上製 美本 二七〇頁

二荒芳德 聖勅謹解

定價三十五錢 送料十錢
四六判 上製美本 一五〇頁

發行所 東京銀座一丁目 振替東京二一九 大日本圖書株式會社

豫約者募集

決定版

大西郷全傳

雜賀博愛著

本書は出版界にたゝきつけた一大巨彈であり、出版界初まつて以來のセンセーションを捲起してゐる。現世混沌の中にあつて、大西郷の全貌を知らずして何の英雄論ぞや!! 英雄を知らずして英雄は語れない。

第一回配本（第一卷）

少壯勤皇時代篇

第一卷主要内容—幕末亂離の風雲を乘切り得たこの巨人の青年時代は血沸き肉躍るの痛快味がある。
第一章 大西郷の生れし郷土
第二章 西郷吉之助の出生とその前後
第三章 島津齊彬を中心に
第四章 天下の西郷吉之助
第五章 月明の薩摩潟
第六章 絶海孤島への流謫

額面用南州翁肖像進呈

即刻申込あれ
毎日註文殺到!!

卷數 全六卷
體裁 菊判天色五百餘頁 總布裝上製函入
配本 第一回配本中 毎月一册配本
定價 毎月三圓五〇錢
送料 内地二四錢 海外六〇錢

配本開始!!
▼豫約者ニ限リ本社發行ノ雜誌「展望」創刊號ヲ無代贈呈ス

東京市麴町區飯田町一丁目七番地九
章華社内
大西郷全傳刊行會
振替東京六七五二二番
電話九段三八七二番

露光量違いの為重複撮影

好評重版圖書

日本圖書館協會推薦圖書
陸軍少將 伊藤政之助著

現代の陸軍

皇軍の大使命を明にし日本と國、日本と支那滿洲露と我陸軍、帝國陸軍、列國陸軍戰術の各講に分ちて說述す

定價一圓 送料十錢
總紙數四六判高雅裝三三〇頁

日本圖書館協會推薦圖書
海軍少將 匝瑳胤次著

現代の海軍

艦船兵器は多く秘密に附せられ現代海軍の核心を掴むことは困難であるが本書は其難點を除き現勢を明かにした

定價一圓 送料十錢
總紙數新四六判クロース裝高雅裝三七〇頁

日本放送協會教養部長 小尾範治著

社會教育概論

社會教育の實際に多年携つて來た著者が其の意義發達の徑路の對象、現下の實際と理想について叙述された貴重な一書

文部省推薦圖書

容內

第一章 社會教育の意義
社會教育の意義—社會教育の重要性
第二章 社會教育の發達
古代中世及び近世に於ける社會教育
第三章 社會教育の對象
母體及び幼兒—兒童男女青年—成人
第四章 社會教育の施設及び方法
少年團體—男女青年團體—青年教育—勞務者教育—成人教育—教化團體—圖書館—博物館—新聞・映畫・ラヂオ—民衆體育・民衆娯樂

定價七十五錢 送料十錢
菊上製美本二七〇頁

宇山熊太郎 國防論
新四六判布裝函入三三〇頁 定價一圓 送料十錢

杉田直樹 社會病理學(一)
新四六判布裝函入三〇〇頁 定價一圓 送料十錢

十時彌 最新論理學綱要
新四六判布裝函入三五〇頁 定價一圓 送料十錢

海軍兵學校 東郷元帥景仰錄
菊上製美本二七〇頁 定價七十五錢 送料十錢

二荒芳德 聖勅謹解
四六判上製美本一五〇頁 定價三十五錢 送料十錢

發行所 東京銀座一丁目 振替東京二一九 大日本圖書株式會社

豫約者募集

決定版

大西郷全傳

雜賀博愛著

全卷お買上の方には額面用南州翁肖像進呈

本書は出版界にたゝきつけた一大巨彈であり、出版界初まつて以來のセンセーションを捲起してゐる。現世混沌の中にあつて、大西郷の全貌を知らずして何の英雄論ぞや!! 英雄を知らずして英雄は語れない。

即刻申込あれ
毎日註文殺到!!

第一回配本（第一卷）

少壯勤皇時代篇

第一卷主要內容—幕末亂離の風雲を乘切り得たこの巨人の青年時代は血涌き肉躍るの痛快味がある。
第一章 大西郷の生れし郷土
第二章 西郷吉之助の出生とその前後
第三章 島津齊彬を中心に
第四章 天下の西郷吉之助
第五章 月明の薩摩潟
第六章 絶海孤島への流謫

卷數 全六卷
體裁 菊判天色五百餘頁 總布裝上製函入
配本 第一回配本中 毎月一冊配本
定價 毎月三圓五〇錢
送料 內地二四錢 海外六〇錢

配本開始!!
▼豫約者ニ限リ本社發行ノ雜誌「展望」創刊號ヲ無代贈呈ス

東京市麴町區飯田町一丁目七番地九
章華社內
大西郷全傳刊行會
振替東京六七五二二番
電話九段三八七二番

日本圖書館協會推薦

文學博士 矢野仁一先生著【支那解析研究の二部作】

現代支那概論

動く支那
動かざる支那

各四六判上製函入
紙數各三五〇頁
定價各二圓三十錢
送料各十四錢

最新刊

支那問題の複雜性は世界歷史の潮の如く押寄せる大勢の力と數千年來積疊せる歷史的傳統の力が同時に支那に働きつゝあるが爲めで現代支那を論ずるものは其の既に昔日の支那に非ざるを說き、或は舊態依然たるを說く等その歸趨に迷はざるを得ず。然く事態は支那を知ることの急迫せる今日に於て既に支那に對する書籍の簇生を見ると云えど其の信は措けず、博士は玆に吾人の輿望に答へて現代支那を完膚なき迄に徹底的批判研究を進めて本書二篇を著さる。果して變動的、發展的、時局的蒙昧なる支那の正體とは何如？

【目次】

動く支那

支那の邊疆問題
歷史上より觀たる蒙古問題
歷史上より觀たる西藏問題
歷史上より觀たる新疆
歷史上より觀たる雲南邊疆
支那の上匪
支那の秘密結社敎匪と會匪
北支問題と支那の本質問題
北支那の自治と其の發展性
歷史上より觀たる北支那問題
西洋諸國の對支外交と支那の外交
蒙古問題最近の變局

動かざる支那

支那の社會の固定性
支那の歷史における近代と古代
共和政治と帝政遺產
支那の帝政時代と共和政治時代
支那における外國人の治外法權
王道政治の理論と實現
支那の眞の統一と日本の對支那外交
支那內亂の惨禍と國民革命
三民主義と露西亞の支那援助
（支那の對局と日本の好意政策の限界）

文學博士 矢野仁一先生著

滿洲國歷史

【第三版】

四六判上製函入
紙數三八〇頁
定價二圓六十錢
送料十四錢

列强の耳目を聳した滿洲は今や儼然たる國家として建國三年の輝かしい歷史を積むに至つた。目つてのリツトン報告書、國際聯盟の觀點や如何、著者の史眼よくその謬見を迫して建國の使命を說き滿洲事變の核心に觸れて東洋千古の理念を闡した好評の書。【文部省推薦書】

發行所 東京市神田駿河臺三丁目三番地 振替口座東京二〇八九 目黑書店

終